

# 実践感覚と行為者の能動性

## —ハビトゥス論の再検討—

2014 年

奈良女子大学大学院 人間文化研究科

博士後期課程 社会生活環境学専攻

村田 賀依子



## 目 次

はじめに	5
------	---

---

### 第1部 ハビトゥス概念の重要性と問題点

---

第1章 ハビトゥスとは	13
1 二元論とは	13
2 ハビトゥスと、ブルデュー社会学の基本概念	16
3 ハビトゥス概念による客観主義／主観主義の乗り越え	23
3-1 研究者のものの見方の特殊性	24
3-2 人間観としてのハビトゥス	27
第2章 ハビトゥス概念にたいする評価と批判	33
1 ハビトゥスへの評価	33
2 ハビトゥスへの批判	34
第3章 実践感覚へ	43
1 ハビトゥスの問題点を乗り越えるために必要なこと	43
2 習慣としてのハビトゥス／実践感覚としてのハビトゥス	45
3 実践感覚についての先行研究	49

---

## 第2部 ブルデューを読みなおす——実践感覚に着目して

---

第4章 意味を与える実践感覚——主観的意味と客観的意味	57
1 感覚・意味・方向——sens の3つの意味	57
2 主観的意味と客観的意味	60
3 主観的意味と客観的意味の関係	65
4 プロセスとしての実践感覚	68
第5章 未-来を先取りする実践感覚——過去と現在	71
1 未-来と実践感覚	71
2 現在のなかにある未-来、現在に向かう実践感覚	73
3 過去と現在の交点としての未-来	76
第6章 実践感覚と行為者の能動性・創造性——第2部のまとめ	81
1 あらためて実践感覚とは——4章と5章のまとめ	83
2 実践感覚と行為者	86
2-1 行為者と客観的意味=方向	86
2-2 行為者と現在	89
2-3 あらためて行為者の能動性とは	92
3 行為者の実践的反省——身体化した過去と客観的な世界がずれるとき	96
4 行為者の創造性の可能性	105

終章 構造から感覚へ——本稿の意義と可能性	109
1 まとめ	109
2 構造としてのハビトゥスから、実践感覚としてのハビトゥスへ	113
3 二元論を乗り越える新しい行為者像へ	119
文献	123
初出一覧	135
謝辞	136



## はじめに

本稿は、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu, 1930-2002）のハビトゥスをめぐる理論について内在的に検討を深めることをとおして、新しいハビトゥス理解の可能性を探り、新しいブルデュー像を提示することを目的とする。

ブルデューは、20 世紀後半の社会学を代表する社会学者である。彼の理論は、既存の理論的立場から距離をとり、ハビトゥスなどの魅力的な概念を駆使し、人々の日常的な実践（*pratique*）と社会構造のかかわりを鮮やかに描き出す。また、ブルデューは、理論的な研究だけではなく、階級・階層、芸術、趣味、教育などについての研究者としても高く評価されている。そしてブルデュー理論が関係する領域は社会学にとどまらず、人類学、哲学、文学研究など幅広い。ブルデューの議論や彼の概念は、幅広い領域において参照・言及され、多くの研究者に大きな影響を与えつづけている<sup>1</sup>。「これだけ幅広い人文・社会科学分野でその影響が感知され、論じられ、賛同者を生み、反発も生んだ人物も少ない」（宮島 2003: 371-2）のである。

ブルデューの魅力は、彼の仕事の独自性や幅広さだけではなく、彼の思考が 20 世紀後半の代表的な社会学理論の数々と共鳴するものだという点にもある。宮島喬が指摘するように、「かれ [=ブルデュー] の再生産、ハビトゥス、<sup>フラティイグ</sup>慣習行動などの概念、考え方が、奇しくも同時代の英米の若干の社会学者、人類学者たちの理論と通底するものをもっている」（宮島 2003: 372, [ ] 内は引用者による）。宮島は、ブルデューの理論と通底する考え方をもち研究者として、イギリスのアンソニー・ギデンズや、アメリカのゴフマニストたち、芸術や文化について論じる研究者を挙げているが、他にも、ノルベルト・エリアスとは思考様式に共通性が見られ（関係論的思考様式の重要性をふたりとも主張している）、行為の描きかたでは、ギデンズやエスノメソドロジーとの共通点が指摘されている（江原 2005: 33）。ブルデューの理論枠組みは、20 世紀後半の社会学理論の流れを代表・象徴するものだと言えるだろう。ブルデュー理論を理解することは、現代の社会学理論の流れや特徴を理解することでもあるのである。

本稿は、ブルデュー理論を「行為と行為者についての理論」という角度から検討し、ブ

---

<sup>1</sup> 日本において社会学内外でブルデューの仕事がどう受けとめられているのかは、宮島・石井編（2003）を参照。アメリカでのブルデュー受容・ブルデューを受けての研究の展開については、Lamont(2012)、Lizardo(2012)、Mische(2012)において詳しく論じられている。

ブルデューの幅広い研究の基盤にある人間観・行為観に焦点を当てる。ブルデューの理論は、従来の社会科学や哲学が囚われていた客観主義／主観主義、社会／個人、無意識／意識、連続性／変化といった二元論を乗り越えることを目指している。だが、ブルデュー理論は、乗り越えようとした二元論の片方の項、客観主義や社会の側に偏った理論だと評価されることが多い。行為理論としては、慣習的・無意識的な行為に光をあてた／のみに着目した理論として評価・批判されており、能動的な行為者の不在が指摘されている。本稿は、ブルデューの議論を内在的・詳細に検討し、ブルデューの議論のなかに創造的で能動的な行為観・行為者像を見出すことを目指す。その作業をとおして、二元論を乗り越えるとはどういうことか、社会学において社会と行為者の関係はどのように概念化されるべきか——どのようにして社会と行為者は結びついているのか、社会に規定されながらも能動的で創造的な行為者はどのように理解されるべきか——について考えたい。

二元論の問題は、ブルデューだけではなくギデンズなど多くの研究者が取り組んだ、現代の社会学理論が直面する代表的な問題である。また、二元論というタームが言及されない場合でも、たとえば **reflexivity** 概念などをめぐって、行為者と社会をどうつなぐか、主観や行為者を社会と関連づけてどう概念化すべきかについて、多くの議論がおこなわれている（たとえば **Farrugia 2013** など）。本稿は、どちらかという客観主義や社会の側に偏っていると評されるブルデュー理論のなかに能動的な行為者を見出すことによって、二元論の問題、行為者と社会の関係の問題にたいして、これまでとは異なる新しい解答の可能性を提示したい。

## ハビトゥスと実践感覚

本稿は、上記の問題に取り組むために、ブルデュー理論において二元論を乗り越える鍵になっている「ハビトゥス (**habitus**)」概念に焦点を当てる。

ブルデューは、日常的に実際的におこなわれる行為である「実践 (**pratique**)」に目を向け、実践についての理論を練りあげた。この実践の理論の核となっているのがハビトゥス概念である。ハビトゥスとは、社会的世界についての経験のなかで形成された性向 (**disposition**) のシステム、知覚・思考・行為の図式であり、ブルデューの人間観や行為観の基盤にある概念である。ブルデューはこのハビトゥス概念によって、客観主義／主観主義の対立——行為者にたいする社会による条件づけを重視するか、行為者の自由や能動性を重視するか——を乗り越えることができると主張している。ハビトゥス概念は、ブルデュー理論の最大の目的である二元論の乗り越えを背負った概念であると言える。

このハビトゥス概念にたいしては、先行研究において評価も高いが批判も多い。とくに目立つ批判は、ブルデューがハビトゥスによって可能になるとした二元論の乗り越えが十



分には果たされてはおらず、客観主義寄りだという批判である。多くの論者が、ハビトゥス概念によっては、行為者の能動性や意識、主観について十分に説明ができないと評している。このような評価にもとづいて、多くの研究では、ブルデューに足りない要素をブルデュー理論に補う試みがおこなわれている。

たしかに、ハビトゥスについてのブルデューの議論には不明瞭な部分が多く、実践への行為者の関与のありかたはわかりにくい。ブルデューがハビトゥスを能動的な実践の原理だと考えていることはよく伝わってくるが、どのようにして能動的な実践が行為者によっておこなわれるのか、その過程はハビトゥスの「ブラックボックス」のなかに隠されてしまい、見えにくい。しかし、本稿は、先行研究のようにブルデューの理論やハビトゥス概念を客観主義寄りのものだとして諦め、外からブルデューに足りない要素を補う必要があるとは考えない。別のアプローチが可能だと考える。それは、ブルデューの議論を詳細に検討することで、「内から」問題点を乗り越えること、ブルデュー自身の議論のなかに能動的で創造的な行為者を探し出すことである。

なぜそのようなアプローチが可能なのか。それは、ハビトゥス概念やブルデュー理論が解釈に幅のある概念や理論であり、まだ十分に理解されているとは言えないと考えるからだ。

ハビトゥス概念やブルデューの議論にたいしては、曖昧さや理解のむずかしさが指摘されることが多い。D. Swartz は、ハビトゥス概念は多くの社会学者や人類学者によく知られているが、よく理解されているという状態からは程遠く、ブルデューの議論に精通している人の間でも、この概念が何を表しているのかについて、かなりの意見の不一致があると言う (Swartz 1997: 96)。また、ハビトゥス概念の理解のむずかしさは、ブルデューが、「概念というものは、開かれたもの、暫定的なものであり続けてもかまいませんし、ある意味では、そうあらねばなりません」(Bourdieu 1987: 54=1991: 69-70) というスタンスをとっていたことにもよるだろう<sup>2</sup>。倉島哲は、ハビトゥスの曖昧さについて次のように述べる。

ブルデュー自身もハビトゥスの定義を曖昧なままにとどめることについてある種の開き直りを見せている。彼は、社会学的実践において重要なのは概念の厳密な定義よりも言語化不可能な社会学者の「メチエ (métier, craft, 職業的な技芸)」であるとし、著作のあちこちで曖昧さの有用性を強調する。

……「[ハビトゥスとは何か強力な生成母体である]というブルデューからの引用を受けて」このような意図の告白は、ブルデューの著作やインタビューの随所に現れる。概念の客観的な定義よりも、概念に自分が込めた意図を強調する立場は、科学的な方法論としては問題があるが、これを一概に非難するわけにはいかない。なぜなら、ブ

---

<sup>2</sup> これはハビトゥス概念についてのコメントではないが、ハビトゥスを含め、ブルデューの用いるほとんどの概念がこの性質をもっていると考えられる。

ブルデューはハビトゥスの曖昧さを縦横に駆使することで、教育論・芸術論・国家論など、多様な分野でめざましい成果を生み出しているからである。(倉島 2007: 22-3, [ ] 内は引用者による)

ハビトゥスが明確な定義のない、曖昧さのある概念であるならば、実は、ハビトゥス概念の理解自体にまだ検討の余地が残されているのではないだろうか。ブルデュー理論やハビトゥス概念を「客観主義寄り」として諦める前に、ブルデュー理論やハビトゥス概念のポテンシャルはこれまでの理解で十分に引き出されているのか、ハビトゥス概念には理解されていない側面があるのではないかと問うてみる必要があると、本稿は考える。

そこで本稿では、ハビトゥスに隠れた一面がないかを検討してみたい。ハビトゥスは一般的には、慣習的な実践の原理、広い意味での習慣をあらわす概念と受け取られている。しかしハビトゥスには、習慣的な面とは別の側面がある。それは「実践感覚(sens pratique)」としてのハビトゥスである。実践感覚は一般的には、ハビトゥスのたんなる「たとえ」、ハビトゥスによる実践がスポーツの巧みなプレイヤーの動きのように身体的・感覚的・無意識的におこなわれることを示す「例」のようなものと理解されている。実践感覚の能動性や、実践感覚と行為者の関わりについて指摘する研究が少数存在するが、管見では、ブルデュー理論に沿って実践感覚概念固有の可能性を引き出すという観点からの検討はまだ十分におこなわれていない。実践感覚は、ハビトゥスの一面を象徴する概念でありながら、これまで十分に理解・検討されることのなかった概念であると言える。

本稿は、この「実践感覚としてのハビトゥス」に注目し、実践感覚についてのブルデューの議論を詳細に検討することによって、実践感覚をめぐるブルデューの議論のなかに行為者の能動性を見つけ出すことを試みる。そして、ハビトゥスについての新たな理解をブルデューの議論の内から引き出してみたい。本稿は、これまでハビトゥスにたいしておこなわれてきた数々の批判を、ブルデューの議論の内から乗り越える、すなわち、実践感覚をめぐる議論からまだ理解されていない実践感覚・ハビトゥスの側面を引き出すことによって乗り越えることを目指すものである。

## 本稿のこのあとの流れについて

本稿は、第1部と第2部の二部構成である。前半の第1部では、基本的な説明と先行研究のレビュー、本稿の視座の設定をおこなう。後半の第2部では、実践感覚概念に注目し、実践感覚からブルデュー理論を「読みなおす」作業をおこなう。

まず第1部の1章では、ハビトゥスについて概説する。ブルデューは、客観主義と主観主義の限界に向き合うなかで、ハビトゥス概念を練り上げた。そこで、まずブルデューが見出した客観主義と主観主義の問題点を論じ、その後、ハビトゥスとは何か、ハビトゥスはどのように客観主義と主観主義それぞれの問題点を乗り越えようとしたのかを説明する。

2章では、ハビトゥス概念にたいする先行研究の評価と批判をレビューする。ハビトゥスにたいしてはさまざまな評価、さまざまな批判があるが、そのなかに見られる大きな傾向は、ハビトゥス概念では能動的な行為者や主観側についてのフォローが十分ではなく、二元論を抜け出す道を完全には示すことができていないというものだ。ブルデューに足りない要素を補うことによってハビトゥスの問題点を乗り越えようとしている先行研究の試みについても言及する。

3章では、本稿はハビトゥス概念をどう評価するのか、ハビトゥス概念をどう検討するのかについて論じる。本稿も、先行研究が指摘するように、ブルデューのハビトゥスについての議論には実践の過程における行為者の位置が見えにくいという問題があると考え。しかし先行研究とは異なり、これまで理論的検討がほとんどなされていない実践感覚をめぐるブルデューの議論に着目することで、「ブルデューの中から」ハビトゥスの問題点を克服することが可能だと論じる。そして、実践感覚についてこれまでの研究でどのような議論があるかを検討し、実践感覚について何が検討されていないか、本稿は実践感覚概念をどう検討すべきかを考える。

第2部では、実践感覚に着目してブルデューの議論を読みなおし、能動的な行為者の存在を実践感覚・ハビトゥスのなかに見出していく。この第2部では、実践感覚(*sens pratique*)の「*sens*」の「感覚」以外の意味——「意味」と「方向」——が鍵になる。

4章では、意味としての *sens* が主役である。実践感覚と意味としての *sens* の関係を考察する。実践感覚による実践のなかで立ち現れる意味には、「主観的意味」と「客観的意味」の2つがある。この主観的意味と客観的意味の読み解いていくことで、実践感覚は、身体化された過去の経験にもとづいた感覚的な知というだけではなく、主観的世界と客観的世界を照らし合わせつづける「過程」をも示す概念であることを明らかにする。

5章では、方向としての *sens* について考察するために、ブルデューが方向の言い換えとして用いていた「未-来 (*à-venir/ à venir*)」という概念に注目する。実践感覚は、「未-来の感覚」、一瞬先に起こることを先取りする感覚だと考えられている。この未-来は、従来の研究では身体化した過去の延長であると理解されているが、本稿では、未-来に過去の延長とは別の重要な側面があると主張する。ブルデューは未-来が「現在のなかにある」と言っており、未-来が「現在のなかにある」ことの意味と意義について検討することによって、実践感覚を過去の延長で未-来を描き再生産的な実践を導く無意識的な感覚と理解するのではなく、行為者が現在のなかで未-来を見出す能動的な過程を描く概念として理解することが

可能であると論じる。

第2部の最後、6章では、4章と5章の議論をまとめ、その先に、能動的な行為者、さまざまに変化する実践、創造性を発揮する行為者を見出す可能性について論じる。まず4章と5章の議論をまとめ、実践感覚による実践の過程における行為者の能動性について考察する。そして、実践が失敗したり、実践の意味を見失ったりする場合について検討し、そのような状況にも本稿が見出した実践感覚の実践モデルは適用可能であると論じる。このように議論を拡張していくことで、実践感覚やハビトゥスにもとづく行為者の実践が、一般的に理解されるように保守的なものに限定されず、創造的で変化に富むものになりうることを示したい。

終章では、本稿のブルデュー論として、そして社会学理論としての意義を述べる。本稿でブルデューの議論のなかから引き出した新しいブルデュー理解・能動的で創造的な行為者像は、ブルデューの理論を、ブルデューを越えて、ブルデューの説明の限界を越えて理解することを可能にするものであることを論じる。そして、この実践感覚をめぐる議論が、二元論の問題についてどんな新しい知見をもたらしたのか、どのような可能性をもっているのかを最後に示したい。

## 第 1 部 ハビトウス概念の重要性と問題点



## 第1章 ハビトゥスとは

ブルデューの理論を「行為や行為者をどう描いているか」という角度から検討するとき、もっとも重要な概念は「ハビトゥス (habitus)」である。

ブルデュー理論は、客観主義か主観主義かという深刻な二元論・二者択一状態を乗り越えることをめざしている。この乗り越えの鍵が、ハビトゥス概念である。この1章では、ブルデューの理論の鍵概念であるハビトゥス概念について説明したい。

まず、ブルデューが乗り越えようとした二元論とはなにかを説明する(1節)。その後、ハビトゥスとはどのような概念か(2節)、ブルデューはハビトゥス概念によってどう二元論を乗り越えようとしているのか(3節)、見ていこう。

### 1 二元論とは

行為や社会についての見方には、大きく分けて2つの立場がある。一方は、行為を社会的要因によって説明し、研究者が客観的に見出す社会に重きを置く立場であり、もう一方は行為を個人による意味づけや動機によって説明し、行為者が経験する社会から社会をとらえようとする立場だ。前者の立場は客観主義と呼ばれる。この立場は、人々の行為の集合に見出せる構造や規則性、行為者にたいする社会による条件づけを重視するものだ。後者は主観主義的な見方であり、個人・創造性・意識・自由の側に重きを置く。

ブルデューは、社会科学を分割する最も基本的で破滅的な対立は、この主観主義と客観主義<sup>3</sup>の対立であると言う。

社会科学を人為的に分割する諸対立のうちで最も基本的で最も破滅的な対立は、主観主義と客観主義の対立である。この分裂がほとんど変異なしにたえず再生する事実そのものは、この対立しあう認識様式が社会現象学にも社会物理学にも還元できない社会的世界の科学にとって不可欠でもあることを十分に証言している。(Bourdieu 1980: 43=2001(1): 37-8)

---

<sup>3</sup> 安田尚は、『実証主義』と『理論主義』、『グランドセオリーと実証的経験主義』、そして『実践感覚』(一九八〇年)でとりあげた『レヴィ=ストロースの構造主義』と『サルトル流の現象学 [= 想像的人間学]』と次々に役者は変われども、繰り返される対立の背後にある真の対決点は、『主観主義と客観主義の対立』であった」(安田 1998: 23)と述べている。

主観主義と客観主義の対立は破滅的なものではあるが、この対立が長いあいだ存在し続けていることから考えると、どちらも社会について重要なことを明らかにしていると思われる。そこでブルデューは、この対立を「乗り越える」、主観主義の重要な点も客観主義の重要な点も保持したままで対立を止揚する方法を考えようとする。そしてブルデューは、この客観主義と主観主義の二元論を乗り越えるものとして、自身の理論を提示する。このブルデューの理論の中心となる概念が、「ハビトゥス」である。ハビトゥス概念は、客観主義と主観主義の対立状態を乗り越える概念とされている。

そこでこの節では、客観主義と主観主義をブルデューはどのようなものと考え、どう批判したのか、ブルデューの議論に沿ってみたい。ブルデューがどのように客観主義と主観主義を批判しているのかを知ることは、ブルデュー社会学の射程、輪郭を知り、ハビトゥス概念がなぜ必要とされるのか、その理由を理解することにつながる。ブルデューによる客観主義・主観主義それぞれにたいする批判を取りあげることで、ブルデューの問題関心を確認しておきたい。

## 客観主義について

まずは、客観主義について説明する。客観主義は、「個人的意識と意志から独立した客観的規則性（構造、法則、関係の体系、等々）を確立することをめざす」（Bourdieu 1980: 44=2001(1): 39）。ブルデューが客観主義としておもに批判の対象にしたのは、レヴィ=ストロースの構造主義である。ブルデューは「良き構造主義者」（Bourdieu 1980: 22=2001(1): 16）であった時期もあるが、彼が構造主義的方法を実行するなかでぶつかった困難が、ブルデューを構造主義＝客観主義の欠点の認識と乗り越えへ向かわせることになった。

構造論的方法をとことんまで突き詰めようと努力するほど両義性や矛盾がたえず立ち現われてきたものだが、とくにこの両義性や矛盾のために、私は方法そのものを問うというよりも、諸々の実践に首尾一貫して適用されるという事実のなかに暗黙裡に想定されている人類学的テーゼをこそ問わざるをえなかった。（Bourdieu 1980: 22=2001(1): 17）

構造主義的な研究では、実践に首尾一貫して適用される図式やモデルを作ろうとする。しかし現実の実践には、首尾一貫した図式にはおさまりきれない両義性や矛盾が数多くあった。そこでブルデューは、ある首尾一貫した図式がすべての実践に適用されるという想定そのものがまちがっているのではないかと考えた。

「もし諸実践がそれらを説明するために構築される産出公式、すなわち独立し首尾一貫



する公理集合を原理とするのであれば、完全に自覚された産出規則によって産出された諸実践は、実践を実践として独自に定義づけるすべてのこと、すなわち不確実性やぼやけを奪われてしまう」(Bourdieu 1980: 26=2001(1): 20)。現実の実践は不確実性やぼやけを常に含んでいる。しかし構造主義者がつくる論理的なモデルはこの不確実性やぼやけを内包することができない。したがって、研究者が人々の実践を理解するためにつくる図式やモデルは、あくまでも人々の実践に首尾一貫した説明を与える説明のためのモデルであり、それは人々の実践の産出原理ではない。

しかし、構造主義＝客観主義は、研究者がつくった論理的な図式やモデルを行為者の実践のモデルと取り違えてしまう。そして、構造主義＝客観主義的見方では、研究者が見出した構造が主人公になり、行為者は研究者が見出した構造やモデル、図式の付帯現象、「担い手」(Träger) にすぎなくなってしまう (Bourdieu 1980: 70=2001(1): 64, 1987: 19=1991: 19, 1987: 31=1991: 37)。その結果、構造主義的＝客観主義的な観点からは行為者の現実とはとらえられなくなってしまうのである。

## 主観主義について

次に、ブルデューが客観主義とともに乗り越えようとしたもう一方の項である、主観主義にたいするブルデューの批判を見ていきたい。主観主義は、行為者の意志、理性、自覚的な意識、意図などを重視し、客観主義＝構造主義が取り逃した行為者の「生きられた経験」を重視する。だが主観主義の認識様式は、「社会的世界の『生きられた』経験を独自に特徴づけるもの、すなわちこの世界を自明のもの、当然のこと (*taken for granted*) として理解すること (*appréhension*)、を記述する以上のことはできない」(Bourdieu 1980: 44=2001(1): 38)。構造主義とは逆に、主観主義は行為者の外側に目を向けようとしないため、主観主義が描く「生きられた経験」がどのように可能になるのかを、主観主義の説明はとらえそこねてしまう。また、主観主義は「持続する心的傾向や起こりうる可能性 (*éventualités probables*) に類似する何ものも認めることができないから、それぞれの行為を、主体と世界との一種の先例なき対決 (*confrontation*) にしてしまう」(Bourdieu 1980: 71=2001(1): 65)。主観主義が想定する行為者は、いつも新しく世界に出会い、その都度熟慮の上で決断する存在である。このような人間像は、とくに日常的な実践について考える場合には現実的ではない。主観主義は、行為者の経験や意図などを重視するが、結局行為者の当たり前の日常を支えているものに到達できないのだ。

客観主義も主観主義も、ちがったかたちで、行為者の現実を取り逃している。客観主義は、行為者の外側にある構造を重視する結果、行為者不在の論理的すぎる実践モデルをつ

くってしまう。主観主義は、行為者の内側を重視する結果、行為者の日常を支えているものが見えなくなる。そこでブルデューは、このような二元論の見方にたいし、「行為の現実的論理を対立させなければならない」(Bourdieu 1980: 95=2001(1): 90) と言う。それでは、行為の現実的論理とは何だろうか。

## 2 ハビトゥスと、ブルデュー社会学の基本概念

ブルデューがこの「行為の現実的論理」を描き出すために用いる概念が、ハビトゥスである。

わたしたちの日常的な実践には、客観主義が注目するような規則性や構造もあれば、同時に規則性や構造にはおさまりきらない部分もある。主観主義が重視するような柔軟性や能動性、創造性もある。ブルデューは、わたしたちの日常的な実践が規則性と柔軟性の両方をあわせもつことを重視した。このような日常的な実践には、科学的な知が考えるような首尾一貫性や論理性ではとらえきれない、独特の知や論理がある。

日常的な実践に特有の知・論理のありかたを、ブルデューは、ハビトゥス・実践感覚・実践の論理・*modus operandi* などと表現している。ブルデュー以外の議論では、このような日常の知は「日常実践の『もののやりかた』(*manière de faire*)」(de Certeau 1980=1987)「メティス (策略的知性)」(今村 1989: 65-88)「実践知」などと呼ばれている。ブルデューのハビトゥス概念の特徴は、このような日常的な実践知と社会構造との関係を論じた点にある。ブルデューがハビトゥス概念を用いて示す実践観は、行為者を、内面化した規則や規範、社会構造にしたがっているだけではなく、完全に自由に行動しているのでもない存在、ハビトゥスというかたちで社会に精通し、規則や構造のあいまいさや多義性のはざままで状況に合わせて柔軟に実践をおこなう存在として考えることを可能にする。

ハビトゥス概念の主要な機能のひとつは二つの相補的な誤り、ともにスコラ的見方に発する誤りを退けることにある。ひとつは機械論で、行動は外在的な原因による拘束の機械的結果であるとする誤りである。他方は目的論で、合理的行動理論がその最たるものだが、行動はチャンスと利益の計算の所産なのであるから、行為者は自由に、意識的に、また、一部の功利主義者が言うように熟知して (*with full understanding*) 行動する、とする誤りである。これらの理論に対して、社会的行為者は過去の経験によって身体のうち書き込まれたハビトゥスを備えている、と指定しなければならない。このハビトゥスという、知覚・評価・行動図式のシステムが実践的認識行為——それらが反応するよう仕向けられている、条件付きで慣習的な (*conventionnel*) 刺激を見分け認知することにもとづく実践的認識行為——を遂行することを可能ならしめ

るのである。そして、目的を明示的に措定することなしに、また手段を合理的に計算することなしに、適合した、そして絶えず更新される戦略を生み出す（ただしそれら行為がその所産であり、それら行為を定義するところの構造的諸拘束の範囲内で）ことを可能ならしめるのである。（Bourdieu [1997]2003: 200-1=2009: 235-6）

ハビトゥスは、社会についての思考によく見られた二項対立——客観主義／主観主義、社会／個人、決定論／自由、無意識／意識、条件づけ／創造性といった二項対立——を乗り越えることを可能にするとブルデューは言う（Bourdieu 1980: 92=2001(1): 87, 1987: 20=1991: 21 など）。ハビトゥス概念に依拠することは、客観主義と主観主義という、行為・社会についての2つの見方の対立を乗り越えるための方法と位置づけられる。

このハビトゥス概念への依拠というものは、主体なき構造主義か主体の哲学かというこの二者択一を抜け出すひとつの方法として理解することができます。（Bourdieu 1987: 20=1991: 21）

それでは、ハビトゥスとは何か、詳しく説明しよう。

生存のための諸条件のある特殊な集合（une classe particulière）に結びついた様々な条件づけがハビトゥスを生産する。ハビトゥスとは、持続性を持ち移調が可能な（transposables）諸性向（dispositions）のシステムであり、構造化する構造（structures structurantes）として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造（structures structurées）である。（Bourdieu 1980: 88=2001(1): 83）

まずハビトゥスとは、それぞれの社会的位置における経験のなかで形成された、性向（disposition）のシステム、知覚・思考・行為の図式である。別の言い方をすれば、社会の客観的構造によって構造化された、行為者に身体化された構造（「構造化された構造」）がハビトゥスだ。このハビトゥスは実践や表象を産出・組織化する原理になる（「構造化する構造」）。

そして「実践と表象とはまた、客観的に『調整を受け（réglé）』『規則的で（régulier）』ありうるが、いかなる点でも規則（règle）への従属の産物ではない」（Bourdieu 1980: 88=2001(1): 84）。ハビトゥスから産出される実践は、ハビトゥスによって構造化され自然と規則性を持つことになる。

ハビトゥスは、人々の「歴史の生産物」（Bourdieu 1980: 91=2001(1): 86）であるため、このハビトゥスによって「過去の経験の能動的な現前」（Bourdieu 1980: 91=2001(1): 86）

が保証される。したがってハビトゥスは「実践相互の符合と、時間の推移の中での実践の恒久性を保証する傾向をもっている」(Bourdieu 1980: 91=2001(1): 86) 慣習的な実践の原理ということになる。また、ハビトゥスは、「所与の構造(たとえばある階級の生活諸条件)のなかで行なわれる社会化の所産であって、その構造への事実上の適合性という性格をもっている」(宮島 1994: 277)。ハビトゥス概念によって、行為者の実践の恒常性や、所与の構造への適合性が説明される。

そして、ハビトゥスによって、人々の行為はたがいに合わせようという意図なしで調和したものになる。ハビトゥスによる実践は、「集合的にオーケストラ編成されながらも、オーケストラ指揮者の組織行動の産物ではない」(Bourdieu 1980: 89=2001(1): 84)。

ハビトゥスが同じひとつの歴史の——より正確には、ハビトゥスと構造とに客観化された同じひとつの歴史の——身体化(incorporation)である限りにおいて、またその限りでのみ、ハビトゥスの産み出す実践は相互に理解可能で、諸構造に即座に整合し、相互に調和したものなのであって、主観的意図と、個人的、集合的を問わず意識的な投企(projets)とを超越した客観的意味、統一的でも体系的でもある意味を備えることになる。実践感覚と客観的意味との合致がもたらす根本的な効果のひとつは、常識(sens commun)の世界の生産にある。(Bourdieu 1980: 97=2001(1): 92)

社会的位置の近い人々、同じような環境で育ってきた人々のハビトゥスを形作った社会的条件は似かよっているため、ハビトゥスも相互に調和した、似かよったものになる。これらの人々の行う実践は、お互いに合わせようという意図や、誰かに指導されるといったことがなくても、互いに調和し、互いに理解し合えるものになる。

また、このハビトゥスとして身体化された知覚や思考、行為の図式は「移調可能」だと考えられている。「ハビトゥスは、その根本的・原理的な(fundamental)『発生的図式(generative schemes)』を生活のすべての領域にアナログカルな転移によって適用(generalize)する能力を持っている」(Swartz 1997: 108)。わたしたちは、たとえばある人の仕事の仕方、家のしつらえ、服装などのなかに、同じ傾向性(disposition)を見出す。異なる領域、異なる場面において人の実践に見出されるこのような規則性や一貫性を、ハビトゥスの図式の移調可能性は説明することを可能にする。

しかし、ハビトゥスによって実践にもたらされる規則性・一貫性はゆるやかなものであり、それはたとえるならば「次々と建増しされ、時の経過とともに累積されたあらゆるもの(部分的には不調和だが、基本的には調和的である)を持つ古い家」(Bourdieu 1980: 28=2001(1): 22)に見られる一貫性のようなものである。「装飾家が一举に外から押しつける美的な方針に従って隅々まで設計されたアパルトマン」(Bourdieu 1980: 28=2001(1): 22)のような一貫性とは異なる。ハビトゥスは規則的な実践を機械的に産出するものではなく、

ハビトゥスによって産み出される実践には、型におさまりきらないゆらぎや矛盾が含まれている。

ハビトゥスが産出する実践は完全な規則性には回収されない。このハビトゥスが規則性から外れる一面は、「行為者が予期できない・常に変化する状況を上手く処理することを可能にする戦略の生成原理」(Bourdieu 1977b: 72)、「発明術 (*art d'inventer*)」(Bourdieu 1980: 93=2001(1): 88) と言われている(ブルデューは、ハビトゥスはチョムスキーの「生成文法」と近いとも言っている(Bourdieu 1987: 19=1991: 19))。ハビトゥスが生み出す多様な状況への多様な対応は、「即興」や「不断の創案(*une invention permanente*)」(Bourdieu 1987: 79=1991: 102)、「戦略」(Bourdieu 1980: 102-3=2001(1): 98) というかたちで表現されている。また、このような「無数の可能な状況に適応した無数の『手』を生み出す」ハビトゥスは「ゲームのセンス」とも言い換えられている(Bourdieu 1987: 19=1991: 19)。

また、ハビトゥスは、身体化された実践の原理であり、無意識のうちに実践を方向づけるものでもある。ハビトゥスが産出する実践には「規則性」があるが、それは「規則」に行為者が従属しているからではない。実践は目標に客観的に合致することがあるが、行為者は目標を意識して目指したりする必要は(かならずしも)ない(Bourdieu 1980: 88=2001(1): 83-4)。行為者は、身体化したハビトゥスに導かれて、目的や手段を意識的に熟慮しなくても適切な行為をすることができる。行為者は、実践の原理を持っている(*possède*) が、それによって全面的に取り憑かれている(*possédé*) からこそ、うまくその原理を制御できる(Bourdieu 1980: 29=2001(1): 23)。

以上のような特徴をもつハビトゥス概念<sup>4</sup>は、ブルデューが日常実践の独自性として重視した点、すなわち、日常的な実践がある程度の規則性と不確実性・あいまいさの両方をあわせもっていることを説明することを可能にする。

性向の体系は、客観主義が社会的実践に認めながらも理由を説明できない連続性と規則性との本源(*principe*)にあり、また機械論社会学主義による外からの、その場限りの決定論によっても、自発性を主張する主観主義による純粹に内的な、しかし同じく一時的な決定によっても説明できない、規則性をもった(*réglé*)変化の本源にあるのだ。(Bourdieu 1980: 91-2=2001(1): 86)

ハビトゥス概念のなかでは、社会構造に適合した規則的な実践を産出する側面と、即興的

---

<sup>4</sup> Swartz は、ブルデューがハビトゥスを示す言葉として、“cultural unconscious”、“habit-forming force”、“set of basic, deeply interiorized master-patterns”、“mental habit”、“mental and corporeal schemata of perceptions, appreciations, and action”、“generative principle of regulated improvisations”などの表現を使っていると指摘している(Swartz 1997: 101)。

に多様な実践を生み出す「発明術」という側面が同居している。規則性と規則性から外れる面を同時にあわせ持ったハビトゥス概念は、規則性と変化の両方を射程におさめる概念となっている。

そしてハビトゥスは、行為者がなかば無意識のうちに、変化する状況にたいして臨機応変に多様な実践でもって対応することを可能にするものでもある。行為者は、身体化したハビトゥス、ゲームのセンスのようなものに導かれて、明確な意識化を経ることなく、変わりゆく状況に応じてさまざまな実践をおこなう。ハビトゥスという概念によって浮き彫りになる行為者像は、慣習的な側面と状況に合わせて柔軟に対応する側面の両方をあわせもつ存在になっている。

本稿が注目するのはハビトゥス概念であるが、ブルデューの理論は、このハビトゥス概念と、資本 (capital) や界 (champ) などの概念が深く関係しあいながら成り立っている。ブルデューの行為観を示す重要ワードである実践 (pratique) とともに、資本や界についてもここですこし説明をしておこう。

## 資本 (capital)

ハビトゥスとともにブルデューの社会学を特徴づけているのは、「文化資本」への着目だろう。ブルデューは、社会で役に立つ資本は経済資本だけに限られず、たとえば学歴や名誉、知識、人間関係なども資本として機能しうると考えた。ブルデューの資本概念には、大きく経済資本、文化資本、社会関係資本、象徴資本の4つの種類がある。経済資本と社会関係資本は名前の通りである。文化資本は、行為者がもっている「文化」が資本になるということである。そのなかには、たとえば教養や正統的文化への親しみ、知識といった身体化されたもの、所有する絵画といった客体化されたもの、学歴など制度化されたものが含まれる。象徴資本については、ブルデューは、先の3つの資本（経済資本・文化資本・社会関係資本）が資本の基本的なものであり、「象徴資本は先の3つの種類の資本いずれもがとりうる形態です。それらの資本はそれぞれの特有の論理を認め（*recognize*）知覚カテゴリーを通して把握されたとき、あるいはこういってよければ、それら資本の所有と蓄積の恣意性を見落とす（*misrecognize*）知覚カテゴリーを通して把握されたとき、象徴資本の形態をとるのです」（Bourdieu and Wacquant 1992: 119=2007: 158）と述べている。ブルデューは象徴資本の例として、「地中海社会における名誉」を挙げている。名誉という象徴資本は評判、つまり人々が抱く表象によって存在するものである（Bourdieu 1994: 116-7=2007: 142-3）。

これらの資本は、いつでもどこでも誰にたいしても同じように資本として通用するというわけではない。たとえば芸術家の世界においては、経済資本を蓄積することよりも他の芸術家に評価してもらうことが重要で、経済資本を蓄積することは芸術家として有利に生きていくためにはあまり役に立たないかもしれない（お金のために作品をつくる作家だとレッテルをはられて、不利になるかもしれない）。行為者たちによって求められているもの、それをもっていることで他者より有利になるものが、ブルデューにおいて資本と考えられるものである。したがって何が資本になるのかは、行為者の実践、そして資本を認識するハビトゥスによって決まることになる。

## 界 (champ)

たとえば先ほど述べた芸術家の世界では、他の世界では資本として通用しないもの（たがいの評価や芸術家としての権威）が資本として機能し、その特殊な資本をめぐる人々の実践が繰り返される。分化した社会には、この芸術家の世界のような、相対的に自律した複数のミクロコスモスがあるとブルデューは考える。そのミクロコスモスが「界」である（芸術界、科学界、政治界、経済界など）。界は、行為者の争いや競争の空間とイメージされている。行為者は、その界で有効性をもつ特定の資本・賭け金（芸術界ならば、芸術的権威など）を求めて、あるいは有効な資本を変えようと争っている。それぞれの界は、「他の世界 (univers) のノモスに左右されることのないノモスを持つ社会的世界 (univers sociaux)」(Bourdieu 1994: 159=2007: 195) であり、それぞれ特殊なロジックや必然性が存在する場所である。

資本概念と界概念のあいだには密接な関係がある。界によって、そこで通用する資本はなにか、さまざまな資本の価値、資本のあいだのヒエラルキーは変わる。逆に言えば、資本の価値は、その資本が求められる界の存在に依存している。そのため、ある界とは何か、界の境界はどこにあるのか、どんな資本がそこで役に立つのか、その資本が効果を発揮する領域の限界はどこかを問うことは、同じひとつの作業である（界については Bourdieu and Wacquant 1992: 97-9=2007: 131-3; Wacquant 1992: 16-8=2007: 36-8 などを参照）。

そして、ハビトゥスと界のあいだにも密接な関係が存在する。行為者は、ハビトゥスによって界の争点になっている資本を価値あるものと認識する。そして資本の価値をハビトゥスによって認識している行為者たちが熱心に資本を追いかけることによって始めて、界は存在できる (Wacquant 1992: 19=2007: 39)。したがって、界も、先ほど述べた資本と同様に、資本の価値を認識するためのハビトゥスと、そのハビトゥスに導かれた実践によって成立するものである。界は行為者の実践の外にあるものではなく、行為者の実践のなかに存在するものである。

以上のように、ブルデューの理論においては、資本や界といった行為者にとって外在的な存在のように思われるものについても、行為者の実践によって構成されるというとらえかたをする。したがって行為者の実践、それを産出するハビトゥスが、ブルデュー理論において非常に重要な、基底をなす要素となっている。ハビトゥス概念やブルデューの実践観を理解することは、界や資本といった一見わかりやすい、経験的に活用しやすい概念について深く理解するためにも重要なのである。

## 実践 (pratique) とは

次に、ここまでの議論でもたびたび使ってきた、「実践」<sup>5</sup>という概念について説明をおきたい。実践は、ハビトゥスとともに、ブルデューの行為観について論じる際には欠かすことのできないキーワードである。

ブルデューは行為ではなく実践 (pratique) という概念をもちいる。この概念がもつ第1の特徴は、「慣習性」である。『実践感覚』の邦訳を行った今村仁司は、『実践感覚1』の「あとがき」において「プラチックの本来の意味は、『慣習的行動』である」(今村 2001: 280)と述べている。社会人類学者の田辺繁治も実践を「反省的に意識することなくおこなわれる日常の慣習化された行為」(田辺繁治 2002: 535)と表現している。

しかし実践の意味はそれだけではない。宮島喬は、「習慣的な振る舞い方」という意味に加えて、実践概念の第2の側面を指摘している。それは『理論』の反対物として、実際の、実地の行動」(宮島 1995: 8)である。「ここでクローズアップされてくるのは、理論通りにはいかない実際の状況のなかで、個々に出会う出来事や突発する必要などに対応できる、柔軟性、変奏可能性である」(宮島 1995: 8)。山本哲士も『プラチック』とはフランス語では、たんなる日常語です。実用書などは『プラチック・シリーズ』などといわれます。実際の便利だとか、実用的だとかいうように使われるのです」(山本 2007: 173)と述べ、pratique を「実際行為」(山本 1992: 34, 2007: 21)と表現している。

実践 (pratique) はまず「慣習的行動」であり、『実践感覚』においてブルデューが提示するデータも「慣習的行動」に関するものがほとんどである。しかし同時に、ブルデューが検討の対象にしようとする実践には、状況に対応して即座に適切な行為をおこなうという側面もあり、「慣習的行動」という理解ではこの側面が見えなくなってしまう恐れがある。

---

<sup>5</sup> pratique は「実践」「慣習行動」という邦訳が当てられることが多いが、pratique のもつニュアンスを大事にするため、カタカナで表記されることも多い。しかし本稿は、「実践」の訳語をあてることにした。その理由は2つある。まず、pratique は「慣習行動」以上の意味をもち、本稿の議論にとっては「実践的な行為」というニュアンスの方が重要だからである。また、本稿の最重要キーワードである「実践感覚 (sens pratique)」の pratique の訳と合わせ、同じ単語であることを明確に示したいと考えたからである。



宮島が指摘するように「プラティックの意味のこの二側面は矛盾しているようにもみえる。しかし、それらを結びつけてとらえようとした点にブルデューの試みがある」(宮島 1995: 8-9) 。

したがって実践には、「慣習的行動」と「実際の行動」の両面があると考えが必要がある。実践 (pratique) とは、慣習的でありながらも実践的な行為である。このような行為は抽象的な理論的構築物でも、あるいは特別な行為でもない。実践は、わたしたちが日常生活において何気なくおこなう行為のことを指している。

この実践 (pratique) という言葉が照らし出す地平は、ハビトゥス概念によってブルデューが浮かび上がらせようとしている行為像と響きあう。ブルデューは、実践という言葉とハビトゥスという概念を用いて、慣習的なものに枠づけられつつ実践的な行為をおこなうわたしたちの日常を描くことのできる理論枠組み・行為観・人間観を提示しようとしているのである。

それでは、元の議論に戻ろう。ブルデューは、ハビトゥスや実践などの概念を用いて先に見た客観主義と主観主義の二元論をどのように乗り越えようとしているのだろうか。次節では、ハビトゥスによる二元論の乗り越えについて説明したい。ハビトゥスがどのように客観主義と主観主義の問題点を克服しようとしているのかを理解することで、ハビトゥス概念の特徴をより明確につかむことができるだろう。

### 3 ハビトゥス概念による客観主義／主観主義の乗り越え

ハビトゥス概念による客観主義と主観主義の二元論の乗り越えは、2つの観点から理解するとわかりやすい。

社会的世界に対するこのような非理論的な関係、通常の実験のそれに他ならない、部分的で、いささか卑俗な関係についての理論を作り上げなくてはならないのです。それと併せて、理論的关系の方の理論、つまり、実践的同意とか直接的な投資・打ちこみ (investissement) への訣別を手始めとして、学者的姿勢の本質をなす、隔絶し、距離をおいた関係というものに随伴する一切のものを扱う理論も、作り上げる必要があります。(Bourdieu 1987: 31=1991: 37-8)

ブルデューは2つの理論をつくる必要があると言う。ひとつは、社会的世界に対する非理論的な関係、つまり普通の実験とはどういうものかについての理論、もうひとつは、理論的关系についての理論、学者的姿勢とはどのようなものかについての理論である。ハビ

トウス概念は、この2つの理論両方のかなめになっている。

以上の2つの理論を別々に見ていくことによって、ブルデューがどのようにしてハビトゥス概念によって二元論を乗り越えようとしたのか、その複雑な戦略が見えてくるだろう。

### 3-1 研究者のものの見方の特殊性

先ほどの説明と順番が逆になるが、まず、「理論的な関係についての理論」の方から説明したい。理論的關係についての理論では、研究者のものの見方の特殊性についての考察をとおして二元論に陥らない分析視角を考えることになる。

各々の認識様式の成果を保ちながら……二つの認識様式を対立させる敵対関係乗り越えるためには、学問的な認識様式であることで両者が共有する諸前提を解明しなければならない。(Bourdieu 1980: 43=2001(1): 38)

客観主義と主観主義は、ともに学問的な認識の様式である。この2つの立場は、表面上は大きくちがっているにもかかわらず、学問的認識であるという点で共通の前提、共通の問題点を抱えている。「われわれが社会的世界を観想するやいなや、社会的世界を研究し、記述し、社会的世界について発言するために社会的世界から多かれ少なかれ完全に撤退しなければならないという事実によって由来するゆがみ (bias) を、社会的世界についての見方に導入してしまうことになります」(Bourdieu and Wacquant 1992: 69=2007: 102)。このゆがみという共通の問題点を客観的に分析し乗り越えることによって、どちらかの視点に偏ることのない分析視角を可能にするという作戦をブルデューはとる。では、共通の問題点とは何だろうか。

客観主義と主観主義には、先に見たように、視点の偏りがあった。客観主義は行為者の外部にある構造や規則性を明らかにするが、客観主義の見方では行為者は構造の単なる担い手くらいの扱いになってしまう。主観主義は行為者の「生きられた経験」を描きだすが、行為者の外部でこの「生きられた経験」を支えている構造がとらえられない。客観主義と主観主義のあいだにみられるこの視角のちがいは、研究者が研究対象にたいしてとる距離が異なっていることに起因している。

客観主義の研究者は、観察対象となっている行為者の実践を理解するために、行為者の実践をアウトサイダーとして遠くから観察する。その場合、研究者は、行為者の実践を見渡す地点に立ってモデルをつくることになる。研究者には研究対象となっている行為者には見えないものが見える (行為者の行為の規則性など)。しかし逆に、研究者には行為者に見えているものが見えない。このままでは研究者は行為者の視点には立つことができない。

それにたいし、主観主義は、一見行為者の立場に立っているように見える。しかし主観主義では、「意識の専門人」である研究者が過去も外部もない純粋な主体としての自分の経験を行為者に投影してしまう（Bourdieu 1980: 77=2001(1): 71）。自分の実践について考えるときも、この問題点を免れることはできない。自分の実践について考察したり記述したり分析したりするために自分の実践へ立ち返るとき、研究者は自分の実践からいわば不在になってしまうからである。そのとき、行動する行為者（agent agissant）は反省する「主体」（« sujet » réfléchissant）に置き換えられてしまう傾向にある（Bourdieu [1997]2003: 78=2009: 92）。このとき研究者は、客観主義のときと同様に、行為から離れた立場から実践を説明してしまう。

客観主義と主観主義のあいだにあるちがいは、どこに立って人間や社会を分析するのか（上から見下ろすのか／行為者になりかわるのか）である。行為者から遠く離れた地点からものを考えるなら客観主義的になり、行為者を自分自身と同一視するならば主観主義になる。このようなちがいはあるが、客観主義と主観主義は共通の問題点を抱えている。どちらも行動する行為者のものとは異なる認識のモードであり、行動する行為者ではない視点から行為者の実践を理解しようとすることに起因する認識の歪みを持っている。

したがって真の問題は主観主義か客観主義かというところにあるのではなく、行動する行為者の視点が分析者からは見えなくなっているというところにある。行為者と研究者のあいだにある距離が視角の偏りをもたらすことを、研究者は自覚する必要がある。そしてこの視角の偏りを最低限にする方法を考えなければならない。

そこでブルデューが編みだしたのが、「2つの焦点がある分析のレンズ」（Wacquant 1992: 7=2007: 24）である。

客観化すること、つまり、いったん日常的イメージから距離をとり、人々の実践の背後にある客観的な規則性をつきとめることは必要である。しかし、客観化する作業のなかで研究者が行為者からとってしまった距離がどんな作用をもたらすのかを同時に検討しなければならない。

家系図をつくる人類学者の「親族」に対する関係は、息子に適当な結婚相手を世話するという実践的で切迫した問題を解決しなければならないカビリア人の父親の「親族」に対する関係とは程遠いものです。同じように、たとえばアメリカの学校制度を研究している社会学者は、学校を「利用」しているのですが、これは娘のためによい学校を探す父親が学校を利用するのとは無関係です。（Bourdieu and Wacquant 1992: 70=2007: 103）

息子に適当な結婚相手を探している親、娘のために良い学校を探している親は、家系図をつくる人類学者や学校制度を研究している社会学者とは異なる視点から「親族」や「学

校」を見、利用している。研究者が構成する客観的なモデルからは、息子に結婚相手を探す親や娘の学校を探す親の現実的な視点、パスカル<sup>6</sup>が言う「民衆の健全な真理」(Bourdieu [1997]2003: 273=2009: 323) が抜け落ちている。

そこで、客観化の作業をした上で、抜け落ちた行為者の視点を考慮しなければならない(傍点をつけた部分が主観主義とのちがいである)。そこでブルデューは、ブルデュー流に料理したうえで「主観」(=息子に結婚相手を探す親や娘の学校を探す親の現実的な視点)を導入する。ブルデュー流に料理された「主観」が、行為者の知覚や評価の図式・性向(disposition)の体系としてのハビトゥスである。

社会的世界が、可能な主体なら誰にとっても等しい可能性をもった可能なものからなる宇宙という形態をまとうとすれば、それは、社会的現実のセンスを無力化する想像上の経験(たとえば物語のそれ)の中だけにすぎない。行為者は、到達可能なものと到達不可能なもの、「我々にとって」と「我々にとってではない」との具体的な指標との関連で自己規定する。(Bourdieu 1980: 107=2001(1): 103)

社会的世界においては、誰にとっても同じものが同じように経験されるわけではない。行為者は、社会構造のなかでのそれぞれの位置によって異なる経験をし、そのなかでそれぞれ異なるものの見方・考え方を身につける。したがって、「主観」、それぞれの行為者の社会的経験のありようは、客観的な社会構造のなかに位置づけられたものとして描かれる必要がある。

そこで、ブルデューの理論においては、行為者の経験や意味づけは、それぞれの社会的経験のなかで獲得された知覚・評価の図式であるハビトゥスを通して、行為者の社会的位置によってそれぞれに異なるあらわれかたをするものとしてとらえられる。たとえば、高等教育への進学者が身近な知り合いにどのくらいいるかが社会的位置によって異なっていると、高等教育進学という選択肢はそれぞれの行為者の置かれた社会的位置に応じて異なるかたちで認識される(「自分にとって当然の」道／「十分あり得る」選択肢／「難しい」選択肢／「自分にはあり得ない」道というように)。主観主義は、自身の研究者としての認識を一般化し行為者の経験や意味づけを構成する(「可能な主体なら誰にとっても等しい可能性をもった可能なものからなる宇宙」を想定する)傾向があったが、ブルデューの理論における行為者の経験は、ハビトゥス概念によってそれぞれの行為者の社会的位置の刻印を受けたより現実的なものになる。行為者の身体化した認識図式や性向の体系を「ハビトゥス」というかたちで想定することによって、主観主義の考える「主観」のデメリット(行動しない、社会のなかに根を持たない主観を想定してしまうこと)を乗り越えて「主観」

---

<sup>6</sup> ブルデューは、自分は「パスカル派だ」と述べている (Bourdieu [1997]2003: 10=2009: 9)。

について語ることが可能になる。

まず、日常的イメージから距離をとり、客観的な構造を描きだすことが優先され、その次に、客観的な空間内での位置によって異なる行為者の視点を解明するという作業がくる。L・ヴァカンが指摘するように、ブルデューの分析レンズの2つの焦点は等価ではない。客観主義的な見方が認識論的に優先されている（Wacquant 1992: 11=2007: 28）。この「分析レンズ」の点にかんしては、ブルデューはあくまでも「客観主義的観察者」であり、「客観主義的観察者」であることによって生じる認識の歪みを矯正する方法を考えた、と理解するのが妥当だろう<sup>7</sup>。客観主義の立場に立った上で、取り逃してしまいがちな「主観」を「客観化」する方法を考える、それがブルデューにとっての、方法論のレベルでの二元論の止揚である。

### 3-2 人間観としてのハビトゥス

二元論を乗り越えるもうひとつのルートは、社会的世界にたいする非理論的な関係、すなわち、日常生活をおくる行為者の行為とはどのようなものかについて検討することである。これは、社会科学や哲学は日常実践をおこなう行為者について考えるときにどのような人間観を前提にすべきか、という角度から、二元論の問題を考察するものである。

#### 客観主義的人間観を乗り越える

客観主義の代表としてブルデューが批判したのは構造主義であったが、先に述べたように、客観主義者＝構造主義者たちは、行為者を自分がつくったモデルや図式、構造の付帯現象や「担い手」(Träger) にしてしまい、消滅させてしまう傾向があった（Bourdieu 1987: 19=1991: 19, 1987: 31=1991: 37）。この見方に立つ場合、行為者の行為は、規則や構造によってすべて説明できるということになる。

しかし現実はそのようではない。ブルデューが、アラブーベルベル社会の婚姻について研究するなかで統計をとって見たところ、この社会の典型だと考えられていた平行イトコ婚の割合が3～4%しかないことがわかった（Bourdieu 1987: 18=1991: 17）。客観主義の説明では説明しきれない実践の形態が現実にはたくさん存在していたのだ。規則にしたがった

---

<sup>7</sup> 安田尚も、ブルデューの認識論について論じるなかで、「ブルデューの立場は自ら認めているように断固とした『決定論』なのであり、『暫定的な客観主義』（言わば、戦略的に考え抜かれた方法論的客観主義）なのである」（安田 1998: 34）と述べている。

婚姻形態である平行イトコ婚の理由は、行為者によっても事情によってもかなり異なっている。平行イトコ婚のケースの多くは、「規則に従う」以外のほかの理由でおこなわれている（Bourdieu 1987: 31=1991: 37, 1987: 95=1991: 124）。行為は、規則に適ったものであっても、規則を実行するためにおこなわれるのではない。

ものごとは規則正しく起こる（たとえば、裕福な家の跡取り息子は規則正しく裕福な家の跡取りでない娘と結婚する）、しかしそれは、人々が規則にしたがっているということではない（裕福な家の跡取り息子が裕福な家の跡取りではない娘と結婚することは規則というわけではない）。規則（*règle*）と規則性（*régularité*）は明確に区別されなければならない（Bourdieu 1987: 81=1991: 105）。客観的に見ると、実践には規則性や構造が見出せる。しかしこの規則性は、行為者に意識されているわけではないし、行為者はこの規則性に服従して実践しているのでもない。これらは、行為者の行為に結果として生じるものである。

私の省察全体が、こうしたところから出発したと言っても過言ではありません。つまり、行動というものは、規則への服従の産物ではないのに、どうして調整されたものでありうるのか、という点です。（Bourdieu 1987: 81=1991: 105）

規則にあやつられているわけではないのに、人々が規則的に行為できるのはなぜだろうか。そこで導入される概念が、「ハビトゥス」である。「規則に対するいかなる参照とも無関係なところで、調整された規則的な行動を生み出すべく調整されている性向としての、ハビトゥスがあります」（Bourdieu 1987: 81=1991: 106）。

行為とは、客観主義者が考えるように単なる規則の実行、規則に従うこととはちがうし（Bourdieu 1987: 19=1991: 19）、無意識の構造に動かされているのでもない。日常生活のなかの個人や家族の切迫した目的（たとえば息子にいい結婚相手をなんとしても見つけること）に向かって、行為者によっておこなわれている。ブルデューは、実践を直接規則や構造に規定されるものと想定するのではなく、身体化している実践の原理＝ハビトゥスにもとづいて行為者がおこなうもの、という行為観を提示した。身体化された実践の原理、つまり「取り憑かれるほどに」もっているゆえに自在に扱うことのできる実践の原理の存在によって、「規則性」はあるが「規則に従っている」のではない実践が説明できるようになる。

また、このハビトゥスによって、同じ社会的な属性をもつ人々の実践のなかに見られる規則性や傾向性も説明できる。近い社会的位置にある人々は似通った経験をし、似たハビトゥスを身体化する。その結果、近い社会的位置にある行為者は同じような実践をおこなうことになるのである。

このように、ハビトゥス概念を用いることで、なぜ人々の実践に規則性や構造が見出せるのかが説明できるようになる。また、このハビトゥスが示す実践観・人間観は、客観的

構造が直接実践を決定するという見方をとらないため、行為者を構造や規則性の操り人形にしてしまうという客観主義の問題点を避けることができる。ハビトゥス概念は、構造や規則性を行為者に身体化させることによって、客観主義において取り逃がされていた行為者をふたたび理論のなかに導入しようとしているのである。

## 主観主義的人間観を乗り越える

次は、ブルデューがハビトゥス概念によってどのように主観主義のもつ人間観の限界を乗り越えようとしているのかを考えよう。

主観主義は、行為を行為者の明白な意識に方向づけられたものとして描きだす。この主観主義にたいしてブルデューは、わたしたちの行為は果たして明確な意識のみで説明することができるのだろうかという疑問をつきつける。主観主義的人間観が拠り所にする自覚的・合理的な意識や判断だけでは、実践のすべてを説明することはできないのではないか。

たとえば「信じること」、とくに「信じ続けていること」は自覚的・合理的意識だけでは説明できない。「理性が呼び起すことができる、信じようという決断 (*décision de croire*) から、持続的な信念 ( *croyance durable*)、すなわち、意識と意志の断続性に打ち勝つ信念へと移るためには、理性とは別の力に頼らざるを得ない」(Bourdieu 1980: 81=2001(1): 76)。

では、この別の力とはなにか。わたしたちがなにかを信じているという状態はどのように説明することができるのか。ここでブルデューは、パスカルの言葉を引用している。「われわれは精神であるのと同程度に自動機械である。そしてそこから、説得が行なわれるための道具は、たんに論証だけではないということが起こるのである。……習慣 (*coutume*) がわれわれの最も有力で最も信じられている証拠となる」(Bourdieu 1980: 82=2001(1): 76, パスカル『パンセ』からブルデューが引用)。わたしたちがなにかを信じ続けているとき、それは「ずっとそうしているから」という「習慣」の力によるところが大きい。たとえば明日が来ることを人は疑わない、それは、これまでもずっとそうだったからだ。「習慣」、繰り返しおこなうこと、繰り返し目にすることなどによって、わたしたちの信念は作られる。この「習慣」のなかでつくられていくもの、「習慣」のなかで形成された知覚・思考の図式がハビトゥスであり、それは理性や意識的な決断の力によらずにわたしたちの実践を方向づけていく。このハビトゥスの存在によって、「なにかを信じる」というわたしたちの日常的な実践はやっと理解することができるようになる。

また、ブルデューが主観主義として批判するもののなかには、合理的な個人を想定する議論が含まれる。「行為者なき機械的反応という意味での行為の客観主義を避けるとともに、自覚的な目的を計算づくで達成するというように行為を記述する主観主義、自分自身の目的を設定し、合理的計算を通して効用を最大化する意識による自由な企てとして行為を描

く主観主義をも避けなければなりません」(Bourdieu and Wacquant 1992: 121=2007: 160-1)。この合理的な行為観、そして、多くの主観主義者が(暗に)想定する、人が自分の行為についていつも目的を意識し、手段を比較し、選択をしているという行為観にたいし、ブルデューは、人は意識的に合理的な計算をしなくても道理にかなった実践ができると主張する。

合理的行為あるいは機械的反応以外の行為形式を認めることができないと、考え抜かれた計画(un dessein raisonné)の産物でなくとも、まして合理的計算の産物でなくとも道理のある(raisonnable)すべての行為の論理を理解できなくなる。それらの行為は、明示的に構成された目的に照らして自覚的に組織されなくとも一種の客観的目的性にとりつかれているし(habité)、首尾一貫性の意図や熟慮された決断から生じたものでなくとも理解可能(intelligible)であり首尾一貫していて、投企(projet)や計画の産物であることなしに未来(futur)に適応する。(Bourdieu 1980: 85-6=2001(1): 80)

ハビトゥスという身体化した実践の原理のおかげで行為者は、明確な目的意識や合理的判断をとまなわなくても「適切で」「ある程度合理的に」行為することができる。わたしたちは日常生活において、いつも合理的に計算した上で実践しているわけではない。わたしたちはほとんどの場合、目的や手段、予想される結果について合理的に判断する余裕がない。そうであるにもかかわらずわたしたちがある程度道理にかなった実践ができるのは、過去の経験のなかで身体化した知覚・評価・思考の図式、実践の原理であるハビトゥスのおかげである。逆に言うと、このハビトゥスの存在を想定しなければ、次々よどみなく繰り出される日々の実践を説明できないのである。

そして、ハビトゥス概念は、主観主義が目を向けることのなかった「生きられた経験」を支える外部の条件についても説明する。身体化された構造としてのハビトゥスと客観的構造の一致が、人々の当たり前の世界を支えているとブルデューは論じている(Bourdieu and Wacquant 1992: 73=2007: 106-7 など)。

主観主義は、行為者の意図や意志、判断能力、理性などを重視するがゆえに、行為者の実践を支えている習慣的なものの力、経験のなかで身体化された性向の重要性をつかみそこねていた。過去の経験をとおして身体化した実践の原理であるハビトゥスを理論に導入することによって、主観主義の理想的すぎる架空の人間観から距離をとり、日常実践の現実に迫ることが可能になる。

ハビトゥス概念によって、主観主義のように行為者が常に意識的・理性的に目的や手段などを考えつくした上で行為すると想定しないで、そして、客観主義のように行為者を構



造に操られた人形のように扱わないで、行為者や行為について考えることが可能になる。ハビトゥス＝社会的経験のなかで身体化された実践の原理によって行為者は、規則にしたがっているわけではないのに規則的な実践をおこなっている。また、ハビトゥスによって産出される実践は、いちいち熟慮しなくても、道理にかなったものになる。行為者は身体化した実践の原理であるハビトゥスのおかげで自然と道理にかなった実践をおこなうことができる。このようにハビトゥス概念は、社会構造によって構造化されたハビトゥスという一種の「暗黙知」によって行為者が実践をするという新たな見方を提示する。ハビトゥス概念は、社会構造と行為者をつなぐことによって、客観主義の人間観・主観主義の人間観のそれぞれがもっていた限界を乗り越えるのである。ハビトゥスは、社会構造の身体化でありながら、あるいは社会構造の身体化であるからこそ、直接構造が実践を規定するとはちがひ、ゆるやかな形で行為者の実践を方向づける。そして、行為者はハビトゥスによって適切な手を繰り出す存在としてあらわれる。

「意識も意志ももたぬ自発性、ハビトゥスは、反省的自由にと同じように機械的必然性にも、合理主義理論の『惰性なき』主体にと同じように機械論の歴史なき事物にも等しく対立するのである」(Bourdieu 1980: 94-5=2001(1): 89)。ハビトゥス概念によってとらえられる行為と行為者は、機械的な決定論と自由すぎる主体を想定する理論の両方を拒絶する第三の行為観・人間観を示している。

ここまで、ブルデューがハビトゥス概念によってどのように客観主義／主観主義の二元論を乗り越えようとしているのか、2つの角度から（研究者のものの見方・人間観）見てきた。ハビトゥス概念は、どちらの二元論の乗り越えにおいても、研究者のものの見方の歪みを矯正するための、そして構造と自由な行為者をつなぐための要になっている。このハビトゥス概念について検討することは、行為者と社会の関係を考えることであり、社会学はどのように行為者を見るべきかを考えることでもある。

次の章では、このハビトゥス概念がどう評価され、どう批判されているのかを見ていきたい。ブルデューがハビトゥス概念によっておこなった社会と行為者の関連づけは、どのように評価されているのだろうか。



## 第2章 ハビトゥス概念にたいする評価と批判

1章ではブルデューがどのような問題に対峙するなかでハビトゥス概念を練り上げたのか、ハビトゥスとはどういうものかについて説明してきた。2章では、このハビトゥスの理論が、とくに行為や行為者についての理論として、どのように評価されどのように批判されているのかを見ていきたい。1節では、ハビトゥスがどういった点において評価されているのか、ハビトゥスはどのような行為や行為者を描き出していると理解されているのかを見ていく。次の2節では、ハビトゥス概念にたいしてどのような批判があるのか、どんな点が問題視され、その問題はどのように乗り越えられるべきだと考えられているかを検討する。

### 1 ハビトゥスへの評価

この節では、ハビトゥス概念をもちいてブルデューがおこなう行為や行為者についての議論がどういう点で評価されているかを見ていこう。

まず、ブルデューの理論は構造主義的・決定論的行為観から距離をとることを可能にしたという評価がある。「構造主義が行為者を構造の付帯現象にすることに対して、ブルデューは、実践感覚や戦略の概念により行為者を入れ込む社会理論を構想した」（竹内 2009: 255-6）と言われている。

そしてハビトゥス概念は、行為や社会生活における慣習的側面を浮き彫りにする概念だと評価・説明されることが多い。たとえば江原由美子は、ブルデューのハビトゥス概念によって示される実践観は、行為者の「意図」や「主体性」に力点をおく行為理論とは異なる、慣習的側面を強調した行為理論として位置づけられると述べている（江原 2005: 33）。この見方はひろく共有されているように思われる。D. Swartz は、ハビトゥス概念を、デュルケームやヴェーバーなどの19世紀から20世紀初頭の社会学者が habit 概念にこめていた現在よりも広い意味<sup>8</sup>をよみがえらせようという試みと位置づけている（Swartz 1997: 115-6）。

またハビトゥスは、身体や身体技法に光をあてたものとしても評価される。「社会学において、技の重要性を唱えた理論家のうちもっとも重要な一人としてピエール・ブルデューがあげられる。彼は、無意識のうちに身に付けられた習慣的な技によって実践する身体を

---

<sup>8</sup> habit 概念が持っていた現在よりも広い意味については、C. Camic (1986) を参照。

『ハビトゥス (habitus)』として概念化し、これをみずから構築した実践理論の中心に置く」(倉島 2007: 21)。そして、ハビトゥスが「身体化された」図式である点が肯定的に言及されることも多い。「実践はルールや規則、信仰や信念といった規範ではなく、このハビトゥスという身体に刻み込まれた図式から限りなく生みだされる」(田辺繁治 2003: 19)。

このように、ハビトゥスによる実践の説明は、構造主義的人間観・行為観から脱却することを可能にすると評価され、また、行為や行為者の慣習的側面や身体的次元という、重要でありながら十分に光のあたっていなかった側面に焦点をあてたものとしても評価されている。ハビトゥスは、目的を明確に意識し自由に決断する行為者・行為観から脱却し、これまでの社会のありかたに根ざして柔軟に行為する身体としての行為者を浮き彫りにする概念として理解されている。

しかし、ハビトゥスの慣習的次元・身体的次元にたいする評価は、ブルデューが目指していた二元論の乗り越えという問題にひきつけて考えるならば、アンビバレントなものである。なぜならこれらの評価は、ハビトゥスが行為者の能動的・意識的实践ではない側面に焦点をあてていることを評価するものだからである。ハビトゥスが示す行為・行為者像は主観主義が想定するような人間観からたしかに遠く離れているが、社会／行為者、無意識／意識の二項のうち社会と無意識の側に偏っているのではないか。この点は、数々の先行研究において批判の対象になっている。次の節では、ハビトゥスが描く行為・行為者像にたいする批判を見ていこう。

## 2 ハビトゥスへの批判

ハビトゥス概念は、高く評価されるとともに、批判されることも多い概念である。この節では、ハビトゥスが描き出す行為や行為者の像にたいしてどのような批判があるかを見ていこう。

### ハビトゥスは二元論を乗り越えられたのか

ハビトゥスにたいする批判のなかでもっとも存在感のある（多いという意味ではないが）批判は、ハビトゥス概念は二元論を乗り越えていない、客観主義や決定論に戻っているという批判である。

客観的構造がハビトゥスを形作り、ハビトゥスが実践を産出し、その実践が構造をつくるというブルデューの議論は、「決定論」「再生産論」とラベリングされることが多い。L・ヴァカン<sup>1</sup>は、読者を代弁して、ブルデューにあえて次のような質問をぶつけている。

ハビトゥスという媒介概念を導入すると、構造主義の「鉄の檻」をほんとうに脱却できるのでしょうか。多くの読者にとって、この概念はなお決定論的に思えます。「予知できない、つねに変化する状況に対処することを可能にする戦略の形成原理」であるハビトゥスも、世界の持続性のある（durable）客観的構造を身体化することによって生まれた以上、ハビトゥスが定める即興がそれ自体これらの構造によって「定められている（regulated）」なら、革新と agency の要素とはどこからやってくるのでしょうか。（Bourdieu and Wacquant 1992: 132=2007: 175）

このヴァカンの言葉からわかるように、ハビトゥスは構造を再生産するものであり、構造に決定された行為者像を示す、という見方は広く持たれている。ハビトゥス概念は乗り越えようとした二元論の一方の立場＝客観主義・決定論的見解に戻っていると批判されることが多い（Farnell 2000; Jenkins 2002; King 2000 など）。

たとえば、F・デュベは、ブルデューの立場を次のように表現する。

個人は、ライブニッツにおける指揮者のいないオーケストラのように、社会的全体との一貫性の原理を打ち立てるハビトゥスの上に作られたモナドとして現れる。……社会関係を組織するさまざまな「界」において、行為者（agents）の戦略は本当の戦略ではなく、ゲームの手を計算するプレーヤーたちの戦略であり、実際は行為者（acteurs）たちのハビトゥスの中に組み込まれ含まれている。したがって、最良のプレーヤーたちは、ハビトゥスを最も強く内面化した人たちであり、最も柔軟かつ適切にこれを実現する人たち、すなわち「ゲームの感覚」を本当にもっている人のことである。……

この理論は新しい客観主義へ、そして個人の終わりへと、古典的個人のもつ自己の批判へと寝返る。（Dubet 1994: 77=2011: 71）

あるいは、荻野昌弘は、ブルデューの議論について「人々の行動は社会によって縛られているという単純な議論をむずかしく言い換えているにすぎない」（荻野 1995: 190）と言い、ブルデューは「二元論的決定論<sup>9</sup>」に陥っているとしている。

しかし、決定論という見方にたいしてはブルデュー自身によっても反論がおこなわれており、ブルデューの理論が決定論・客観主義だという見方は行き過ぎや誤解であると考える論者も多い（Atkinson 2010: 5; Crossley 2001a: 112=2012: 208, 2001b: 91; Sweetman 2003: 533-5）。宮島喬は、ブルデューによる反論をまとめて次のように述べている。「過去

---

<sup>9</sup> 二元論的決定論とは、「相互作用と階級構造という二つの要素を想定し、現実としての相互作用の場が、外在的な階級構造によって規定されていると考えること」（荻野 1995: 190）である。

の教え込みの自動決定作用（オートマティズム）などというものはありえない、いかにそうみえる場合でも、実践には常に最少限行為者の監視とか警戒とか予想とかの意識は伴っている」（宮島 2011: 211）。

だが、決定論・客観主義的見方には戻っていないとしても、ブルデューは二元論を乗り越える道の確立まで十分には至っていないと言われている。

哲学的に言えば、ブルデューは、決定論と自由意志の間の「中間の道」を詳細に説明したり確立したりするところまでは決して十分に至っていない、と筆者は示したい。彼は、ハビトゥスがこれらの両端の間にある道を私たちに示してくれると主張しているが、どうしてそうなのかは必ずしも明らかではない。この点が、批判者たちがなぜ彼の研究を決定論的だとラベリングしつづけるかの理由のひとつである。（Crossley 2001a: 115=2012: 214）

ブルデューの理論やハビトゥス概念は「決定論」「客観主義」でなかったとしても、「中間の道」に至るには足りないところがあると考えられている。ブルデューの議論には行為者がいないわけではない。そのことは、ブルデュー理論が構造主義から距離をとることを可能にしたという評価の存在からも暗示される。しかし、行為者についての議論の不足が指摘されることが多く、このことは、ブルデューが完全には「中間の道」に至ることができていないことを示している。

それではハビトゥスをめぐるブルデューの議論では、行為者のどのような面がどのように取り逃されていると考えられているのだろうか。以下では、「能動的な行為者の不在」、「意識の不在」、「ブラックボックス」、「変化と多様性」という4つのパートにわけて、先行研究において指摘されるハビトゥスの不足点、そしてその不足点にたいして先行研究がどんな乗り越えを試みているかを見ていきたい<sup>10</sup>。

### 能動的な行為者の不在

まず、ハビトゥスは主体的・能動的実践を描き出すことができていないと批判される傾向がある。個人がするどんな選択も結局ハビトゥスによって与えられたものであり、個人は選択や戦略を許されていないのではないか（King 2000: 425）、ブルデューの実践のモデルは、即興や流動性に言及しているにも関わらず、知性を必要としない（mindless）服従（conformity）のモデルになっているのではないか（Jenkins 2002: 97）と批判されている。

---

<sup>10</sup> この4つのパートは、批判者によって分けるのではなく、批判の論点によって分けている。そのため、同じ論者が別の論点において何度も登場することになる。

まるでハビトゥスが行為者を操って動かしているかのようなのだ。「ブルデューによるハビトゥスの説明の含意は、行為者たちはその大部分が『自動操縦装置に切り替え』られているというものである」(Crossley 2002b: 348)。ハビトゥスが慣習的な行為に光をあてる概念であるかわりに、能動的で創造的な行為者が存在していないように見えるのだ<sup>11</sup>。

また、ブルデューの議論では、ハビトゥスが行為者にとってかわる傾向があるとも批判されている(Crossley 2001a=2012, 2001b, 2002b; Farnell 2000)。N・クロスリーは、「ブルデューは、多くの部分において、ハビトゥス概念に、agency についての概念化を先取りする(pre-empt) ことを許している……。実際、時折彼はハビトゥスを行為者のかわりに用いている」(Crossley 2001a: 115=2012: 214, 2001b: 94) と述べている。この場合、行為者の存在そのものがブルデューの議論では見えないということになる。そこで、先行研究では、行為者や agency についての理論化を補うことが試みられている(Crossley 2001a=2012, 2001b, 2002b; Farnell 2000)。

## 意識の不在

先ほどブルデューによるハビトゥスの説明では行為者が「自動操縦装置」になっているという文章を引用したが、この「自動操縦装置」には、行為者の能動性ととも、行為者の意識も不在である。ハビトゥスは意識と言説の手前で働くものであり、意識の機構(apparatus)ではないと指摘されていたり(Atkinson 2010: 4)、ハビトゥスによる実践の生成プロセスが無意識的であることが問題視されていたりする(Farnell 2000: 402-9)。ハビトゥス概念は思考と実践の関わりについてほとんど踏みこんでいないとも言われている(田辺繁治 2003: 100)。「ハビトゥスの理論は行為の様態としての習慣を特定の種類の習慣、すなわち非反省的な(non réflexif) 種類の習慣へと還元してしまっている」(Lahire [1998]2001: 171=2013: 249) と批判されている。

---

<sup>11</sup> ブルデューの議論が内包する人間観については、とくに象徴暴力や象徴支配と関連して、次のような批判もある。「ブルデューにおける『行為者 agent』は二重化されています。人々は行為するが、自分が何をしているかを知らない(あるいは知ろうとしない)。……あなたも、これは実に奇妙な人間学だということに同意されるでしょう」(Boltanski 2011: 7)。「あたかもブルデューだけが、世界を超越的な立場から理解しているかのような主張である。その意味でブルデューは、ギデنزが批判する『日常的行為者』の能力を軽視する専門家を体現している」(山根 2010: 48)。ブルデューは象徴支配のメカニズムを明らかにするが、そこで行為者は「自分が何をしているかを知らずに」象徴支配のメカニズムを作動させている。この問題点は、ハビトゥスが内包する人間観とともに、ブルデューの「分析レンズ」によって明らかになるものは何かということも関係している。しかし「分析レンズ」についての考察は本稿の範囲を越えてしまうため、本稿の議論の範囲では、この問題点について十分な検討ができない。

終章で論じるように、ハビトゥスが内包する能動的な行為者像を明らかにすることは、ブルデューの研究のスタンスや認識論についての理解にも寄与しうる。もしかしたら、本稿の議論の延長でブルデューの「分析レンズ」についての検討をおこなうことによって、この「奇妙な人間学」の問題点を乗り越えることもできるかもしれない。

ブルデューは意識的な要素や反省が実践に関係することを否定していない。たとえば、実践に変化が要求される危機的な状況においては、反省のような要素が実践に入り込むこともあると述べている。しかしそれでもやはり、意識や思考、反省についての理論化が十分ではないと指摘されている（Atkinson 2010: 12-3; 倉島 2007: 255-7 n.19）。ブルデューはたとえば「実践的反省（réflexion pratique）」という新たな概念を作るなどして既存の反省概念から距離をとろうとしているように見える（Bourdieu [1997]2003: 233-4=2009: 274-6）が、倉島哲は、ブルデューは「実践的反省を、ハビトゥスが実践を生成するさいに付随する意識の形態として位置づけるだけで、この意識の形態の固有の役割を描き出してはいない。……ハビトゥスが実践を生成するさいにつねに実践的反省が付随するというだけなら、実践的反省の概念は実践理論の論理構造に何も付け加えないまま、事実上、ハビトゥスの無意識性や自動性に対する疑問や批判を退けるためのアリバイとして機能するにとどまるだろう。……ブルデュー氏は実践における反省に一定の役割を認めているが、これを十分に解明することはなかった」（倉島 2007: 256 n.19）と論じている。

そこで、意識や、思考しつつおこなわれる行為、言語、reflexivity とハビトゥスの関係<sup>12</sup>についての議論が、たとえば現象学の概念や議論をブルデュー理論に接合するなどのかたちで、多くの論者によって展開されている（Atkinson 2010: 10-5; Crossley 2001a=2012, 2001b, 2002b; Elder-Vass 2010: 87-114; Lahire [1998]2001=2013; Mouzelis 2008: 119-41; Sayer 2005: 26-30 など）<sup>13</sup>。

たとえばクロスリーは、「ブルデューに対して筆者は、反省的な決定や選択が、彼が示すよりも社会生活でずっと大きな役割を演じていると示すことができるが、しかしそれらは、ブルデューが示すようなハビトゥスからはそれほど離れていない、あるいはほとんど区別できない、ということも示したい」（Crossley 2002b: 349）と論じる。クロスリーは、つねに「我々の行為や世界内存在のあり方は、反省的であると同時に習慣的でもある」（Crossley 2002b: 349）と主張する。危機の時には、ハビトゥス的なありかたから反省的なありかたへ実践の産出原理が移ったように見えるが、クロスリーは「危機の時期に生じていることは、通常は反省されていない想定、感情、行動のうちのいくつかが反省的思考のなかにもたらされ、主題化されるということである」（Crossley 2002b: 349）と考える。危機の時にはそれまで反省されていなかったことが反省の対象になるだけであり、実践の産出原理が入れ替わるわけではない。そして、クロスリーは、反省的思考である「合理的計算や意識的計算それ自体が傾動や技能——そのようなものとして、これらはハビトゥスに属している——を獲得する」（Crossley 2002b: 349）と指摘する。つまり、反省はハビトゥスによって支えられているのである（Crossley 2001b: 113, 2002b: 349）。クロスリーは、ブルデュー

<sup>12</sup> 思考や反省性などをハビトゥスの外側に位置づける研究と、ハビトゥスの内部に位置づける研究の両方がある。

<sup>13</sup> ハビトゥス形成プロセスに意識が関係するという議論もある（Atkinson 2010: 15; Sayer 2005）。



一の議論を修正し、ハビトゥスと反省は代替的な関係にあるのではなく、反省はハビトゥスに支えられながらハビトゥスと共存する要素であると主張している。

あるいはB・ライールは、単一の実践の理論を想定するのではなく、行為の種類と行為者のカテゴリーごとに、行為のどこまでが反省的、計算的、計画的な部分で、どこまでが前反省的 (*pré-réflexive*)、非計画的、非計算的な部分なのかを精確に把握する必要があると論じている (Lahire [1998]2001: 187-8=2013: 272)。このようなライールの議論の先には、ハビトゥスを含む、複数の行為の論理の理論が描かれることになる。

このように先行研究では、ハビトゥスの前反省的な性格が問題視され、反省的な要素をハビトゥスと関連づけたり、複数の行為の論理を前提にしたりすることで、ブルデュー理論における「意識の不在」の問題を乗り越えることがさまざまに試みられている。

## ブラックボックス

また、ハビトゥスは「ブラックボックス」で、ハビトゥスによってどのように実践が産出されるのか、ハビトゥスはどのように獲得されるのか、そのメカニズムがわからないという批判もある (Jenkins 2002: 76-96; 田辺繁治 2003: 19-20, 2010: 258)。「行為者が自分のおかれた環境や他者と関わりながらいかに実践を行うか、という側面についてはほとんど踏みこんでいない。ハビトゥスの概念はブラックボックスのように、そのなかで進行している事態については何も語っていないのである」(田辺繁治 2003: 19-20)。ハビトゥス内部のメカニズムが不明であったり単純化されていたりすることや、行為者がハビトゥスを身体化する過程や行為者がハビトゥスによって実践を産出する過程が不明であることが問題になっている。

ブラックボックスという言葉が使われない場合でも、ハビトゥスの内部についての議論・検証不足を指摘する研究は多い (Lahire [1998]2001=2013, 2003; Sayer 2005 など)。ブルデューは社会的位置と性向の「共犯関係」を想定するが、社会的位置と性向との関係はブルデューの想定より複雑だと考えられる (Sayer 2005: 30-5)。したがって、行為者に身体化されているものについてのより詳細な議論や、性向の形成過程やハビトゥスの作動メカニズム、実践の生み出される過程について、さらなる検討・検証が必要だと言われている。

そこでたとえばライール ([1998]2001=2013, 2003) は(次の論文も参照: 村井 2010; 鈴木 2007)、個人が社会をどう身体化しているか、そこを問う必要があると主張する。身体化された社会はどのようなもので、どう身体化され、どう働くのか、性向とはどういうものかについて検証すべきだとライールは考える。そして、ブルデューがハビトゥスの重要な性質としている図式の転用可能性という考え方にたいして現代の心理学にもとづいて批

判し、すべての性向がどんな状況にも一般的に転用可能だとは考えられず、特定の状況に限定される性向もあるはずだと論じている。「ここで提起される探究の場合は、(過去の経験の総体の中で作りだされた) 身体化された行為図式が現在の状況の諸要素または配置 (*configuration*) によって発動されるその諸様態に関する問い、すなわち身体化された過去の経験のある部分——ある一部分だけ——が、現在の状況によって動員され、呼び起され、自覚めさせられる様式についての問いを提起するものである」(Lahire [1998]2001: 60=2013: 102)。個人は、さまざまな社会的コンテクストに応じて異なる複数の性向を発達させ、状況ごとに、それぞれの性向を抑えたり活性化したりしている、そのような複雑なメカニズムを考えるべきだとライールは論じている。また、社会人類学者の田辺繁治は、行為者が自分のまわりの言葉や道具、社会関係を活用しながら実践を組織していく能動的な過程に光をあてる研究(人類学者のジーン・レイヴと認知科学者のエティエンヌ・ウェンガーの研究)に、ブラックボックスでありそのなかで進行する事態について何も語らないハビトゥスの限界を越える道を見出している(田辺繁治 2003: 20)。

ハビトゥスの内部、すなわち、行為者がハビトゥスを身体化する過程や身体化したハビトゥスによって実践が産出される過程がわからないという問題は、先にとりあげた2つの問題にもかかわっている。ハビトゥスがブラックボックスであるがゆえに、行為者が実践にどのように能動的に関わっているのかが不明瞭になってしまう<sup>14</sup>。実践の産出過程がわからなければ、そこに行行為者の意識がどう関わるのかもわからない。ブルデューがハビトゥス概念によっておこなう実践についての説明は、ハビトゥスによってすべてを説明しようとするがゆえに、行為者とハビトゥス、実践の関係についての繊細な議論が欠けていると考えられるのだ。ハビトゥスによるこのような説明の「粗さ」は、別の角度からも問題になる。それがこの節で取り上げる最後の問題点、「変化と多様性」の問題である。

## 変化と多様性

ハビトゥス概念が実践の慣習的側面や恒常性を重視する概念であるために、行為者の変化や多様性をとらえるのに不向きな概念だと批判されることも多い。ハビトゥスは、行為者の生涯においてあまり変化しないものになってしまう可能性があると言われていたり(江原 2001: 77)、ひとりの人のなかにある複雑さや、同じような社会的位置にある人々のあいだにあるちがいをとらえられないと批判されたりしている(Atkinson 2010: 5-6; Lahire [1998]2001=2013, 2003)。そこでたとえばライールは、「それぞれの個人行為者

---

<sup>14</sup> 「ハビトゥスは構造を内面化しながら個々人の実践を生みだす、むしろ得体のしれないブラックボックスである。しかも、ハビトゥスの概念では、行為者がモノや言葉をいかに操作しながら実践を生みだすかという、いわば能動的な関係は説明されえない」(田辺繁治 2003: 118)。

(acteur individuel) のストックを形成する図式の一貫性や均質性を広くいきわたっている状況の形 (situation modale)、すなわち分化した社会の中で最も多く観察される状況と見なすのではなく、私たちは、そうした状況を最もありそうにない、最も例外的なものと考えておきたいと思う」(Lahire [1998]2001: 35=2013: 68) という。均質な社会においては一貫性のある均質なハビトゥスが形成されるかもしれないが、そうではない社会においては、個人のなかに複数の性向が身体化されると考えるべきだとライールは論じている (先の「ブラックボックス」のところも参照)。

また、ハビトゥス概念では社会の変化を説明できないのではとも言われている (Crossley 2002b: 337-40; Jenkins 2002: 79-81; Sewell 1992: 15)。変化の激しい現代社会にブルデューの議論は対応できないのではないかと批判されている (福島 2010: 54-5)。ハビトゥスによる実践の説明では、行為者が既存の社会的条件を再生産する実践以外の実践をおこなう可能性がうまく説明できないと指摘されている<sup>15</sup>。

行為者が社会を内面化し、その行為者が社会をつくるという議論は基本的には妥当なものだと考えられるが (Crossley 2002b: 338, 2005=2008: 169)、この「ハビトゥス—実践—構造」のあいだのどこでどのように変化が起こるのかが不明だと批判されている。「行為者によっておこなわれるもっとも狡猾で (cunning) 即興的な行為も、かならず構造を再生産してしまう」(Sewell 1992: 15)。「変動とは、……循環の断絶を意味するように思われる。そして、ハビトゥスと構造とが相互に構成的であるならば、この断絶はどこから生じるのかということが不明瞭である」(Crossley 2002b: 338)。ブルデューの理論の問題点は、変化が生じる場所が十分に理論化されていないという点にあるとされている。「問題は、ハビトゥスという概念が現在の内部における過去の持続的な現存を説明しているだけで、ハビトゥスが現在から未来へと移動するときに行為において周期的に生じる変動や革新を説明していない、ということである」(Crossley 2002b: 340)。

ブルデューはハビトゥス概念によって二元論の乗り越えが可能になると主張していた。しかし多くの議論において、ハビトゥス概念では、能動的な行為者、意識的に考え行動する行為者、行為者の実践の多様性などが十分に説明できないと批判されている。ハビトゥス概念は客観主義や決定論に戻っているとまでは言えないかもしれないが、行為者側についての議論の不足が指摘されるということは、社会／行為者、無意識／意識といった二元論を完全には乗り越えていないと見られていると言えるだろう。また、ハビトゥスの議論

---

<sup>15</sup> この「変化」の問題には、行為者の意識の不在という問題点も関係している。たとえば山根純佳は次のようにブルデューを批判している。「ブルデューのハビトゥス概念は、行為者が過去の価値や意識を反省的に問い直し、実践をとおして構造を変動させている側面について論じるのには有効ではない」(山根 2010: 50)。

は、個人のなかに社会が身体化されそれが実践を産出するメカニズムについても十分に説明していないと批判されている。ブルデューの議論では、1章で見たように実践の柔軟性、即興的な実践への言及はあっても、それがどのように可能になるのかが不明なのである。たとえ即興がハビトゥスによって可能だったとしても、それはハビトゥスという謎のメカニズムの内部で、行為者の関わりのないところで自動的に産出されるようなのだ。ハビトゥス概念による実践のモデルでは、行為者が社会構造に一律に決定されすぎていて、行為者が社会によって規定されると同時にどのようにして能動的・革新的・個別的な存在になるのか、どのようにして行為者が多様な実践をおこなうのか、そのメカニズムについての説明が不足していると考えられている。

1節の最後に述べたように、ハビトゥスは評価される場合も行為者の能動的・意識的実践ではない側面に焦点をあてている点で評価されており、ハビトゥスが社会／行為者、無意識／意識の二項のうち社会と無意識の側に偏っているという理解は評価される場合でも変わらない傾向にある。評価されるときでも批判されるときでも、ハビトゥス概念は、社会／行為者、客観主義／主観主義、決定論／自由、無意識／意識のうち前者に偏ったものと理解されているようだ。その偏りを是正しハビトゥスの問題点を乗り越えるために、先行研究では、ハビトゥスにおいてブラックボックスになっている部分についての検討や、ハビトゥスと意識的思考や反省、行為者、agencyなどの関係についての考察がおこなわれている。つまり、ブルデュー理論・ハビトゥス概念の問題点を乗り越えるためには、ブルデューに足りない要素を「追加する」必要があると考えられている。ハビトゥスは依然不完全な概念であり、とりわけ行為者に関する説明を補わなければならない状態にあると、多くの研究では理解されているのである。

では、本稿は、ハビトゥス概念をどう評価するのか、先行研究がおこなうブルデュー理論を補う試みをどう評価するのか。この点については、次の章で論じたい。

### 第3章 実践感覚へ

2章では、行為や行為者についての理論として、ハビトゥス概念がどのように評価されどのように批判されているのかを見てきた。ハビトゥス概念にたいしては評価も多いが、社会／行為者の二項のうち行為者側について説明や議論が足りないとさまざまな角度から批判されてもいる。

この3章ではまず、本稿はハビトゥス概念をどう評価するのか、先行研究で指摘されているハビトゥス概念の問題点について、本稿はどう考えているのかを説明したい。本稿も、ハビトゥスについてのブルデューの議論には不十分なところがあると考え、ハビトゥスの問題点を乗り越えるためには、先行研究の多くでおこなわれていたようにブルデューに足りない要素を「追加する」ことではなく、ブルデューの議論を詳細に検討することでハビトゥス概念の見えていなかった側面を引き出し、能動的な行為者をブルデュー理論に見出す・位置づけることが必要であり可能であると主張する。先行研究において、ハビトゥスは広い意味での習慣のようなものと理解される傾向がある。しかしハビトゥスには「習慣」という側面だけではなく、「実践感覚」という面もある。この実践感覚はハビトゥスのたんなる「たとえ」と理解されることが多く、理論的に検討されることがほとんどないが、実践感覚についてのブルデューの議論を検討することによってハビトゥスの新たな理解が可能になるのではないかと本稿は考える。そこで、この章の3節では実践感覚についてこれまでの研究でどのような議論があるかを検討し、本稿はどのような角度から実践感覚を検討するのか、本稿の視座を確定する作業をおこなう。

#### 1 ハビトゥスの問題点を乗り越えるために必要なこと

2章では、ブルデューのハビトゥス概念にたいしてどんな評価や批判があるのかを見てきた。ブルデューは、ハビトゥス概念によって客観主義／主観主義、決定論／自由などの二元論を乗り越えることが可能になると主張するが、多くの論者は、ハビトゥスは二元論を完全には乗り越えていないと考えている。ハビトゥスによる実践のモデルは行為者が不在なのではないか、行為者の個別性や能動性、反省性などがどう説明されるか・どう位置づけられるかが不明ではないかと批判されている。ハビトゥスが評価される場合でも、その慣習的側面や身体的側面に注目されることが多い。ハビトゥス概念は、客観主義／主観主義、社会／行為者の2つの項のうち、前者に光をあて後者についてのフォローが十分ではない概念と理解されているようであった。

それでは、本稿はハビトゥス概念をどう評価するのか。

本稿も、ハビトゥスについてのブルデューの議論には物足りなさを感じる。先行研究が指摘するように、たしかにブルデュー理論やハビトゥス概念には行為者が見えにくい、とくに行為者の能動性や創造性がどのようにして可能になるのか、そのメカニズムがはっきりしないという問題点があるように思われる。

ハビトゥスには、自由な即興の形成原理、「発明術」という役割が与えられており、それはハビトゥスのもっとも魅力的かつ重要な特徴でもある。しかし、その「即興」や「発明術」がどのようにして可能になるのか、行為者がその即興や発明にどのように関わるのかがよくわからないのだ。ブルデューの議論では、実践の産出過程のすべてがハビトゥスによって、ハビトゥスのなかで説明される傾向があるため、実践の産出過程がどのようなものなのか、どうやって柔軟な実践が可能になるのか、そこに行行為者がどう関わっているのかが見えにくい。

ブルデューは、「循環的で機械論的モデルこそ、まさしくハビトゥスの概念が打破しようとするものです」(Bourdieu and Wacquant 1992: 135=2007: 178)と言う。行為者の実践は社会構造に規定されながらも能動的に・創造的に、ゆらぎや変化を含みながらおこなわれている、ハビトゥス概念がこのような行為観を示そうとしていることはわかる。そしてハビトゥス概念が、構造に操られる人形のように行為者を見る行為者観から距離をとろうとしていることも伝わってくる。問題は、それがどのようにして可能になるのかがはっきりとはわからないことである。説得力のある説明が十分になされているとは残念ながら言えない。ブルデューを評価する研究が主張するようにブルデューの議論に行為者の能動的側面が垣間見えることはたしかである。しかし、批判者たちが言うように、二元論を乗り越える道はまだ明確ではないと本稿も考える。

しかし、本稿は、先行研究がこの問題を解決するためにとるアプローチにたいしても不満がある。2章で見たように先行研究では、ブルデューに不足している要素を補おうとさまざまな試みられている。このような試みは、ブルデューの議論がフォローできていない点をピンポイントでカバーすることを可能にするだろう。だが、ブルデューにない要素を足すことで行為者・主観の側についてのブルデューのフォロー不足を補うことは、ブルデュー理論やハビトゥス概念を、社会／個人のうち社会側を象徴するものとして（意図せずに）固定してしまうことになる。そして、先行研究のアプローチでは、ブルデュー理論やハビトゥス概念についての「狭い」理解が固定され、ブルデューのハビトゥスについて理解を深める道が閉ざされてしまう。

ブルデューの議論は全体的に難解であり、概念についても明確な定義はない。もちろんハビトゥスについても同様である。ブルデューの理論やハビトゥス概念は、そのときどき

で微妙にそのかたちを変えていく「開かれた」ものである。そうであるならば、ハビトゥスやブルデューの理論にたいし否定的な理解をし、その理解を固定してしまうよりは、ブルデュー理論・ハビトゥス概念にたいして内在的・創造的な解釈を試みて、ブルデュー理論自体を「内から」発展させる余地があるのではないだろうか。

先に述べたように、ブルデューはハビトゥス概念によって社会／個人、決定論／自由、条件づけ／創造性といった二項対立を乗り越えると断言している。したがって、ブルデューは実践にたいする行為者の関与や創造性を含むかたちでハビトゥス概念をイメージしていた。行為者の能動性や創造性についてのブルデューの議論は、社会構造による実践の構造化についての議論に比べるとたしかにかなり断片的であり、まとまっても洗練されてもいない。しかし十分に論じられていなかったとしても、ブルデューの議論のなかに、ブルデューがなぜハビトゥスのなかに能動的な行為者を想定することができたのか、どのように多様な実践が可能になると考えていたのかを理解する手がかりはあるはずである。そうであるならば、ブルデューの議論を詳細に検討し、ブルデューのなかにある「能動的な行為者像」の芽を見つけ出して引き出していくことで、ブルデューの議論の足りない点を補うことも可能であるはずだ。多くの先行研究のように新たな要素を付け加えるのではなく、ブルデューの議論を整理しブルデューのハビトゥスのなかに行為者の能動性や創造性を見出すことによって、ブルデュー理論の問題点を乗り越えることが可能なのではないだろうか。

以上の理由から、本稿は、ブルデュー理論が抱える不明点、すなわち、行為者の実践が社会構造に規定されながらも能動的に・創造的におこなわれるメカニズムを明らかにする手がかりを、ブルデューの議論のなかに探すことにしたい。そこでまず、次節では、ハビトゥスをめぐるブルデューの議論について、これまでの研究でまだ十分に理解されていない面はないか、検討してみることにする。

## 2 習慣としてのハビトゥス／実践感覚としてのハビトゥス

この節では、これまでの研究でハビトゥスについて見落とされていたり軽視されていたりすることはないか、考えてみたい。まずハビトゥス概念についての一般的な理解の特徴を考え、そこから抜け落ちている面はなにか、検討しよう。

これまでの研究の多くに共通して見られるハビトゥス理解は、ハビトゥスが経験をとおして身体化された習慣のようなものであり、過去の経験にもとづいて実践を産出する原理であるというものだろう。たとえばN・クロスリーは、ブルデューの理論を「習慣 (habit)

の概念を社会学における中心的論議へと高め」(Crossley 2001a: 4=2012: 16) たものとして検討し、しばしば、ハビトゥスを habit と置き換えている(ただしこの habit 概念は、メルロ＝ポンティの habit 概念である)(Crossley 2001a=2012 など)。B・ライールもハビトゥスを「習慣(habitude)」と言い換えているし、ブルデューの理論を「過去の経験が未来のすべての行動の原理として位置づけられる」(Lahire [1998]2001: 53=2013: 93) タイプの理論にカテゴライズしている<sup>16</sup>。村井重樹(2011)は、「ブルデューのハビトゥス概念は、……習慣概念の理解を刷新する理論的可能性をもつように思われる」(村井 2011: 6) と述べ、ハビトゥスを批判的に検討することをとおして習慣概念の社会学における意義を考察している。また、ハビトゥスは「過去の再現」(田辺繁治 2003: 247) とも言われている。このように、ハビトゥスについて習慣性や過去との連続性を示す言い換えをおこなうことは一般的である<sup>17</sup>。

この習慣として理解されるハビトゥスは、1章で述べた、人々の実践が規則にしたがっているわけではないのに規則的であるのはなぜかという、ブルデューの省察全体の出発点にあった問い(Bourdieu 1987: 81=1991: 105) に対応している。社会構造によって構造化された、過去の経験の沈澱であるハビトゥスが行為者に身体化されていると考えることで、規則に操られていたり意図的にしたがっていたりするわけではないのになぜ人々の実践が規則的・恒常的な傾向性をもつのかを理解することが可能になる。また、習慣としてのハビトゥスへの着目は、これまでの社会学(ブルデュー以前の社会学)において「行為者は、目的・手段といった諸要素へと分解され、身体化した『習慣＝過去』を取り去られた抽象的存在に還元されてきた」(村井 2011: 6) ことへの問題意識によるところも大きいだろう。

しかしこの習慣としてのハビトゥスには大きな欠陥がある。ハビトゥスが習慣や過去の沈澱物のようなものならば、そのハビトゥスから創造的な、型にはまらない、柔軟な実践がどのようにして可能になるのかは、追加で説明されなければならない。習慣は創造性を許容するかもしれないが、創造性を説明することはできない。習慣的なものとしてハビトゥスを理解すると、先行研究の多くが試みていたように、ブルデューに足りない議論を補う必要があるという考えに自然と導かれるだろう。

---

<sup>16</sup> クロスリーやライールがハビトゥスを「習慣」と言い換えることは、ブルデューのハビトゥス概念よりも「習慣」概念のほうがよいという評価をしていることのあらわれであるとも考えられる。「主として身体化された諸習慣に準拠する唯一の概念であるハビトゥス概念とは違って、習慣概念は、社会科学の考察にとって致命的な混同、すなわち、行為の様態としての習慣、非意志的で非意図的な行為としての習慣と、(反省的であるか否かに関わらない) 行為のジャンルとしての習慣(たとえば、とっさにサッカーボールを蹴る習慣があるということと、言葉を文法的に見直す習慣があるということの違い)の混同を回避することを可能にしてくれる。つまり、習慣とは、理論的に考える習慣であったり、反省したり、計画を立てたり、概念化したりする習慣などでもありうるのであって、決して前反省的な行動に還元しうるものではない」(Lahire [1998]2001: 89=2013: 140)。

<sup>17</sup> 磯直樹(2008)は、日本ではブルデューの曲解と誤読が多いと批判するなかで、「例えば、ハビトゥス概念は『身体化された慣習性』といった程度の意味に矮小化され、それが社会的世界を構成するための基礎となることは理解されてこなかった」(磯 2008: 38) と述べている。



しかしハビトゥスは、あるいはブルデューの議論は、習慣のメリットを説明するだけの議論であったのだろうか。実はハビトゥスを習慣的なものと理解することこそが、ハビトゥス概念にたいする批判の原因になっているのではないだろうか。ハビトゥス概念の基本的な理解自体をすこし疑ってみる必要があるだろう<sup>18</sup>。

もちろん本稿は、ハビトゥスが「歴史の生産物」であり、過去を再現する傾向を持つことを否定するつもりはない。本稿が主張したいのは、過去を再現する傾向を持つ習慣的なものとしてハビトゥスを理解する見方とは別のとらえかたをする可能性がないか、検討してみる価値があるということである。

では、ハビトゥスに、習慣的なものとは異なる側面があるだろうか。1章でハビトゥスについて説明する際に、ハビトゥスの多様な状況に合わせて多様な実践を産出する側面は、ゲームのセンス<sup>19</sup>、すなわち実践感覚と言い換えられていると述べた。行為者は、実践感覚によって、明確な意識化を経ることなくさまざまな実践をおこなう。ブルデューは、ハビトゥス概念を広い意味での「習慣」的なものとしてだけではなく、「実践感覚 (*sens pratique*)」、感覚的なものとしても描いている。

実践というものは、意識的で計算されたものでも、機械的に決定されたものでもなく、名誉のゲームというこの特異なゲームの感覚としての、名誉の感覚というものの産出物に他ならない (Bourdieu 1987: 33-4=1991: 40-1)

ハビトゥスによる実践の産出メカニズムは、実践感覚 (ゲームのセンス) によって実践が導かれるメカニズムでもある。ハビトゥスには「感覚」という側面があるのである。

ブルデューにとってこの「感覚」という側面は、たんなるメタファー以上の意味があったのではないか。ブルデューは次のように書いている。

私の意図ははじめから感性による認識 (*connaissance sensible*) に固有の論理を明らかにしようとすることであり、そのために非常に相異なる経験的対象 (たとえばカビール人の儀礼など) をとりあげて、ほとんど同時にその分析を進めてきた。(Bourdieu

---

<sup>18</sup> 次のようなブルデューのコメントを引いておくこともできる。「私はとくに『習慣 (*habitude*)』とはいわないために『ハビトゥス』といっているのです。つまりハビトゥスは性向の体系のなかに刻印された生成的 (創造的とはいわぬまでも) な能力なので、この性向体系は実践的に体得しているというもっとも強い意味での技 (*art*)、とくに発明術 (*ars inveniendi*) を意味しています。一言でいえば、注釈者たちは機械論に逆らってつくられた概念から機械論のイメージを抱いているのです」(Bourdieu and Wacquant 1992: 122=2007: 162)。

<sup>19</sup> ゲームのセンスは、「界 (*champ*) の諸要求に対する先取り調整としての実践感覚の特に模範的な例」(Bourdieu 1980: 111=2001(1): 105) と言われている。

1992: 432=1996 II: 206)

カビール農民についての儀礼行為についての、あるいは大学教授や批評家がおこなっている評価作業についての私の分析は、実践感覚（美的感覚はその特殊ケースである）に固有の論理に関してすでにさまざまなことを明らかにしていた（Bourdieu 1992: 433=1996 II: 207)

先に述べた、「人々が規則にしたがっているわけではないのに実践が規則的である理由」を理解することとともに、「実践感覚の論理」「感性による認識の論理」を理解することも、ブルデューの研究を導く重要な問いであったのではないだろうか。もちろん実践感覚としてのハビトゥスと習慣としてのハビトゥスのあいだには密接な関係があり、実践感覚は習慣に基盤をもつものだと考えることはできるだろう。しかし同時に、習慣的なハビトゥスが実践感覚としてとらえられることでどんな知見が加えられるのかについても考える必要がある<sup>20</sup>。

また、ハビトゥスの実践感覚という側面は、構造主義とブルデューを分かつ点としても重要である。先ほど述べたように、実践感覚はハビトゥスにもとづいて行為者が「柔軟に」「発明的に」「即興的に」実践する点に関係するものであり、ハビトゥス概念の示す行為者像が構造や規則をただ実行している行為者像と異なることを示す重要な部分を表現している。これまでの研究においても、「ブルデューは、『実践的な知 (practical knowledge)』や『実践感覚 (sense of practice)』という言葉によって、彼が human agency についての構造主義者の説明に欠けていると考えた、このまったく形式化されていない (nonformalized) 実践的な行為の次元を表現しようとした」(Swartz 1997: 100)、「構造主義が行為者を構造の付帯現象にすることに対して、ブルデューは、実践感覚や戦略の概念により行為者を入れ込む社会理論を構想した」(竹内 2009: 255-6) のように、多くの議論で実践感覚は構造主義的人間観からの転換点を示し、実践的な行為の次元に光をあてて行為者を入れ込むことを可能にする視点として言及されている。身体化された構造としてハビトゥスを理解するだけでは、行為者の外にあった構造が経験のなかで内面化されたにすぎず、ブルデューがどのように構造主義から分かれ、どのように構造主義がとらえそこねた行為者を議論に入れ込んだのかを、十分に理解することはできない（数々の批判の存在が示しているよう

---

<sup>20</sup> この点についての否定的な議論は存在する。ライールは、ブルデューの議論においてハビトゥスは実践感覚（実践的制御）と象徴的制御の対をともに含むこともあれば、前者（実践感覚）によって代用されることもあり、そこには矛盾が生じると言う。二番目の用い方をされる場合には、ハビトゥスはもっぱら実践感覚として、すなわち「自覚なき知識、前反省的制御」として定義され、実践の象徴的、自覚的、合理的次元について説明することが不可能になると述べている (Lahire [1998]2001: 171-2=2013: 250)。しかし本稿の後半で論じるように、実践感覚概念をライールが考えていたより広く、積極的に理解することは可能であり、そのように実践感覚概念を理解するならば、ライールが言う「矛盾」は解消されるはずである。

に)。ハビトゥスが実践感覚であると考え、行為者が実践感覚によって判断し実践しているのだと考えることによって、行為者を入れ込んだ社会理論をブルデューの理論にすることが可能になる。構造主義からの分岐点、客観主義や決定論からの分岐点としても、実践感覚概念は重要だと言える。

このように、ハビトゥスには、多くの研究で理解されている習慣としてのハビトゥスだけではなく、実践感覚としてのハビトゥスという側面があり、実践感覚は、客観主義からの分岐点を理解する上でも、ブルデューの研究のなかの「実践の規則性を説明する」以外の側面を理解する上でも、とても大切な概念であると考えられる。だが、残念ながら実践感覚についてブルデュー自身の議論において明快でまとまった議論がおこなわれているとは言いがたい。したがって、ブルデュー理論やハビトゥス概念に行為者が見えにくい、行為者の能動性や創造性がどのようにして可能になるのか、そのメカニズムがはっきりしないという問題点があるのは、実践感覚についての議論や理解が深まっていないからだと考えることができるのではないだろうか。実践感覚概念について理解を深めることができれば、ブルデュー理論における行為者像、ブルデュー理論における二元論の乗り越えの道筋について新たな理解が得られるのではないだろうか。

そこで本稿は、実践感覚概念を理論的に検討すべき概念であり、ハビトゥスのまだ理解されていない一面であると考え、実践感覚について検討を深めていくことをとおしてブルデュー理論における行為者の位置について考察をしたい。次節では、実践感覚についての本格的な検討に入る前に、先行研究において実践感覚にたいしどんな見解・議論があるかを検討しておきたい。そして、本稿は実践感覚についてどのような角度から考察すべきかを考えたい。

### 3 実践感覚についての先行研究

この節では、先行研究において実践感覚についてどのような議論があるのかを検討した上で、本稿は実践感覚についてどのように考察すべきかを考えたい。

まず、多くの研究において、実践感覚はハビトゥスの単なる言い換え、実践が身体的・前反省的におこなわれることを示す「たとえ」のようなものとして扱われている。

「感覚」という言葉は、無意識・コントロールできない・衝動的・身体的というニュアンスをもつ。また、実践感覚の典型例がスポーツのプレイヤーに見られるような「ゲームのセンス」であることもあり、多くの研究の実践感覚についての理解は優秀なプレイヤーが身体的にうまくプレイをするというイメージで止まってしまう。その場合、実践感覚は、思考や言語による介入なしに、身体的にうまく実践する感覚であると理解される。「それ〔＝

実践を発生させる〈図式〉は〈実践感覚〉とか〈ゲームのセンス〉のように、意識が働いたり言葉や概念に従ったりする手前で作用する身体化されたものである」（田辺繁治 2003: 19, [ ] 内は引用者による）。

そして、実践感覚という見方は実践についての適切な理解を妨げるものとして批判されている。

すべての行為は前反省的で非意図的で無自覚的（*infra-conscious*）といった性格をもつ実践感覚の作動の結果であるとか、日常的行為は一種のたえまない即興（完全に物事の流れの中に埋没している（*immanent*）、予測されない運動）のなかで次々に生起していくのだと一挙に仮定してしまうとすれば、それは一つの可能な事態を普遍化し、社会的諸実践の多くの部分に対して盲目的なままにとどまることになる。（Lahire [1998]2001: 166=2013: 243）

ブルデューは、「合理的で意識的な計算」、あるいは *reflexivity* が日常生活に入り込む度合いを、当然のこととして過小評価している。彼が非常に多くの社会的行為を理解するために用い、ハビトゥスの手近な定義として用いている「ゲームのセンス」というメタファーは、きわめて有力で魅力的なものではある。しかし、そのメタファーは、それでもってさまざまな事柄を説明するよう作り上げられていることから、逆にハビトゥスに関して非常に示唆的な内容を失ってしまっている。（Crossley 2001a: 117=2012: 218）

思考（*thought*）や意志（*volition*）についてのブルデューのコメントは練り上げられておらず、そして、「実践感覚」が……ネットにつく（*rushing the net*）テニスプレイヤーのような現象と同じようなものであり、……行動主義者（*behaviorist*）の言うような刺激と反応に近い、心的な・知的な（*mental*）関わりの低い、条件づけられた熟練した反射能力（*reflex*）だという、より頻繁におこなわれる主張によって隠されてしまっている。（Atkinson 2010: 13）

いくつかの先行研究において、実践感覚は、ハビトゥスによって実践が無意識的・身体的・自動的におこなわれることを象徴するものであり、反省的で意図的で能動的な行為についての理解を阻害するものだと考えられている。このような批判的な見解を見ると、実践感覚は、行為者の存在を実践の過程に位置づけるどころか、実践の過程における行為者の役割について考えることと対極にあるように見える。

だが、先行研究における実践感覚をめぐる議論は、このような否定的なものだけではなく

い。宮島喬（2011）は、ブルデューが書名『実践感覚（*Le sens pratique*）』にこめた意味<sup>21</sup>を重視すべきであると述べている。この「sens」は理性の対語の「感覚」（感情に近い）という意味で解するのではなく、もっと能動的な「（直感的な）把握能力」「認識能力」という意味で理解すべきだと指摘している（宮島 2011: 211）。宮島はこのように実践感覚の能動性を指摘しているが、残念ながら概説的なテキストにおける言及であったため、これ以上の議論はおこなわれていない。

また、ブルデューの実践感覚概念の原点を探る研究として、近藤理恵（1997）を挙げることができる。近藤は、カビール族の「名誉の感覚」についてのブルデューの初期の研究<sup>22</sup>やアルジェリアの労働者についての研究を危機的状況における実践についての議論として読み解くとともに、実践感覚概念の原点を明らかにしている。そして、名誉の感覚による実践を描くブルデューの議論に、行為者の自己決定能力への強調を見出している。

二元論の観点から実践感覚について論じている研究としては、A. King（2000）がある。King は、ブルデューの議論のなかには2つの両立しない立場があると主張している。ひとつは、ハビトゥス概念に象徴されるような客観主義的立場である。King にとって、ハビトゥス概念はブルデューが乗り越えようとした客観主義の立場に戻るものである。ハビトゥス概念が示しているのは、客観的構造に決定された行為者像であり、行為者の知らないルールや構造に行為が決定されるという行為観である。行為者はハビトゥスが示すことに従って行為するだけであり、そこには行為者が戦略を練る余地がない。もう一方の立場は、King が “practical theory” と呼ぶ立場である。この practical theory として King は名誉の感覚をめぐる議論などに注目し、そのなかに “virtuoso（名人）” としての行為者を見出している。King は、ブルデューの名誉の感覚の議論から、実践感覚を間主観的（intersubjective）なものと理解する。カビールの名誉の感覚は、カビールの男たちの交渉のなかで確立され変形される agreement である。そこでは適切な行為は集団の他のメンバーに「ふさわしい行為だ」と解釈してもらえるかどうかで決まる。行為者は、この集団によって確立され判定される実践感覚、他者から学んだ実践感覚に従って行為する。行為者は、客観的構造にではなく、集団の他の個人によって規制されているのであり、この実践観においては行為者に再交渉の余地がある。この実践感覚（名誉の感覚）についての議論などで示されるのは、人々のあいだの実践的で交渉的、不確定な相互行為によって成り立つ社会像であり、交渉を実践的に巧みにおこなう個人像（virtuoso）であると King は考え

<sup>21</sup> この『実践感覚（*Le sens pratique*）』の書名について、山本哲士は、「実践感覚」というのは間違いであり「実際の意味」「実際になされていることはどういう意味をもつか」ということがもとのタイトルであり、「この『意味 sens』が、ブラチックに『感覚 sens』にまでなっているという理解から、『感覚』という訳をあてたのだと思いますが、『ブラチックな意味』論が、探究されて明らかにされたということではないでしょうか」と主張している（山本 2007: 171）。

<sup>22</sup> 1960年に書かれた、Bourdieu, [1972]2000, *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Éditions du Seuil.のなかにおさめられている、「Le sens de l'honneur」（巻末の文献リストでは Bourdieu [1972]2000=1979）である。

ている。そして King は、この実践感覚（名誉の感覚）についての議論などに見出すことのできる practical theory は、二元論を乗り越える道を示すものだと評価している。

このように、ブルデューの「実践感覚」という表現や実践感覚をめぐる議論にたいしては、肯定的な見解も存在する。また、先の2節で紹介した、構造主義的人間観からの転換点を示すものとして実践感覚概念に言及する論者のコメントも、実践的に行為する行為者を実践感覚概念に見出すものだと言えることができるだろう。これらの議論は、実践感覚をめぐるブルデューの議論のなかに能動的な行為者を見出せる可能性があることを示している。

しかし、実践感覚を肯定的に評価する先行研究には、本稿の問題関心、すなわち、実践感覚について検討することでハビトゥスのまだ理解されていない面を見出し、ブルデュー理論における行為者の位置を明らかにしようという本稿の関心から考えた場合、残念ながら不十分なところがある。

まず、実践感覚という表現が評価される場合でも、その理由が論じられることはほとんどない。近藤や King の研究は実践感覚についてのブルデューの議論を詳しく検討しているが、本稿の問題意識から見るとそれぞれに不足や問題点がある。近藤の研究はブルデューの議論を過去からの持続性によって危機的状況を乗り越える実践の理論として論じているため、実践感覚の独自性、「過去からの持続性」「習慣としてのハビトゥス」を越える理解の可能性については十分には検討されていない。それにたいして King は、実践感覚には身体化された構造としてのハビトゥスとはすこし異なる意味合いがあることを明らかにしているが、この King の議論には、ハビトゥスと実践感覚を両立しないものと考え、実践感覚をハビトゥスから切り離してしまうという問題点がある。

King は、客観的構造が行為者に身体化され、その身体化された構造が実践の原理になるという考え方を、客観的構造に決定された行為者像として否定する。しかし、客観的構造が実践の傾向性を規定するという考え方は主観主義の問題点を乗り越えるために必要な部分であり、客観主義の問題点の乗り越えとともに主観主義の問題点をも乗り越えるのがブルデュー理論の目的である。だが、King の議論は、ブルデューの実践感覚を（間）主観主義的な方向に引き出すことによって、ブルデューの議論からアンチ主観主義的な部分を切り落としてしまう。King が切り捨ててしまったのは、ブルデュー理論の核心部分のひとつなのである。客観的構造を切り捨てた King の議論、King の描く実践感覚は、ブルデュー理論の重要な特徴を失ってしまっていると言えるだろう。

また、King は、実践感覚を人々の交渉プロセスのなかでつくられる間主観的なものとらえているが、ブルデューは、個人間の（interpersonnel）関係が個人（personne）と個人との関係であるのは見かけだけのことにすぎない、相互行為の真理は、決して全面的に相互行為のなかにあることはない論じている（Bourdieu 1977b: 81, 1980: 98 n.9=2001(1):

251)。糟谷啓介は、ブルデューの言語論の核心を次のように述べる。

言語的出来事の社会的意味は、コミュニケーション事象の背後にありつつそれを統御する言語と言語、ないしはその言語を話す集団どうしの社会的力関係によって定められるのであり、けっして個人間の相互行為と周囲の状況に還元することはできない。これこそブルデューが「言語的交換のエコノミー」という概念でいわんとする核心である。(糟谷 2003: 142)

ブルデュー理論では、人々の交渉プロセスとその背後にある社会構造をつなぐことがとても重要である。したがって、ブルデューの名誉の感覚についての議論のなかに間主観的なニュアンスが読み取れたとしても、ブルデューの実践感覚概念の真骨頂はそこにあるのではないだろう。Kingのように、実践感覚をハビトゥスや客観的構造と切り離して間主観的なものと概念化することは、ブルデュー理論としては妥当ではない。

Kingと異なり、本稿は、実践感覚をめぐるブルデューの議論を、ブルデュー理論に沿って、ハビトゥス＝身体化された過去や社会構造と切り離すことなく検討する必要があると考える。本稿がおこなうべき作業は、客観的構造や身体化された過去と実践感覚の関係を保ったままで、ブルデューの実践感覚をめぐる議論のなかに習慣としてのハビトゥス、身体化された過去としてのハビトゥスとはすこし異なるハビトゥス・実践感覚像を探ることであろう。

また、Kingと近藤の両者が注目しているのがカビールの名誉の感覚についての議論だという点は非常に興味深い。この名誉の感覚をめぐる議論は、カビール社会についての民族学的研究という性格が強い。この議論は、近藤が指摘するように、「ブルデューの思考の原点」(近藤 1997: 208)、実践感覚概念の原点として重要であるが、本稿の問題関心にとっては、その原点の先に実践感覚をめぐるどのような議論がおこなわれているかの方がより重要である。すなわち、名誉の感覚よりも一般化された実践感覚をめぐるブルデューが展開する議論のなかに能動的な行為者を見出す必要がある。

そこで本稿は、ハビトゥスと実践感覚の関係を切り離すことなく、実践感覚やゲームのセンスをめぐるブルデューの議論のなかに実践感覚という視角が独自に持っている(習慣としてのハビトゥスとは異なる)地平、能動的で創造的な行為者像を見出すことを試みたい。その場合、実践感覚は、Kingの考えていたような間主観的なものではなく、主観的であり客観的でもあるものとしてあらわれるはずである。また、この検討は、ハビトゥス批判を乗り越え、実践感覚にたいする否定的な見解をも乗り越える新たなハビトゥス理解、新たな実践感覚理解をもたらすものになるだろう。

本章では、ブルデューのハビトゥスについての議論において不明瞭な点を確認した後、

そのハビトゥスの問題点をどのようにして乗り越えるべきかを検討した。多くの先行研究がおこなうように、ハビトゥスやブルデュー理論に「外から」足りない要素を補うのではなく、「内から」、ブルデューのハビトゥスをめぐる議論の理解されていない面を引き出すことによって問題点を乗り越える必要がある。

ハビトゥス概念はこれまで、広い意味での習慣のようなものとして理解されることがほとんどであった。ブルデューはハビトゥスを「実践感覚」とも表現しているが、この面については、ハビトゥスの単なる「たとえ」、無意識的・身体的・自動的な実践観を示すものとして理解される傾向があった。

しかし、宮島や近藤、King が注目したように、実践感覚には、実践への行為者の能動的な関わりを示す面が含まれていると考えられる。また、実践感覚は、構造主義的人間観とブルデュー理論の分岐点を示し、ブルデューの研究の背後にある問題関心のひとつを象徴する概念でもある。したがって、実践感覚について詳細に検討することは、ブルデュー理論における行為者の能動性や創造性を理解するために有効かつ必要であろう。そこで本稿は、ブルデューの実践感覚をめぐる議論を深く検討することをおして、習慣としてのハビトゥスとはすこし異なるハビトゥス・実践感覚像を明らかにし、ブルデュー理論に行為者を見出す・位置づけることを試みたい。ブルデュー自身の議論から実践感覚のなかで発揮される行為者の能動性をすくいあげ、新しいハビトゥス理解を提示することを目指したい。

そこで後半の第2部では、実践感覚についてのブルデューの議論を詳細に「読みなおし」、実践感覚について深く理解することによって、これまでの一般的なハビトゥス理解を超え、実践に能動的に関わる行為者を見出すことを試みる。



## 第2部 ブルデューを読みなおす——実践感覚に着目して



## 第4章 意味を与える実践感覚——主観的意味と客観的意味

### 1 感覚・意味・方向——sens の3つの意味

具体的に実践感覚 (sens pratique) とは何をあらわしているのか。ブルデューは次のように言う。

民族学者の方も、もし彼らが交換という観念の下に、ポトラッチやクラを考えるにとどまらずに、触覚的機転 (tact)、巧妙さ (doigté)、繊細さ (délicatesse)、器用さ (adresse)、あるいはノウハウ (savoir-faire) など、その数の分だけ名前のある実践感覚 (le sens pratique) の言語の中で言い表される、民族学者自身の社会性の関係のゲームをも考えてきていたら、機械モデルの言語へ心傾けることも少なかったことだろう。(Bourdieu 1980: 135=2001(1): 129)

実践感覚は、触覚的機転 (tact)、巧妙さ (doigté)、繊細さ (délicatesse)、器用さ (adresse)、ノウハウ (savoir-faire) などのようなものを指している。実践感覚は、意識化できずマニュアルには書ききれない勘のようなもの、わたしたちがひとつひとつの行為について熟慮することなく感覚的にうまく行為できる、そのときの「感じ」をあらわしていると考えられる。

規則や原理を含まない（ただし不調や失敗の場合を除く）、ましてや計算や推論を含まない（これらはいずれにせよ、「些かの遅延も許さない」行為の緊急性 (l'urgence) によって排除される）実践感覚は、その場で (sur-le-champ)、一瞥して、行為の真っ只中で (dans le feu de l'action)、状況の意味=方向 (sens) を評価し、直ちに時宜を得た (opportune) 反応を産み出すことを可能にする。(Bourdieu 1980: 177=2001(1): 172)

実践感覚による実践は、規則にしたがったり対応を熟慮したりするよりも、状況にたいする瞬時的的確な反応を可能にすると考えられている。このような実践感覚はわたしたちにとってとても身近なものだ。たとえば長く勤めたアルバイト先での仕事の手順は、意識しなくても身体が覚えている。現場で起こるたいがいの出来事には瞬時に適切な処置をほどこすことができる。このようなときにわたしたちが実践的に働かせている感覚が、実践感覚である。

また、ブルデューの議論では、実践感覚は、勘や身体化されたノウハウのようなものと

してだけではなく、実践的理解の原理としても登場する。

実践的理解 (la compréhension pratique) の原理は、認識する意識 (フッサールの超越的意識やハイデガーの実存的現存在 (*Dasein existentiel*)) ではなく、ハビトゥスの実践感覚である。自分が住んでいる世界に住まわれているハビトゥス、世界を構築し世界に意味 (sens) を与えるところの、参画と緊張、注意の直接的関係 (une relation immédiate d'engagement, de tension et d'attention) のなかで、自分が積極的に介入する世界によって先-占有されている (*pré-occupé*) ハビトゥスの実践感覚である。(Bourdieu [1997]2003: 205-6=2009: 242)

実践感覚は、行為者が世界を実践的に理解する原理、行為者が世界とかかわる様式に関係する概念でもある。『実践感覚』では、実践感覚は「身体表象や世界表象を想定しない……世界への準身体的な照準 (visée quasi corporelle du monde)」や「世界への内在 (immanence au monde)」とも表現されている (Bourdieu 1980: 111=2001(1): 105)。

ブルデューは、実践感覚とハビトゥスのちがいははっきりとは論じていない。「客観主義モデルとハビトゥス、理論的図式 (schéma) と実践感覚の図式 (le schème du sens pratique)」(Bourdieu 1980: 183=2001(1): 179) など、実践感覚とハビトゥス概念はほぼ同じものとして語られることが多い。実践感覚も、客観的な構造によって構造化されている過去の経験の産物であり、ハビトゥスと基本的な特徴を共有している。

しかし実践感覚には、ハビトゥスよりは「実際に働いているもの」という印象がある。「ハビトゥスは、実践感覚として、制度の中の客観的意味 (sens objectif) の再活性化を行なう」(Bourdieu 1980: 96=2001(1): 91) などの記述からもわかるように、ハビトゥスと実践感覚は完全に同じものというわけではなく、ハビトゥスが性向のシステム、心的構造、実践の「原理」であるのにたいして、実践感覚はハビトゥスという原理を基礎として実際に・実地で働く「感覚」であるように考えられる。したがって、ハビトゥスがどのように実践を産出するのかについて考えるためには、実践感覚について考察することが必要だと言える。

3章で実践感覚がこれまでの研究でどのように理解されているかを検討したが、そこで明らかになったのは、実践感覚が否定的に評価される場合、実践感覚は前反省的、無意識的、自動的に実践をみちびく感覚だという理解で固定される傾向にあるということである。たとえば、スポーツをプレイしているときに動くべき場所に身体が勝手に動くようなイメージで、実践感覚は理解され批判されていたように思われる。そこで本稿は、実践感覚やハビトゥスの新たな理解の可能性を探るために、実践感覚を身体化されて無意識になったノウハウのようなものとしてではなく、別の角度から検討してみたい。実践感覚は、身体

化したノウハウという面もたしかにもっているが、それとともに、実践的理解の原理、状況の意味=方向 (sens) を評価する感覚としての面ももっている。本稿では、この実践的理解の原理としての実践感覚に注目してブルデューの議論を読み解き、ハビトゥスが実践を導くとはどういうことか、そこに行為者はどう関わっているのかを、実践感覚についての検討をとおして明らかにしたい<sup>23</sup>。

ここで注目するのが、先ほどの引用のなかにも登場していた実践感覚 (sens pratique) の「sens」の多義性である。フランス語の sens には、「感覚」「意味」「方向」という3つの意味がある。ブルデューは、実践感覚について、sens の多義性を利用して議論している<sup>24</sup>。

ゲームのセンスとは、ゲームの未・来 (à-venir) の感覚 (sens) であり、ゲームに自らの意味 (sens) を与える、ゲームの歴史の方向 (sens) の感覚 (sens) なのである<sup>25</sup>。

(Bourdieu 1980 : 138=2001(1) : 132)

Le sens du jeu est le sens de l'à-venir du jeu, le sens du sens de l'histoire du jeu qui donne son sens au jeu.

このように実践感覚は、感覚としての sens と意味としての sens、方向としての sens が重なり合うものとして表現されている (ちなみに引用文中にある未・来は5章のキーワードである)。

次に引用する部分では、ブルデューは、sens の「二重の意味」、sens が意味でも方向でもある点を意識して、人間の存在のありかたについて論じている。

〔カフカ『審判』のKについて〕自分の人生に sens (二重の意味で) を与える権力、自分の生存の意義 (signification) と方向 (direction) を言う権力を奪われたKは、他者によって方向づけられた時間、疎外された時間のなかで生きることを余儀なくされている。(Bourdieu [1997]2003: 340=2009: 402, [ ] 内は引用者による)

世界を興味 (intérêt) のないもの、重要でないものとして把握する無関心とは反対に、イルーシオ (すなわちゲームへの関心・利益 (intérêt)) は、ゲームに、またゲームの

<sup>23</sup> 本稿は、実践的理解の原理としての実践感覚に焦点をあて、実践感覚によって行為者がどのように状況や世界を理解し実践に導かれるのかを考察する。そのため、身体的反射のような行動 (熱いやかんに触れて思わず手を引っ込めるなど) は考察の対象に含まない。

<sup>24</sup> 加藤晴久は、ブルデューは語や表現の多義性にひっかけて論を進めることが多いと指摘している (Bourdieu・加藤 2002: 100)。

<sup>25</sup> 文章の後半は、英訳では、「ゲームに意味 (sense) を与えるゲームの歴史の方向 (direction) の感覚 (sense)」と訳されている (Bourdieu 1990: 82)。また、山本哲士は、「ゲームにその意味を与える、ゲームの歴史の<sup>センス</sup>意味の<sup>センス</sup>感覚」と訳している (山本 2007: 65)。

未・来に投資するように、つまりゲームに捕われている、そしてゲームに何ものかを期待している者たちにゲームが提起しているルシオネス (*lusiones*)、つまりチャンスに投資するように導くことによって、実存に *sens* (二重の意味で) を与えるところのものである (Bourdieu [1997]2003: 300=2009: 355)

これらの論述から、*sens* の多義性を活用しておこなわれる実践感覚の議論が、たんなるハビトゥスの「たとえ」、身体的な実践の能力というたとえを越えて、行為者の存在、行為者と世界の関係に照準をあてたものだと考えることができる。そこでこの第2部では、実践感覚についての新たな理解に到達するために、意味と方向という2つの *sens* に注目して実践感覚 (感覚としての *sens*) についてのブルデューの議論を読み解いてみたい。4章では意味としての *sens* についてブルデューがおこなっている議論を検討し、次の5章では、方向としての *sens* に注目する。意味としての *sens*、方向としての *sens* についての議論を精査することで、実践感覚を「意味」「方向」という観点からとらえなおすことができ、無意識の身体的なノウハウ以上の実践感覚像に至ることができるはずである。

この4章では、実践感覚に関係する「意味としての *sens*」には主観的と客観的の2種類があること、そして、その主観的意味と客観的意味のあいだの関係について考察することをおして、実践感覚とはなにかを考えてみたい。

これまでの一般的なハビトゥス・実践感覚についての理解では、ハビトゥスは客観的構造や過去の経験を身体化した実践の原理、実践感覚は身体化した構造や経験にもとづいた感覚的能力・勘のようなものだと考えられている。したがって実践は、身体化した客観的構造・過去の経験から産出されるのであり、実践は身体化された構造・過去の経験だけに定められるものになってしまう (これでは単なる再生産ではないか、と批判されることになる)。

本章では、意味としての *sens* をめぐるブルデューの議論を検討することで、これまでの一般的なハビトゥス・実践感覚についての理解とは異なる実践感覚像をブルデューのテキストから引き出すことを目指す。そして、身体化した構造や経験にもとづいた感覚的能力・勘としての実践感覚は、実践感覚のすべてではなく、一部の<sup>1</sup>のではないかと主張したい。身体化した構造や経験にもとづいた感覚というだけではない実践感覚像を、意味としての *sens* をめぐるブルデューの議論から明らかにしていく。

## 2 主観的意味と客観的意味

実践感覚と意味 (*sens*) の関係を考えるために、この章では、ゲームのセンス (*sens du*

jeu) についてのブルデューの次の記述に注目する。

ゲームのセンス (le sens du jeu) はゲーム経験の産物であり、したがってゲーム空間の客観的諸構造の産物であって、このゲームのセンスは、ゲームに参加し、参加によってゲームの賭け金を承認する人々にとってゲームが主観的意味 (un sens subjectif)、すなわち意義 (signification) と存在理由 (raison d'être) を持つようにするばかりでなく、方向 (direction) や流れ (orientation)、未来 (à-venir) をも持つようにするのである (それはゲームと賭け金への投資 (investissement)、ゲームへの利害関心 (intérêt)、ゲームの前提——ドクサ (doxa) ——への同意、などの意味でのイリュージオ (illusio) である)。そしてゲームのセンスはゲームに客観的意味 (un sens objectif) も与える。というのは、界 (champ) の経済 (economie) を構成する独自の規則性を実践的に制御・熟達 (maîtrise) することで得られるありそうな未来についての感覚 (le sens de l'avenir probable) は道理に適った (sensée) 諸々の実践の原理であるからである。道理に適った実践とは、それらが理解可能な関係で (par une relation intelligible) 実行条件や実践相互につながっていることであり、したがってゲームのセンスを持つ個人にとってそれらの実践は即座・直接に (immédiatement) 意味 (sens) と存在理由を与えられているからである (ここからゲームの中の集団的信念とその物神を基礎づける同意による有効化 (validation consensuelle) 効果が生まれる)。ある界に生まれついて帰属することが現在のなかに含まれる未来を実践的に先取りする技法 (art) としてのゲームのセンスを含んでいるからこそ、そこで生起するすべてのことが道理あるものと見える、すなわち意味 (sens) を与えられ、妥当な方向 (direction) に客観的に向いているように見えるのである。(Bourdieu 1980: 111-2=2001(1): 105-6, 下線、破線、波線、二重線は引用者による)

実践感覚、ゲームのセンスがあるとはどういうことかを、ブルデューは「意味」や「方向」という言葉を使いながら論じている。ゲームに参加している人々は、ゲームのセンスがあるおかげで、ゲームの主観的意味、方向、そしてゲームの客観的意味を持つと書かれている。方向については次の章で検討するのでこの章では最低限の議論でとどめ、以降は、「主観的意味」と「客観的意味」とはそれぞれどういうことなのか、これら2つの意味はどんな関係にあるのかを読み解いていくことをとおして、実践感覚・ゲームのセンスがあるとはどういうことか考察したい。

このあとの議論の内容と流れを説明しておく。このあと、主観的意味、客観的意味、主観的意味と客観的意味の関係、という順番に議論をすすめていく。この節では主観的意味と客観的意味それぞれについて説明するが、この節での議論は、ハビトゥスについての一般的な理解を「意味」という角度からなぞる議論になっている。意味としての sens に目を

向けることで見えてくる実践感覚の新たな像は、次の3節で論じる主観的意味と客観的意味の関係のところでは浮かび上がってくる。4節では、意味としての *sens* に注目することで見えてきた新たな実践感覚の側面をふまえて、実践感覚とはなにか、とらえなおしてみたい。

## 主観的意味とイリュージオ

それでは、さきほどの引用を読み解く作業をはじめよう。

まず、①ゲームのセンスは、ゲーム経験の産物、とある。つまり、ゲームのセンスは過去の経験を身体化した感覚だということであり、これはハビトゥスや実践感覚の一般的な理解そのものである。

次に、引用で下線を引いているところを見ていただきたい。②ゲームのセンスは、ゲームに参加する人々にとってゲームが主観的意味 (*un sens subjectif*) を持つようにする、とある。ゲームのセンスによって行為者は、ゲームの主観的意味を感じることができるのだ。主観的意味は、意義 (*signification*) と存在理由 (*raison d'être*) と言い換えられている。また、この章では詳しくは論じないが、この意義や存在理由と同時に、ゲームに参加する人々にはゲームの方向 (*direction*) や流れ (*orientation*)、未来 (*à-venir*) も与えられる (引用で点線を引いているところにあたる)。これは、ゲームのセンスによってプレイヤーが、ゲームの流れを読み、次の展開を先取りして実践できるということをあらわしている。

この章では、主観的意味、ゲームの意義や存在理由のほうに注目する。このような主観的意味がゲームに与えられるとはどういうことだろうか。

それは、実践感覚・ゲームのセンスのない状態を考えるとわかる。ブルデューは、実践感覚のない状態では、すべてが人工的で、ばかげたものに見える」と論じている。

そして事実、世界とそこで行われる諸行為をばかげたものに見せたり、勝負に拘りゲームに囚われている限り決して提起されない世界と実存の意味 (*le sens du monde et de l'existence*) への問い、瞬間に固執する耽美主義者や何もすることのない観察者の問いを出現させようと思えば、ゲームのセンスが含むゲームへの同意を宙づりにすればよい。(Bourdieu 1980: 112=2001(1): 106)

意味への問いが生じるのは、ゲームへの同意が宙づりになるときである。逆に言うと、ゲームに主観的意味がある状態とは、行為者がゲームに同意しているときである。ふだんわたしたちは、「世界と実存の意味への問い」を発することはない。当たり前に行き、論文を書いている。わたしたちは、仕事に行く意味、論文を書く意味をあえて問うことは



しない。これは、わたしたちがゲーム（たとえば研究の界）のルールにたいし暗黙のうちに同意しているということをあらわしている。ゲームに同意しているからこそ、そのなかでの実践に意味があることを疑わない。

この「ゲームへの同意」に関連する重要な概念が、先ほどの引用のなかにもあった「イルーシオ (illusio)」<sup>26</sup>である。イルーシオとは、「ゲームへの実践的参加」(Bourdieu 1980: 178=2001(1): 173)、ある特定の社会的ゲームにたいして、そこで起こる事柄が意味をもっている、その賭け金が大事であり、追い求める値打ちがあるという点に同意すること (Bourdieu and Wacquant 1992: 116=2007: 155) であり、ゲームの賭け金の価値を無言のうちに承認し、ゲームの規則を実践的に体得していること (Bourdieu and Wacquant 1992: 117=2007: 156) である。イルーシオとは、そのゲームに長年親しんでいる人々が、そのゲームをする理由や、あるプレイの理由を暗黙のうちに同意・承認し、そのゲームの暗黙の規則を身体化し、ゲームに実践的に参加しているということだ (サッカーをプレイする人は、サッカーのルールに同意し、サッカーをプレイすることでルールへの暗黙の同意を示している)。

このゲームへの暗黙の同意は意識的なものではない。社会的なゲームでは、「人は意識的行為 (un acte conscient) によってゲームに参加するのではなく、ゲームの中でゲームとともに生まれる」(Bourdieu 1980: 112=2001(1): 107)。プレイヤーは、気づいたときにはもうゲームをプレイしてしまっている、そしてプレイをしてしまっているこの時点で、ゲームがプレイに値する、骨折りがいがあるということに、プレイヤーは暗黙のうちに同意してしまっているのである (Bourdieu and Wacquant 1992: 98=2007: 132)。

したがって、ゲームの主観的意味、イルーシオは、同意というよりは、暗黙のうちにゲームのルールを呑みこんでしまっている、当然の前提にしてしまっていることだと理解すべきだろう。たとえばサッカーをプレイする人は、ゴールキーパー以外のプレイヤーが手を使わずボールを扱うことを当たり前のこととして、その上でより巧みなプレイを試みる。受験戦争というゲームに参加する人は、いい学校に入ることの価値を疑わないで、必死で勉強する。それぞれのゲームに参加している人は、そのゲームの意義やゲームのなかでの行動の意味をあらためて問うことなく当然のこととして呑みこんでいる。イルーシオ、ゲームの主観的意味とは、このゲームは何のためのゲームか、何のために自分はこのゲームに関わっているのかを、ゲームのセンスによって行為者が、過去のゲームの経験にもと

---

<sup>26</sup> イルーシオは、かなり幅広い意味でブルデューによって使われている。ゲームへの投資 (investment) をイルーシオと呼ぶこともあるし (Bourdieu and Wacquant 1992: 98=2007: 132)、「万人に認められ分ちもたれている幻想としての、したがって現実の幻想 (*illusion de réalité*) としてのイルーシオ」(Bourdieu 1992: 32=1995 I: 35) と言われることもある (イルーシオの中でプレイヤーが自明のこととして体験することは、ゲームに参加していない人からは幻想 (illusion) に見える (Bourdieu 1994: 153=2007: 188))。近藤は、イルーシオを、「ゲームにおけるチャンス獲得の魅惑」(近藤 1997: 213) と表現している。ゲームの参加者以外からは幻想に見えるがプレイヤー自身にとっては紛れもない現実であるゲームを信じ、そこでの賭け金獲得の可能性に魅惑されゲームに自己を投入することがイルーシオだと考えればよいだろう。

づいて暗黙のうちに受け入れ、ゲームに参加し専念するのに不要な問いを排除している状態をあらわしている。わたしたちは、ゲーム・界についての経験の産物であるゲームのセンス・実践感覚によって、ゲーム・界の闘争に参加する意義、闘争の理由、その界の賭け金（闘争の目的）、利害、前提（ゲームのルール、その界での常識）を暗黙のうちに受け入れ、賭け金を目指す闘争に自分の存在やエネルギーを「投資」している。これが主観的意味と主観的存在理由である。

これが「主観的」意味であるのは、ゲームや実践について「行為者が抱く」意味だからだろう。だが、この「行為者が抱く意味」は、行為者が意味をはっきり認識するというよりは、逆に、意味をあえて問わない状態にあること、意味があると当然のように感じていることをあらわしている。行為者はある実践をやりたい、やるべきだと意味を問うことなく感じる状態にある（シュートを打ちたい、勉強をしなければならないなど）。行為者は、過去のゲーム経験を身体化した感覚によって、ゲームや実践に「主観的意味」を感じる。これが実践感覚と主観的意味のあいだにある第一の関係である。この「主観的意味」に導かれて行為者は実践をおこなうことになる。

## 客観的意味

実践感覚・ゲームのセンスが与えるのは、主観的意味（や方向）だけではない。実践感覚・ゲームのセンスは、ゲームに客観的意味も与える。次は、この客観的意味について考えてみたい。

③ゲームのセンスによって、ゲームには、客観的意味（*un sens objectif*）も与えられる（引用の波線を引いた部分である）。客観的意味があるとは、ゲームのセンスに導かれた実践が、「道理に適った（*sensée*）」ものになるということ、実践が、理解可能な関係で（*par une relation intelligible*）実行条件や他の実践とつながっていることだと言われている。つまり、客観的意味があるとは、ゲームのなかでおこなわれる行為者の実践が、実行条件や他の実践との関係のなかで、客観的に見て意味をなしていること、「ナンセンス」ではないことをあらわしている。行為者は、これまでに積んできたゲーム経験のおかげで、実行条件や他者の実践と適合的な実践をすることができるということであろう。「主観的意味」を使って言い換えると、主観的意味にもとづいておこなわれた実践が、実行条件や他の実践との関係のなかで客観的にも意味をもつということである。行為者の実践は、暗黙の意味にしたがって感覚的に導かれたものでありながら客観的に状況に合ったものになる。

主観的意味と客観的意味についてのここまでの議論は、①行為者は、過去のゲーム経験を身体化した感覚をもち、②その身体化した感覚によってゲームや実践に主観的意味を見

出し、③そうやっておこなわれた実践が客観的にも意味をもつということであった。これは、行為者がゲーム経験をうまく身体化しているおかげでうまく実践できるということであり、ハビトゥス概念や実践感覚についての一般的な理解の範囲内におさまっている。だが、意味というタームに注目することで、実践感覚によってうまく実践できるということを、「主観的な意味」と「客観的な意味」に分けて考えることが可能になり、ブルデュー自身の議論から、ハビトゥスが実践を導く過程＝ハビトゥスの「内部」をすこし覗き見ることができる。

しかし、ゲームのセンスをめぐる議論はここで終わらない。次の節でとりあげる点が、意味としての *sens* に注目することで新たに見えてくる重要な議論である。ここまでの検討では、実践をみちびく実践感覚・意味は、これまでのゲーム経験だけにもとづいていた。しかし次の節で見えてくるのは、実践をみちびく意味は身体化された過去の経験だけにもとづいているのではなく、客観的な状況にもとづいているということである。

### 3 主観的意味と客観的意味の関係

先ほどの節で引用したゲームのセンスについてのブルデューの文章で、二重線を引いている部分に注目しよう。「したがってゲームのセンスを持つ個人にとってそれらの実践〔＝客観的意味をもつ、道理に適った実践〕は即座・直接に (*immédiatement*) 意味 (*sens*) と存在理由を与えられている」とある。

これは、④客観的意味から主観的意味が直接得られるということだ。実践が客観的意味をもつ、すなわち、行為者の実践が実行条件や他の実践と理解可能な関係でつながっていると、実践に存在理由すなわち主観的意味が直接与えられる。行為者は、自分の実践と実行条件・他の実践との関係をとおして、直接、実践の存在理由、主観的意味を獲得している。

行為者は、おこなった実践が実行条件や他者の実践と理解可能な関係にあることで、自分の実践の意味を感じることができる。たとえば会話がうまく噛み合っていたり、仲間のプレイヤーにうまくボールをパスできたりすれば、私たちはその事実（会話が噛み合っていること、ボールがうまくパスできたこと）から直接、自分の実践の意義を感じることができる。

「実践と実行条件との理解可能な関係」である客観的意味から主観的意味が得られるイメージは、次のブルデューの文章にわかりやすい。

ある道具を使う（あるいはある職を務める）ことができるようになるためには、しかもいわゆる申し分なく (*avec bonheur*) 使うためには、(*bonheur* とは主観的にも客観

的にもということ、行動が容易に効果的になされると同時に行為者に達成感と至福感をもたらすように、という意味である）長く使い込むことで、場合によっては系統立った訓練によって道具に慣れていなければならない。道具のなかに暗黙の使用法のように刻まれている目的を自分のものにしておせていなければならない。（Bourdieu [1997]2003: 207=2009: 243-4, 下線は引用者による）

ある道具を使う、あるいはある職を務めるとき、それを申し分なく使う・果たすこととは、客観的に＝行動が容易にかつ効果的にできて、それと同時に、主観的に＝達成感と至福感を感じるということである。実践が実行条件との関係で客観的に意味をもつとは、行為者にとってその実践が容易にかつ効果をもたらすようにできることであり、このとき行為者は、達成感と至福感というかたちで、主観的意味を客観的意味（実践が容易に効果的にできること）と同時に／から直接獲得する。自分の実践と他者の実践との関係から客観的意味と主観的意味を得ることについても、基本的には同じように考えることができる。他者の実践との関係のなかで自分の行動が楽々と効果的にできることから、行為者は達成感と至福感という主観的意味を直接得ることができる。

ブルデューがゲームのセンスについての議論のなかで書いているのは「客観的意味から主観的意味が得られる」ということなので、その文章から直接読み取れるのは上記のような主観的意味と客観的意味の関係だろう。しかし、主観的意味がまずは過去のゲーム経験の産物であるゲームのセンスから与えられていたこと、その主観的意味にもとづいて客観的に意味のある実践がおこなわれていたことを考え合わせると、客観的意味から直接主観的意味が得られるということが示しているのは、行為者が過去の経験にもとづいて見出していた主観的意味が実践のなかで「確認されること」だと言えるのではないだろうか。つまり、実践感覚による実践のプロセスは、身体化した過去の経験によって主観的意味が与えられ、その主観的意味にもとづいて実践がうまくできて終わり、ではなく、実践と状況（実行条件・他の実践）との客観的な関係を通して主観的意味が確認・再獲得されるところまで含んでいる、と考えることができるのではないか。

もしも、行為者が主観的に意味があると感じていた実践が、客観的には意味をもたなかったなら、行為者にとって、その実践をおこなう意義や主観的意味は疑わしいものになる、あるいは失われるだろう。そして、ゲーム全体の主観的意味、ゲームへの同意や信念にもひびが入る（「もしかしてわたしは思い違いをしているのではないか？」と不安になる）。1回・1つの実践に客観的意味がないだけで実践やゲームの意味が大きく揺らぐことはないかもしれないが、ここで重要な点は、1回1回・1つ1つの実践の客観的意味が、実践やゲームの主観的意味を支えているということである。

実践やゲームの主観的意味は、実行条件や他の実践との関係のなかで実践が意味をもつ

(＝客観的意味がある) ことによって再獲得されることで生き残る。実践やゲームの意味はまわりの状況との客観的な関わりのなかにあり、実践が客観的に支持されることで主観的意味は再獲得されつづけていると考えることができるだろう。

客観的意味から主観的意味が得られるのは、自分のおこなうことが実行条件や他の実践と直接噛み合っていることからだけではない。客観的で間接的な支持と呼ぶことができる客観的意味のあり方もあるだろう<sup>27</sup>。

ハビトゥスは、おなじような条件と条件づけの生産物であるすべての行為者のあいだの暗黙の共謀 (*collusion*) の基礎となる。集団の超越性の実践的経験の、集団の在り方とやり方の実践的経験の基礎となる。各人が自分と同類の行為者すべての行動のうちに自分自身の行動の追認と正当化(「だいじょうぶ、ちゃんとしたことですよ (ça se fait)」)を見出す。自分の行動は逆に同類の者たちの行動を追認し、場合によっては修正するのである。判断と行動の仕方の即時的・直接的な一致・同意 (accord immédiat)、諸意識間のコミュニケーションを、ましてや契約的決定を前提としない一致・同意であるこの共謀、コリュージオ (*collusio*) は実践的相互理解の土台となる。(Bourdieu [1997]2003: 209=2009: 246-7, 下線は引用者による)

同じゲームによる条件づけを受けている他者の実践、すなわち同じゲームの規則性にもとづいている実践に、行為者は容易に意味を見出すことができる。行為者は、このような他者の実践のなかに、自分の実践への追認と正当化を見出している。他者の理解できる実践、主観的意味を見出せる他者の実践の客観的存在が、自分の実践への追認と正当化、すなわち主観的意味の再獲得をもたらすのである。このとき行為者が他者の実践に見出す意味は、他者の実践に行為者が主観的に意味を感じることができるという点で「主観的」であり、同時に、他者の実践の客観的な存在があるという点で「客観的」でもある。

3節の議論をまとめておきたい。行為者が実践やゲームに感じる主観的意味は、身体化した過去の経験にもとづいているだけの、行為者のなかで完結しているものではなく、客観的な側面も持っている。主観的意味は、自分の実践と実行条件や他の実践との客観的関係や、主観的意味を見出せる他者の実践の客観的存在に支えられ、これらの客観的意味から主観的意味は再獲得され続けている。

---

<sup>27</sup> ここで論じる、行為者がたがいの実践の客観的存在によって主観的意味を強化するという効果は、ゲームのセンスについての先の引用の、「ここ [= 実践が実行条件や他の実践と理解可能な関係でつながっていることで、実践に直接意味と存在理由が与えられること] からゲームの中の集団的信念とその物神を基礎づける同意による有効化 (*validation consensuelle*) 効果が生まれる」というところに関係している。

ここまでの検討を経て、実践感覚は、身体化した構造や経験にもとづいた感覚的能力やノウハウだけを指す概念ではなくなってきた。次の節では、この章の議論をまとめ、新たな実践感覚像を描き出したい。

#### 4 プロセスとしての実践感覚

実践感覚には、2節と3節で見てきたように、4つの感覚=意味のフェーズ（文章中で①～④の番号をつけていたところを特に参照）がある。ここまでにみてきた4つの感覚=意味のフェーズは、実践感覚=意味が実践を導くプロセスとして、次のようにまとめることができる。

実践感覚とは、①ゲーム・界の経験や構造を身体化した実践感覚（ゲームのセンス）によって、②ゲーム・界・実践の主観的意味が行為者に与えられ、③この主観的意味に導かれた実践は客観的にも意味を持ち、④実践が客観的意味を持つことから、直接主観的意味が再度獲得されるという、一続きのプロセスである。とくに④からは、実践の意味が、行為者が身体化している過去の経験・構造から与えられた主観的なもの、行為者の身体化したもののなかで完結するものではなく、実践と実行条件・他者の実践との関係のなかから得られる客観的な側面もあわせもつことが明らかになった。

実践やゲームの意味には、主観的／客観的、2つの意味がある。主観的意味は、過去の経験にもとづいても得られるし、実行条件や他者の実践との客観的關係からも（客観的意味を経由しても）与えられる。意味としての *sens* に注目することで、実践感覚=意味は、過去の経験の身体化にもとづく行為者の主観的感覚=意味と、客観的世界にもとづく客観的意味、これらの2つの感覚=意味が照応しあう過程として見えてくる。

実践感覚は、一般的には、勘やノウハウのような、行為者が過去の経験のなかで習得した感覚であると理解される。それにたいして、本章で意味としての *sens* に注目することで見えてきたのは、実践感覚が過去の経験のなかで獲得してきた感覚であり、身体化した過去の経験にもとづいて実践やゲームに主観的意味を与えるものであると同時に、過去の経験にもとづく主観的意味が実践するなかで客観的意味と照らし合わされ、この客観的意味から主観的意味が再獲得されるという過程をも含んでいるということである。主観的意味（意味をあえて問うことなく、何かを重要だと感じたり、したいと感じたりすること）は、まず行為者の身体化した実践感覚から与えられるが、実践はそこで終わらない。行為者が、その主観的感覚=意味を客観的意味と照らし合わせて再獲得し続けることが、実践のあいだ絶え間なくおこなわれ続ける。実践感覚は、単なる身体化された感覚を指すだけではなく、主観的意味・世界と客観的意味・世界を照らし合わせつづける過程をも示すのである。

もちろん、実践感覚がゲーム経験、界についての経験を積んでいることによって形成されるものである点は重要であり、このことは本章の議論でも確認された。このいわゆる経験知のおかげで、行為者は客観的状况と合致しやすい主観的意味をもつことができる。これは、ブルデューがハビトゥス概念によって示そうとする二元論の乗り越え、主観主義の問題点の乗り越えに関係している（行為者が過去の経験を身体化していることで、熟慮しなくても道理のある実践ができるようになる）。

しかし、行為者の実践、行為者が実践やゲームにたいして抱く意味は、過去の経験からだけ与えられるのではない。この点は重視されるべきだろう。この章の議論で見えてきたのは、実践感覚=意味が、過去の経験だけによって導かれているのではなく、実践が客観的に意味をもつことから得られるということである。このように考えると、実践感覚による実践は、身体化した技能としての実践感覚の無意識に身をゆだねることによっておこなわれるのではなく、行為者が客観的世界との関係のなかで意味をその都度「再構築」しながらおこなうものだと考えることができる。「主観的意味」と「客観的意味」をつなぐところに行為者を見出すことが可能になるのである。

ブルデューの理論で一般的に注目される主観と客観の関係は、ゲームや界の客観的構造を主観的構造すなわちハビトゥスとして身体化するというものであろう。これは、過去の客観的世界が主観とイコールになるという関係であり、実践以前の段階における客観=主観の関係、実践以前の段階で行為者が世界と結んでいる関係について注目したものである。もちろんこの側面は重要であるが、この見方だけでは、社会と行為者の結びつきは行為者のなかに閉じ込められてしまう（したがって、社会と行為者の関係やハビトゥスについてさらに検討を深めるためには、行為者のなかで進行するプロセスを考察しなければならない（2章を参照））。また、過去の客観的構造が主観的構造として身体化されたところで客観と主観の関係が閉じてしまうため、ハビトゥスはいったん身体化した過去の客観的構造を永遠に再生産し続けるだけの実践の原理になってしまう。

それにたいして、本章で見えてきたのは、実践しながら行為者が主観的意味を客観的意味と照らし合わせ、意味を確認・再獲得し続ける過程であった。これは、行為者が実践するなかでも客観的世界との関係である。主観的構造と客観的構造の関係は、ハビトゥスとして客観的構造が身体化されたところで終わるのではなく、その先に、行為者が実践しながら主観と客観を折り合わせていく過程が続いている。主観と客観の関係はハビトゥスのなかで閉じることなく、行為者の実践のなかで絶え間なく更新されていくものとしてあらわれる。

この4章では、実践感覚（ゲームのセンス）と主観的意味・客観的意味をめぐるブルデューの議論から、身体化した過去の経験や構造にもとづく感覚的な知に動かされるだけの

行為者像・実践像ではなく、実践とまわりの状況との客観的関係をとおして実践やゲームの意味を常に再構築しつづける行為者像・実践像を明らかにしてきた。次の5章では、sensの別の側面、方向としての sens について検討する。方向としての sens と実践感覚の関係からも、実践する行為者の存在が、別の角度から明らかになってくるだろう。



## 第5章 未-来を先取りする実践感覚——過去と現在

### 1 未-来と実践感覚

4章では、意味としての *sens* に注目してブルデューの議論を読み解いてきた。この5章では、*sens* の「感覚」「意味」以外のもうひとつの側面、「方向」について考えたい。

ブルデューは、実践感覚を、ゲームの方向、流れ、一瞬先の展開を「先取り (*anticiper*)」<sup>28</sup>する感覚だと考えている。実践感覚が状況の展開を先取りすることで、行為者はさまざまな状況に的確に対処することができる。

ゲームの中に巻き込まれており、ゲームにとらわれている者は、彼が見ているものではなく、彼が予-見している (*pré-voit*) ものに、直接知覚される現在の中で前もって見ているものに自分をぴったり合わせることができる。その際彼は、自分の味方が今いる地点にボールを回さずに、一瞬後に味方が——敵より前に——到達するであろう地点に回すのだ。(Bourdieu 1980: 137=2001(1): 131)

テニスやサッカーを想像しよう。うまいプレイヤーは、一瞬先にボールが来そうなところに移動したり、仲間のプレイヤーが一瞬先に来そうなところ、かつ、敵プレイヤーの守りが手薄なところを瞬時に判断し、そこをめがけてボールをパスしたりできる。巧みなプレイヤー・行為者は、一瞬先の展開に合わせて実践をおこなうこのような感覚、実践感覚・ゲームのセンスを持っている。

慣れない状況では、私たちは何かが起こってから（起こったことが過去になってから）出来事に反応するだろう。ゲームのセンスや実践感覚による実践はこの逆で、次の行為を考えるために立ち止まる必要なく、起こることを先取りすることでテンポよく実践できる状態を示している。スポーツだけではなく、日常生活のなかでも、会話がはずんでいるときや、人混みのなかを人の動きを読んでうまく通り抜けていくとき、読むべき論文が「わかる」ときも、うまく実践できるときには、次にやるべきことが自然とひらめく「感じ」がある。これをブルデューは「先取り」と言っている。

ブルデューは実践感覚が先取りするこの一瞬先の展開を「未-来 (*à-venir/ à venir*)」と呼び、実践感覚・ゲームのセンスは「未-来の感覚」とであると述べている (Bourdieu 1980: 138=2001(1): 132, [1997]2003: 306=2009: 362)。未-来とは、直訳すると、「来たるべきも

---

<sup>28</sup> ブルデューは、フットサルの *Protention* (未来予持) 概念を参照している (たとえば, Bourdieu 1994: 155=2007: 190, [1997]2003: 300-1=2009: 355-6, Bourdieu and Wacquant 1992: 129=2007: 170 など)。

の」「起こるはずのこと」という意味である（英訳では「forth-coming」と訳されたりしている<sup>29)</sup>。実践感覚は、この来たるべきこと＝未-来を先取りすることで、行為者の状況に合った的確な行動を導く感覚だと考えられている。

ハビトゥス・実践感覚が次の展開すなわち未-来を先取りするものであるという点は、これまでの研究でもハビトゥスや実践感覚の重要な特徴としてよく言及されている。その際、未-来は、身体化した過去の経験にもとづいて予期されるものと理解されている。

この予期は、「ハビトゥス」を生産した過去の社会的条件と調和した反応を産出する（傾向がある）。「ハビトゥス」という「実践仮説」は、身体化した過去の経験に予め適応した形で行為を導くように、未来の意味方向を強固にするものでもある。ブルデューが「ハビトゥス」におく力点はまさしくここにあるといえよう。ブルデューのいう「実践」は、常にこの「ハビトゥス」から産み出され、社会構造の再生産もそこにおいて見出される。（村井 2008: 43）

未-来が身体化した過去の経験の延長に描かれるものならば、先取りされる未-来やこの未-来に導かれる実践は過去を再現・再生産するものになる。そして、ハビトゥスや実践感覚は、過去の延長に過去を再生産するような現在と未来を導くものと理解される。

このような未-来についての一般的な理解にたいし、本稿は、未-来には「過去の経験の延長」とは別の側面があると主張したい。ブルデューのテキストで未-来は、現在のなかにあるもの、現在のなかに刻まれているもの、現在のなかで読まれるものとしても描かれている。先行研究でも、「現在のなかに刻み込まれている未来」、「現在のなかで未来が予見される」のような言い方はされているが<sup>30)</sup>、このことがもつ意義が詳細に検討されることはなかった。近藤理恵はアルジェリアの労働者についてのブルデューの研究に関して考察するなかで「来るべき未来 (avenir) <sup>31)</sup>」と「客観的諸条件の内に刻み込まれた未来の選択可能性」（近藤 1997: 204）である「客観的ポテンシャルティ」の関係に注目している<sup>32)</sup>が、その近

<sup>29)</sup> 『パスカルの省察』の英訳にて（Bourdieu 2000）。

<sup>30)</sup> たとえば、『実践感覚』はあらかじめ知っている (*precognize*)。つまり、現在の状態のなかに、界がはらんでいる未来の状態を読みとる」（Wacquant 1992: 22=2007: 43）や、『ハビトゥス』は、現在のなかで未来を予見する。もちろん、これは『ハビトゥス』によってなされるがゆえに、過去の経験を基礎とした予期であって、現在において作用する『ハビトゥス』には、過去と未来が内包されていることになる」（村井 2008: 43）。

<sup>31)</sup> この「来るべき未来 (avenir)」は、抽象的な可能性が刻まれている「未来 (futur)」と対比されている（近藤 1997: 204）。

<sup>32)</sup> 「彼 [=ブルデュー] は、近代社会に対比される前近代社会に生きる人々の姿を通して、『唯一可能なもの』、『客観的ポテンシャルティ』、『来るべき未来』という概念で語ることで未来の選択様式を捉えた。ブルデューは、前近代的社会に見られたこうした行為が人間行為の基礎に横たわっていると考え、それを実践理論の対象に据えると同時に、『実践感覚』のキー概念として使用している」（近藤 1997: 204-5, [ ] 内は引用者による）。

藤の議論でも、「来るべき未来」は「過去からの持続的、連続的な次元に存在する」（近藤 1997: 204）、「未来は過去の連続の中にある」（近藤 1997: 210）ととらえられ、未-来と現在のなかに刻まれている客観的ポテンシャルティの結びつきがもつ意義についての検討が十分になされているとは言えない。本稿は、未-来が現在のなかで読まれるとはどういうことかをブルデューの議論にもとづいて考察することをおして、実践感覚は過去の延長に未-来を描くだけのものではないことを示し、従来のハビトゥス・実践感覚理解とは異なる理解の可能性を示したい。

本章の検討において、従来の実践感覚・ハビトゥス理解を乗り越えるために取り組むべき具体的な課題は次の2つである。

ひとつめは、先取りされた未-来が導く実践は過去や既存の社会構造の再生産をもたらす（だけの）ものではないと示すことである。

もうひとつの課題は、実践感覚による未-来の先取りがあらかじめ身体化されたプログラムにしたがって自動的になされるようなものではなく、行為者による能動的な営みであること示すことである。このような実践感覚理解は、ハビトゥスや実践感覚を無意識的な実践の産出原理と考える従来の見方に再考を迫るものになるだろう。

このあとの流れを説明しておきたい。まず、次の2節において、実践感覚が先取りする未-来が現在のなかにあるとはどういうことか、実践感覚が未-来を現在のなかで先取りするとはどういうことかについて考える。そして3節では、2節で見えてきた新たな実践感覚の像をふまえることで、ハビトゥスや実践感覚がどのようにとらえなおされるのか、本章の考察によって先ほどあげた2つの課題がどのように乗り越えられるのかについて論じる。

## 2 現在のなかにある未-来、現在に向かう実践感覚

本章では、先に書いたように、実践感覚が先取りする未-来が「現在のなかにある」「現在のなかに刻み込まれている」ということに注目する。たとえばブルデューは、「即時的現在のなかにすでに現存する未-来」（Bourdieu [1997]2003: 303=2009: 359）、「差し迫った未-来は現在である。事物の現在の属性として即時・直接に見えるものである」（Bourdieu [1997]2003: 301=2009: 356）と書いている。4章で引用したゲームのセンスについての文章のなかにも、「現在のなかに含まれる未-来」というフレーズがあった（Bourdieu 1980: 112=2001(1): 106）。このようにブルデューは、未-来が「現在のなかにある」とよく書いている。しかし、現在のなかに未-来があるとはどういうことだろうか。

この現在のなかにある未-来は、「ゲームの布置（configuration）のなかに、またパートナーあるいは相手の現在の位置と姿勢のなかにすでに在る」（Bourdieu [1997]2003:

301=2009: 357) と言われている。これは具体的にいうとどういうことだろうか。それは、ブルデューが別のところでG・H・ミードを参照し提示している事例をみるとわかる。

ブルデューは次のように言う。ボクシングなどの格闘では、それぞれの動きが反応となる次の動きを誘発する。そのとき相手の身体の姿勢は差し迫った未来をはらんだサインになる。このサインは、差し迫った未来（次は強いパンチが来るのかフェイントなのか）を、相手の動きがまだ端緒にあるうちに、攻撃やサイドステップのはじまりの段階で読みとることによって、つかみとられなければならない(Bourdieu 1977b: 11, 1980: 135-6=2001(1): 129)。

この例で、差し迫った未来、すなわち次の攻撃の展開は、次の動きの端緒を相手の身体の姿勢のなかにつかむことによって読み取られている<sup>33</sup>。未・来は、現在の状況の具体的な局面や事象のなかにある次の展開の端緒をつかむというかたちで把握されている。

未・来が現在のなかにあるとは、たとえば、他者の現在の体勢が一瞬先のパンチを予告していたり、敵チームの現在の配置がこのあとのゲームの展開を暗示していたり、あるいは、唸っている襲いかかってきそうな犬の姿と声に、犬に襲われる一瞬先の未来が「すでにそこに在る」かのように見えたり (Bourdieu [1997]2003: 301=2009: 356)、他者の発言のなかに次の議論の展開の萌芽があったりすること、つまり現在の具体的な事象や局面のなかに次の展開の端緒、次の展開を予告する具体的なきざしがあるということである。現在のなかに未・来がある、ゲームの現在の布置や他者の現在の位置や体勢のなかに未・来があるとは、未・来のきざしが現在のなかに具体的にあるということだと考えられる<sup>34</sup>。したがって未・来は、過去の延長であるだけでなく、現在のなかにそのきざしが存在するものでもある。未・来は、身体化した過去の延長で描かれるだけでなく、現在の具体的な局面や事象のなかにある具体的なきざしによっても示されるものであり、現在の具体的な文脈に埋め込まれたものでもある。

したがって、未・来を先取りする感覚である実践感覚は、単に過去の経験の延長で未・来を予測するだけのものではなく、現在の具体的な局面や事象のなかにある未・来のきざしをつかみとることによって一瞬先の展開を先取りする感覚でもある、ということになる。

<sup>33</sup> 『実践理性』では、未・来 (à venir) は「現在のまさに様相 (physionomie) のなかに、右の方に走りつつある相手のまさに顔つき (physionomie) のなかに書き込まれている」(Bourdieu 1994: 157=2007: 192) のであり、プレイヤーは「相手が右に行くから、ほとんどすでに右にいるから」(Bourdieu 1994: 157=2007: 193) ボールを(相手の逆をついて)左に打つのだと言われている。

<sup>34</sup> à-venir/ à venir の訳語として、本稿は「未・来」という訳を用いている。『実践感覚』や『パスカルの省察』の邦訳でも「未・来」や「未・来」という訳がされている。『構造と実践』では「来たるべきもの」(Bourdieu 1987: 22=1991: 23)、『実践理性』では「来るべきこと」(Bourdieu 1994: 155=2007: 190)「来るべき時」(Bourdieu 1994: 157=2007: 192) と訳されている。

本稿が用いている「未・来」という表現は「いまだ来ていないこと」という意味を連想させる。à-venir/ à venir は、フランス語をそのまま訳すなら「これから起こるべきこと」であり、「未・来」という表記と、à-venir/ à venir ではすこしニュアンスにちがいがあ。しかし、本稿が目する「現在のなかにある未・来」は「これから起こるべきこと」であると同時に、きざしはあるが「いまだ来ていないこと」でもある。したがって「未・来」と à-venir/ à venir の意味のズレは許容できる範囲であると考えている。

では、実践感覚が現在の具体的な局面や事象のなかにある未・来のきざしをつかむとはどういうことだろうか。これもブルデューのテキストのなかを探してみよう。

ブルデューは、先ほど言及した格闘の話に続けて、次のように書いている。

そうすれば〔＝格闘のような事例に目を向けていたならば〕彼ら民族学者は、義務づけられた (*obligée*) 会話、紋切り型表現の紋切り型の連鎖のように、交換の外見上は最も機械的な最も儀礼的なところに立ち戻っても、余すところなく組み立てられている身振りと言語からなるあの歯車を機能させるのに必要な不断の用心 (*vigilance*)を発見したであろうし、ゲームの運びに身を委せながらも、シミュレートされた戦闘が戦闘参加者を支配する際に起こるように、ゲームによってゲームの外に運び出されてしまわぬために、最も儀礼化した冗談を使う上で不可欠な、きざし (*signes*) のすべてに向かう注意 (*attention*)を発見したことだろう。(Bourdieu 1980: 136=2001(1): 129, [ ] 内と下線は引用者による)

もっとも機械的・儀礼的な交換、手順がすべて決まっているような実践でも、不断の用心やきざしに対する注意が必要だと、ブルデューは言う。ベルトコンベヤーの前での単純作業や、データの単純なチェックをしているときを想像しよう。手順がすべて決まっているときでも、手順を自動的に実行しているだけだと、現在起こっていることとだんだんかみ合わなくなるだろう。そして、ふと気づくと、自分が今どの段階にいて次何をすればいいのかわからなくなることがある。機械的な作業をおこなう際にも、現在起こっていることに注意を向けて、次の展開のきざしを現在のなかにつかむことが必要であり、それを失うと、わたしたちはゲームの流れに乗ることができなくなり、巧みに実践をおこなうことができなくなる。もちろん、手順が決まっていない場合には、さらに強く現在に注意を向けるが必要になる。どんな状況でも、どんな実践でも、このような用心や注意なしではうまく実践し続けることはできない。

このような、現在、そのなかにある次の展開のきざしへの行為者の絶え間ない注意 (*attention*) が、現在のなかで未・来を先取りし、ゲームの流れに巧みに乗ることを可能にする実践感覚には必要である。状況に柔軟に対応した実践を導く実践感覚には、現在のなかにある未・来のきざしへの行為者の注意という側面が含まれるのである。

一般的な理解では、実践感覚やハビトゥスは身体化した過去の経験にもとづく実践の原理・感覚的な知であると考えられている。しかしここまでの検討から見てきたのは、実践感覚は、身体化した過去の経験の延長で未・来を予測するだけでなく、現在の具体的な局面や事象に注意を向け、現在からも未・来を把握する手がかりを得ているということであ

る。実践感覚による未・来の先取りには、身体化した過去にもとづいて未・来を先取りすることとともに、行為者が次の展開のきざしへ絶え間なく注意を向け、行為者が現在のなかにある未・来のきざしを把握するという側面が含まれるのである。

### 3 過去と現在の交点としての未・来

2節では、未・来が現在のなかにあるとはどういうことか、実践感覚が現在のなかにある未・来を把握するとはどういうことかについて考えてきた。現在のなかに未・来があるとは、現在の具体的な局面や事象のなかに未・来の具体的なきざしがあるということである。そして、未・来を先取りする実践感覚には、現在の具体的な局面や事象のなかに未・来のきざしをつかみとるための行為者の注意が含まれている。未・来や実践感覚のこのような側面をふまえることで、ハビトゥスや実践感覚はどのようにとらえなおされるだろうか。新たな実践感覚像は、1節で提示した2つの課題（先取りされた未・来が導く実践は過去や既存の社会構造の再生産をもたらす（だけの）ものではないと示すこと・実践感覚による未・来の先取りが行為者による能動的な営みであると示すこと）をどのように可能にするのだろうか。この節では、2節で論じた未・来や実践感覚の新たな側面に注目することによって、ハビトゥス・実践感覚にたいする理解がどのように変わるのかを論じたい。

#### 現在と過去の交点としての未・来

まず、1節で述べたひとつめの課題、先取りされた未・来が導く実践は過去や既存の社会構造の再生産をもたらす（だけの）ものではないと示す、という課題について考えたい。未・来のきざしが現在の具体的な局面にあると考えることで、この課題にたいしてどういった知見がもたらされるだろうか。

従来の研究では、実践感覚による未・来の先取りとは、身体化した過去の経験のおかげで未・来の先取りが可能になることだと考えられていた。そうであるならば、未・来は、身体化した経験の単なる延長だということになり、「現在」がどうであるかは行為者の実践にとって重要な意味をもたないことになる。村井重樹は、ハビトゥスと現在の関係を次のように描いている。

「ハビトゥス」は、社会的世界の期待や要求に一致していなくとも、実践を産み出す原理として作用し続ける。したがって、「ハビトゥス」という過去の経験が、ありのま

ま「現在」において現れ、行為者のリアリティとなる。(村井 2008: 44)

この場合、実践感覚によって先取りされた未・来は過去を再生産する実践を導き、現在において大きな変化が起こっても行為者はそれに対応できない。このような理解においては、ハビトゥスは過去において決定され行為者に課せられる「宿命」のようなものとしてあらわれることになる。

それにたいして、本稿の議論では、未・来が現在の具体的な局面や事象のなかにある未・来のきざしにももとづいて先取りされるものであると示した。したがって未・来は、身体化した過去の延長で描かれるだけのものではなく、身体化した過去と現在の具体的な局面や事象の交点に見出されるものだと考えるべきだろう。

ブルデューがハビトゥスを「それ自体は忘れられた歴史」(Bourdieu 1980: 94=2001(1): 89) と言っていたように、行為者は自分が身体化している過去を忘却しているため、自分が身体化している過去を意識したり直接コントロールしたりすることはできない。したがって行為者は、自分が身体化している過去の経験がどのような未・来を示すのか、それだけを単独で把握することはおそらくできない。このような状態にある行為者が身体化した過去が示す未・来を見出すことができるのは、現在の具体的な局面や事象のなかにある未・来のきざしに気づくことをとおしてであると考えられる。たとえば、サッカーのプレイヤーが仲間の一瞬先の動きを先取りする場合、サッカー経験の蓄積のおかげで可能になる仲間の一瞬先の動きの予測は、現在の仲間の体勢のなかに見出されるというかたちでおこなわれる。未・来は、身体化された過去と現在の具体的な状況の交点として、現在の具体的な局面や事象のなかに見出されるのである。行為者は、現在のなかの未・来をとおして(しか)、身体化された過去の経験にもとづく未・来に出会う(ことができない)。

このように身体化した過去による未・来の予見が現在の具体的な局面や事象のなかにも未・来のきざしを見出すことをとおして可能になるのであれば、現在のなかにも未・来のきざしがあれば未・来は見出されず、身体化された過去にもとづいて未・来が予見されることもないということになる。そして、現在のなかにある未・来の具体的なきざしの存在とありかたが、身体化された過去の経験からどのような未・来をどのようなかたちで引き出すかを定めることになる。未・来は、身体化した過去と現在の交点であることで、身体化した過去の経験の単なる延長ではなく、現在の具体的な文脈によっても形づくられるものになる。

たとえば、わたしたちはディスカッションをするなかで、ディスカッションに導かれるようにして、自分一人では思いもよらなかったアイディアを自分のなかから引き出してくることがある。このとき、わたしたちは他の人のコメントや、ときには何気なく自分が発した言葉のなかで、それがはらんでいる未・来(議論の展開可能性)を読みとり、その未・来のきざしが自分のなかで埋もれていたアイディアを引き出したのだと考えられる。このアイディアは、自分のなかで芽がありながらも(身体化された過去のなかにも未・来は可能性

として沈澱している)、別のディスカッションのなかでは決して同じかたちで出てくることのなかったアイデアであろう。ある機会に具体的な発言のなかにあったきざしに導かれて見出された未・来(とその先にある実践)は、自分が身体化しているものから導き出されたものでありながら、この具体的な状況のこの具体的な発言によって形づくられ、この具体的な状況のなかでしか見出せないかたちで現実化することになる。

あるいは、自分のもつ学歴の価値が低下していることや、自分の能力では目指していた学校に行くのがむずかしいことに気づいたときに、まわりの人から得た情報(学歴と関係なく自分の文化資本や社会関係資本を活かすことのできる職業についての情報、目指していた学校とは別の魅力やメリットのある進学先についての情報など)にもとづいて、人は進路を変えることがある。そのとき人は、与えられた情報のなかたとえば自分の文化資本(美術品についての知識など)を活かして自分が活躍する未・来(のきざし)を見出し、その未・来に導かれて自分の実践の方向を変えていく。このとき見出された未・来(のきざし(美術品についての知識を仕事に活用する可能性))は、その仕事の話に出会うまでは考えられなかった可能性であっただろう(趣味で美術品を楽しむことしか考えていなかっただろう)。したがって、この未・来は、単なる過去の延長ではなく、過去と現在の交点として、身体化した過去にもとづく未・来が現在の具体的な文脈の影響を受けて変形したかたちで見出されたものであると考えることができる。

未・来はどのような状況のなかでどのような具体的な局面や事象に見出されるかによってそのありかたを変えるのである。だから、ハビトゥスは宿命のようにあらかじめ未・来や実践を決めてしまうものではない。未・来、それが導く実践の方向は身体化された過去に根ざしていながらも、現在の文脈のなかで具体的になり、そのことで変形していくものである<sup>35</sup>。

ブルデューは、「ハビトゥスは特定の状況とのかかわりのなかでしか現われません」(Bourdieu and Wacquant 1992: 135=2007: 177)と述べている。ハビトゥスの作動について、ハビトゥスや実践感覚がどのように実践を導くのかについて考えるときには、「現在の状況とのかかわり」という部分がとても重要である。本章では、重要でありながら見えにくいハビトゥスや実践感覚と状況とのかかわりを、未・来が現在のなかにあるということに注目することで浮き彫りにしてきた。実践感覚によって先取りされる未・来は、身体化された過去と現在の具体的な状況の交点であり、現在に影響されて未・来(の方向)、そして実践は変化しうるものである。したがって、実践感覚によって先取りされた未・来が導く実践は過去や既存の社会構造の再生産をもたらすだけのものではなく、現在の影響を受けてその方向を変えていくものであると言える。このように、現在に柔軟に対応するものとして実践

---

<sup>35</sup> ブルデューは、実践感覚は制度のなかで客観化されている *sens* (意味・方向・感覚) の再活性化をおこない、そのとき、再活性化の代償かつ条件である修正と変形を制度に加えると論じる (Bourdieu 1980: 96=2001(1): 91)。この逆が、本稿が論じていることである。実践感覚がある制度のなかでその現実化を果たすとき、実践感覚はその制度によって修正と変形を受けるのではないか。



感覚を理解することは、実践感覚が先取りする未-来が「現在のなかにそのきざしが存在するもの」であることに注目することによって可能になる。

## 未-来の先取りへの行為者のかかわり

次に、もうひとつの課題、実践感覚による未-来先取りが行為者による能動的な営みであると示すという課題について考えたい。

ハビトゥスや実践感覚についての従来の見方では、行為者は、身体化した過去の経験の延長で未-来を見ると考えられており、この場合、未-来先取りに行為者が積極的に関わることはむずかしい。行為者は自分が身体化しているものを把握していないため、身体化した経験の延長で未-来を読むなら、行為者は未-来先取りをコントロールすることはできない。ハビトゥスや実践感覚を身体化した過去という面だけで理解するならば、無意識のうちに自動的に未-来先取りするメカニズムを思い描いてしまうことになる。この見方では、行為者は実践感覚によって未-来を与えられるだけであるかのように見える。

しかし実践感覚はそれだけのものではないということを、本章では論じてきた。実践感覚は、現在のなかにある次の展開のきざしへの行為者の絶え間ない注意を含み、行為者は自らの注意によって未-来のきざしを現在のなかに見出している。未-来は、身体化した過去によって行為者にただ与えられるものではない。行為者は、身体化した過去にもとづく未-来を、その未-来のきざしを現在のなかに自分の注意によってつかむことで見出す。行為者が現在の具体的な状況に注意を向け、状況の流れに後れを取らないように展開に用心するなかで未-来のきざしを現在のなかからつかんでくることこそが、身体化された過去による未-来先取りを可能にする。そうであるならば、行為者は、身体化した過去によって無意識のうちに導かれているだけなのではなく、むしろ、行為者の状況への能動的な関わりのなかで、身体化された過去による未-来先取り、過去の経験による実践の構造化が生じているのだと考えられる。

現在への注意の向けかたは、過去の経験のなかで習得されたものでもある。したがって、現在の状況へ向かう行為者の注意のなかに見出される「能動性」は、身体化された過去による構造化から独立しているわけではない。これは否定できないことであり、また、ブルデュー理論を理解する際にこれまで強調されてきたのも、行為者のありかたが身体化された過去によって構造化されているというこの側面であった。しかし本稿が指摘したいのは、これまで重視されていたものとは逆の関係が行為者と身体化された過去のあいだにあることである。身体化された過去による構造化は、行為者の現在への能動的な関わりがあってはじめて、そのなかで可能になる。行為者がうまく状況に集中できなかったり、現在のなかにある特異な出来事に注意が向けられたりすることで、見出される未-来、そして身体化

された過去による構造化の具体的なありようは変化する。これまで強調されていたように行為者は一方的に身体化された過去によって構造化されているのではなく、行為者の現在への能動的な関わりのなかで身体化された過去による構造化が実現・具体化するという面も、身体化された過去と行為者のあいだには存在する。過去による構造化と行為者の現在への能動的な関与は、支え合う関係にあると考えるべきなのである。

このように考えるならば、実践感覚による未・来への先取りは、身体化した過去にもとづく感覚によってただ未・来を与えられるだけのものではなく、行為者が現在に能動的に注意を向けるなかで身体化した過去を活性化し未・来へのきざしを現在のなかにつかむ能動的な過程であると言えることができる。もちろんこの過程は、身体化された過去による方向づけなしでは実現しない。しかし同時に、行為者が現在の具体的な局面や事象に向ける注意なしでも実現しないものである。

この章では、sens の方向という側面について、その言いかえのひとつであった「未・来」に注目し、未・来への先取りする実践感覚について検討してきた。実践感覚はこれまで、過去の経験にもとづく無意識的なものと理解されてきた。しかしこの章でブルデューの議論から引き出してきたのは、実践感覚による未・来への先取りの過程には、行為者が現在に注意を向け、現在から未・来へのきざしをつかみとっているという面もあるということであった。実践感覚のこの新たな側面に注目することで、実践感覚による実践は身体化された過去によって一方的に規定されるものであり行為者が関与しない無意識な実践であるという極端な理解から距離をとることができる。現在、そして現在への行為者の能動的な関わりのなかで、実践感覚が先取りする未・来、その未・来に導かれる実践は絶えずその方向を変化させている。実践感覚による未・来への先取り、その未・来に導かれる実践は、行為者が現在に関わるなかで身体化した過去を活用しておこなう能動的で柔軟な営みなのである。

次の6章では、4章と5章でおこなった議論をさらに展開し、本稿で見出した新たな実践感覚理解の先に、行為者の能動性や意識、創造性の可能性を描き出したい。

## 第6章 実践感覚と行為者の能動性・創造性——第2部のまとめ

4章と5章では、ハビトゥスの実践感覚としての側面に着目し、実践感覚についてのブルデューの議論を検討することで、新しいハビトゥス・実践感覚理解の可能性を探ってきた。具体的には、実践感覚 (*sens pratique*) の「sens」に「感覚」以外に「意味」と「方向」という意味があることに注目し、ブルデューが「意味」と「方向」(未・来と言い換えられる)をめぐっておこなっている議論を検討してきた。

4章では、ゲームのセンスと意味としての *sens* をめぐる議論を読み解くことをとおして、実践感覚を、意味を与える感覚という側面から検討した。実践感覚による実践のなかで立ち現れる意味には、主観的意味と客観的意味の2つがある。この主観的意味と客観的意味の関係について考察することで、実践感覚によって行為者が実践やゲーム(界)に見出す意味は、過去のゲーム経験に支えられた「主観的な」ものであるだけでなく、実践と実行条件、他の実践との関係から得られる「客観的な」側面もあわせもつことが見えてきた。主観的な意味と客観的な意味のあいだには、客観的意味によって主観的意味が再獲得される、すなわち、主観的意味が客観的意味に支えられるという関係が存在する。この4章の検討をとおして、実践感覚は、過去の経験の身体化によって形成された感覚的な知というだけでなく、行為者の主観的感覚=意味と、実行条件や他者の実践との関係にもとづく客観的意味の2つの感覚=意味が照らし合わされ確認され再獲得されつづける過程をも示しているということが見えてきた。

5章では、方向としての *sens* と実践感覚の関係を考察するために、未・来を先取りするものとしての実践感覚について検討した。未・来は身体化された過去の経験の延長で予見されているだけでなく、現在の具体的な局面や事象のなかにある未・来のきざしにももとづいて先取りされている。実践感覚は、過去の経験の延長で未・来を予測する感覚であるだけでなく、現在へ注意を向け現在の具体的な局面や事象から未・来のきざしをつかんでくる行為者の能動的な営みでもある。行為者は、身体化した過去にもとづく未・来を、現在の状況へ注意を向けて具体的な局面や事象のなかにもその未・来のきざしをつかむことをとおして把握する。行為者の見出す未・来、そして実践は、身体化された過去にだけ規定されるのではない。実践感覚によって先取りされる未・来は、身体化した過去の単なる延長ではなく、現在の具体的な文脈、そして行為者による現在への注意のなかで変形や選択をこうむるものである。身体化された過去は行為者の現在へ向かう注意のなかでこそ発現するのであり、身体化された過去による構造化と行為者の現在の状況への能動的な関わりは、たがいを制約したがいをも可能にする関係にあることがわかってきた。

4章と5章においてブルデューの議論を読み解くなかで浮かび上がってきた実践感覚の

像は、身体化された過去の経験にもとづいた感覚以上の内容をもっていた。実践感覚は、身体化した過去の経験から感じる主観的意味を、実践の展開のなかで客観的意味と照らし合わせ、意味を確認・再獲得しつつける進行中のプロセスであり、また、身体化された過去と現在の具体的な局面や事象をつなぐ行為者の能動的な営みでもある。4章と5章の議論から見えてくるのは、行為者が世界と関わり世界に意味と未-来を見出しながら実践し続ける開かれたプロセスであろう。

4章と5章では、実践感覚と意味や未-来についてのブルデューのテクストを読み解くことに主眼をおいてきた。この6章では、ブルデューのテクストから引き出してきた新しい実践感覚についての理解がどのような展開可能性をもっているかを論じたい。

前半（1節～2節）では、4章と5章の議論をまとめ、実践感覚をあらためてとらえなおし、実践感覚による実践の過程における行為者の位置について考察する。まず1節では、4章で意味について論じたことが方向や未-来にも当てはまること、5章で方向や未-来について明らかにしたことが意味についても当てはまることを確認し、4章と5章で別々に論じていた2つの実践感覚の議論をひとつにまとめる。1節の議論は、その後の考察の準備作業のような位置づけになる。次の2節では、4章と5章の議論で新しい実践感覚理解の鍵になっていた「客観的意味=方向」と「現在」についてさらに考察を深め、実践感覚による実践の過程を深くとらえなおし、この実践の過程における「能動的な行為者」の像について検討する。

6章の後半（3節と4節）では、4章と5章、6章前半の議論を展開することで、多様な実践のありかたや、創造的で意識的な行為者を描き出すことが可能であることを示したい。4章と5章の議論は、主観的意味をもつ実践が客観的にも自然と意味をもつ、または身体化された過去と現在のあいだに苦労なく交点を見つけることができる、そのような変化や失敗のない状態を暗に前提にしている（という限界があった）。それは、ブルデュー自身の議論にそのような傾向があるからである。2章で見たように、ブルデューの描くハビトゥスは、変化の説明には不向きではないかと批判されている。ハビトゥスをめぐる議論では、過去と現在、主観と客観のあいだのズレがない社会状態が想定されているかのようであり、変化のなかではハビトゥスではない別の実践の原理（意識的反省など）に移行しなければならないように見える。それにたいして本稿で明らかにしてきた実践感覚と意味、未-来（方向）についての実践のモデルは、変化する社会状態にも適用可能だと論じたい。行為者が積極的な役割を果たす実践のモデルだからこそ、このような適用が可能である。さらに、この3節では、意識的反省と実践感覚の関係についても検討する。そして最後の4節では、本稿がブルデューの議論から引き出してきた実践感覚のモデルの先に、変化に柔軟に対応する行為者や、創造的な行為者を描き出したい。この検討をとおして、どのようにしてブルデューの理論が決定論と自由の二元論を乗り越えうるのか、ハビトゥス批判

において不明瞭だと言われていたその「道」を明確に示すことができるだろう。

## 1 あらためて実践感覚とは——4章と5章のまとめ

この節では、4章と5章において意味としての *sens* と方向としての *sens* (未・来) について別々に論じてきた実践感覚の2つの理解をまとめたい。

まず、4章で意味としての *sens* について検討するなかで明らかになったことを再度確認しておこう。界・ゲームや実践の意味には、主観的意味と客観的意味の2つがある。主観的意味はまず経験の産物である感覚的な知によって与えられるが、それで終わりではなく、主観的意味にもとづいておこなわれた実践が実行条件や他の実践との関係のなかで客観的に意味をもつことから、主観的意味は直接再獲得されている。したがって実践感覚は、主観的意味・世界と客観的意味・世界を照らし合わせつつける過程を示していた。

意味としての *sens* について明らかになったこのプロセスは、*sens* の別の側面、方向や未・来についても見出すことができる。

4章で検討したゲームのセンスについての文章には、最後に次のような一文があった。

ある界 (*champ*) に生まれついて帰属することが現在のなかに含まれる未・来を実践的に先取りする技法 (*art*) としてのゲームのセンスを含んでいるからこそ、そこで生起するすべてのことが道理あるものと見える、すなわち意味 (*sens*) を与えられ、妥当な方向に客観的に向いている (*objectivement orienté dans une direction judicieuse*) ように見えるのである。 (Bourdieu 1980: 111・2=2001(1): 106, 下線は引用者による)

方向についても、「客観的に妥当な方向」というものがある。界のなかで起こるすべてのことが「妥当な方向に客観的に向いている」とはどういうことか、すこし考えておこう。

ゲーム、界やそのなかでおこなわれる実践は、過去から未来に向かって、展開の方向や流れをもっている。これは、実践やゲーム・界がもつ「向き」「ベクトル」のようなイメージで考えるとよいだろう。未・来は、この一連の方向・流れのなかの一部、現在から先に向かう流れである。

客観的意味は、自分の実践と実行条件や他者の実践との関係など、同時点にある客観的要素との関係のなかで確かめられていたが、方向の場合、意味以上にはっきりと、実践の展開のなかで客観的にその妥当性を確かめることが可能である。それは先取りした未・来が実現したかどうかで客観的に確認できる。先取りした未・来が順調に実現するなら、行為者は、自分がゲームやゲームのなかのそれぞれの要素に見出している方向や流れを客観的に

妥当なものだと感じ、その延長上に主観的な方向・流れ・未-来を描きつづけるだろう。逆に、先取りした未-来が実現しなかったならば、主観的な方向や流れは客観的に支持されず、そこで中断されることになる。客観的な方向は、時間の流れのなかでものごとの展開に「理解可能な関係」があるかどうか、すなわち、ものごとの展開に客観的に一連の流れが成立するかどうかで確かめられていると考えられる。

つまり、方向や流れ、未-来についても、意味と同じように、主観的 sens と客観的 sens を照らし合わせる過程を考えることができる。実践感覚による実践のなかには、過去のゲーム経験を身体化した感覚によって、行為者がゲームや実践に主観的に方向や流れ、未-来を感じ（先取りし）、その先取りした方向が客観的にも妥当であることから主観的な方向・流れ・未-来を直接再獲得するという過程がある。客観的な方向や未-来をうまく見出し続けることができる場合には、先の引用文中に書かれていたように、ゲーム・界のなかで起こるすべてのことが「妥当な方向に客観的に向いている」ように見えてくる。

したがって、4章でおこなった主観的意味と客観的意味を照らし合わせ続ける実践感覚の議論は、意味だけでなく方向も含めて、拡大することができる。方向も含めて言い直しておこう。実践感覚は、身体化された経験にもとづく「感覚」というだけではなく、この感覚にもとづいて行為者が感じる主観的な「意味と方向」が、行為者が客観的な世界と関わる＝実践するなかで客観的な「意味や方向」と照らし合わされ、確認・再獲得され続ける過程でもある。実践感覚は、実践の展開のなかで、意味=方向（sens）が、主観と客観のあいだを往復しながら確認・再獲得されるプロセスである。

ここまで、4章で実践感覚と意味としての sens についておこなった議論が、方向としての sens にも適用可能であることを確認してきた。次に、5章で方向としての sens、未-来を先取りする実践感覚について見出した知見が意味としての sens にも当てはまるのか、考えておきたい。

5章の議論で明らかにしたのは、未-来は、身体化された過去の経験から与えられるだけではなく、現在の具体的な事象や局面のなかにある未-来の具体的なきざしにもとづいても先取りされているということであった。未-来は、身体化された過去と現在の具体的な状況の交点に見出される。行為者は、自分が身体化している過去の経験が示す未-来を単独で把握することはできない。身体化した過去による未-来の予見が可能になるのは、現在の具体的な局面や事象のなかに未-来のきざしを見出すことを通してであった。

この点は、意味についても同様であると言えよう。意味、ゲームへの同意、ゲーム内での価値体系や賭け金への信念についても、行為者は、身体化した過去が示す意味だけを取り出して純粋に把握することはないだろう。現在において何か具体的な対象を重要だと感じたり、欲しいと思ったり、それを得るために努力しようと自然に思ったりするというかたちで、わたしたちはゲームや実践の意味を感じている（たとえば、骨とう品収集の世界

にはまることは、現在ある具体的な骨とう品に惹きつけられる、「あれが欲しい」と感じるというかたちであられる)。意味も、未・来と同様に、身体化された過去だけによって与えられるのではなく、行為者が現在に注意を向け、その注意のなかで具体的な局面や事象に惹かれたり、それに意味を（当然のように）感じたりするというかたち、現在の具体的な局面や事象に見出されるというかたちをとると考えられる。

以上で、4章で意味としての *sens* についておこなった議論は方向や未・来についても当てはまり、5章で方向としての *sens*、未・来についておこなった議論は意味についても当てはまることを確認できた。そこで次に、4章と5章でそれぞれ別々に論じてきた2つの実践感覚の議論をつないでみたい。4章と5章から浮かび上がってきた2つの実践感覚の像は、どう結びつくのだろうか。

4章で見えてきたのは、身体化された過去にもとづく感覚によって行為者が感じる主観的な意味=方向が、実践するなかで客観的な意味=方向と照らし合わされ、確認・再獲得され続けるということであった。5章で明らかになったのは、身体化した過去にもとづく意味=方向、未・来を、行為者は、現在の状況へ注意を向けて具体的な局面や事象のなかにそれらをつかむことによって把握するということである。この2つの議論には重なる部分がある。それは、意味=方向、未・来が身体化された過去にもとづいている、という部分である。この重なりを考慮することで、4章と5章で描いた2つの実践感覚像をつなぐことができる。

先ほど5章の議論にもとづいて論じたように、意味や未・来は、身体化された過去から直接行為者に示されるのではなく、行為者がそれを具体的な局面や事象のなかに（未・来の場合にはきざしというかたちで）見出すことによって、過去と現在の交点として把握されるものであった。そこから考えると、4章などで論じた、身体化された過去にもとづく感覚によって行為者が感じる主観的な意味や方向についても、「現在のなかで」「現在と過去の交点として」「行為者の注意によって」見出されるものだということになるだろう。4章で論じたときには主観的な意味=方向は身体化された過去から直接導き出されたように見えたが、5章の議論も考慮した上であらためて考えてみると、この主観的な意味=方向も、身体化された過去の経験だけにもとづいて与えられるのではなく、行為者の注意によって現在の具体的な局面や事象のなかに見出されるということがわかる。意味や未・来を見出すところには、いつも行為者が関わっているのである。

この重なりを考慮して4章と5章の議論をつなぐことで、実践感覚をあらためて次のように描き直すことができる。実践感覚とは、行為者が身体化された過去と現在の交点として自らの注意によって現在のなかに見出した（主観的な）意味や未・来が、実践するなかで客観的な意味や方向と照らし合わされ、確認・再獲得されつづける過程であると。実践感覚は、自動的に展開される身体化されたプログラムではない。実践感覚とは、過去と現在

のあいだ、主観と客観のあいだで、意味や方向を現実化するなかで変形させ、確認・再獲得し続けるプロセスである。そして、この意味や未・来を介して、身体化された過去と現在、身体化された過去と客観的な世界が結びつけられたり、照合されたりし続けるプロセスである。実践感覚は、行為者が意味や未・来を現在の世界のなかに見出し、意味や未・来を客観的世界と照らし合わせつつけることによって、不断に意味や未・来を確認・再獲得しつづける過程を示しているのである。

## 2 実践感覚と行為者

1 節では4章と5章の議論をつなぎ、実践感覚を、身体化された過去と現在の具体的な局面の交点に見出された意味や未・来が客観的な意味や方向と照らし合わされ、確認・再獲得されつづける過程として描き直してきた。この2節では、4章と5章の鍵になっていた「意味や方向が客観的にあること」、「行為者が現在のなかで意味や未・来を見出すということ」についてさらに考察を深めることをとおして、「客観的」意味=方向や「現在」を重視することによって見えてくる実践感覚理解・ブルデュー理解がどのような行為者像を内包しているかを考察する。

4章と5章ではそれぞれ、主観的意味／客観的意味、身体化された過去／現在を対比させ、客観的意味と現在の重要性を際立たせることに重点を置いていた。そのため、行為者にとって意味が「客観的にある」とはどういうことか、「現在」とはどういうものかについて、その複雑さを詳しくは論じてはいなかった。そこでこの節では、先の2つの章で残していた課題、行為者にとって「客観的に意味がある」とはどういうことか、行為者にとっての「現在」とはどういうものかについて詳しく検討し、意味や未・来をめぐって見えてきた実践感覚の像が、どのような実践観・行為者像を示しているのかをあらためてはっきりと提示することを目指したい。

### 2-1 行為者と客観的意味=方向

この項では、「意味や方向が客観的にある」とはどういうことかを深く考察することをおして、主観／客観を照らし合わせる実践感覚のプロセスにおける行為者の位置についてさらに深く考えてみたい。

主観／客観を照らし合わせる実践感覚のプロセスとは、繰り返しになるが、次のようなものである。行為者が身体化している感覚にもとづいて現在のなかで見出す主観的な意味や主観的な方向は、客観的な意味・客観的な方向と照らし合わされ、確認・再獲得されつ



づける。行為者が抱く主観的意味=方向は、客観的意味=方向に支えられることで存続・存在することが可能になる。このように、客観的意味=方向は新しい実践感覚理解のひとつの鍵である。そこであらためて、「客観的に意味や方向がある」とはどういうことかを整理し、再検討しておきたい（なお、以降の議論はおもに「客観的意味」について論じるが、そこから得られる知見は「客観的方向」についても同様にあてはまる）。

4章では「客観的意味をもつ」状態として、自分の実践と実行条件や他者の実践とのあいだに理解可能な関係があること、実践が効果的に・容易におこなえること、主観的意味を見出せる他者の実践の客観的存在があることをあげた。この3つの客観的意味すべてにおいて、構成要素を2つ見出すことができる。

まず、どの客観的意味においても、意味を見出すことのできる具体的な対象や経験がある。自分の具体的な実践と実行条件や他者の実践とのあいだの具体的関係、自分の個々の実践がうまくおこなえるという具体的経験、他者の具体的な実践の存在といったものが客観的意味には関係している。

客観的意味を構成するもうひとつの重要な要素は、そこに客観的意味を見出す特定の行為者の存在である。実践に関わる客観的意味は、普遍的な意味、誰にとっても同じように見出せる意味ではなく、そこに意味を見出す特定の行為者と切り離すことができない。

4章で、客観的意味のある実践、すなわち道理に適った実践とは、「それらが理解可能な関係で実行条件や実践相互につながっている」ものであると述べた。この「理解可能な関係」とは、第三者から見て普遍的に理解可能であるということでは必ずしもない。なぜなら、第三者から見て意味をなさない実践にたいして（第三者から見ると噛み合っていない2人の会話）、当人は意味を見出す（本人たちは会話が噛み合っていると思っている）ことが可能だからだ。

この「理解可能な関係」には、2つのかたちで行為者の「主観的なもの」が関与する。ひとつめは、身体化した過去・知覚図式を経由することによって、である。ある社会的条件のなかで知覚・評価図式を形成してきた人々にとって道理にかなった実践、すなわち客観的意味のある実践が、別の知覚・評価図式をもつ人からは道理にかなっていない実践だと思われることがある。たとえば、経済的合理性の観点から見て道理のない実践（ある土地を法外な値段で買うこと）が、名誉を重んじる世界のなかでは道理のある実践である（そこは先祖伝来の土地でありいくら払っても買い戻すべきである）ケースが、これにあたる。

また、客観的意味=方向があるかないかを評価するのは行為者であるから、「客観的に道理にかなっている」「客観的に方向は裏切られていない」と感じるか否かを行為者が左右する余地は常にある。たとえばドン・キホーテの場合、他の人なら（おそらくドン・キホーテと同じように騎士道物語を内面化している人でも）客観的に意味や方向を見出さない実践に、客観的に意味や方向を見出し続けている。

行為者が実践や事物に客観的な意味や方向を見出すとき、行為者の身体化した過去の経験のちがい、それぞれの行為者が意味や方向を見出せると判断する程度の差といった、行為者の側の要因、すなわち主観的な要素が関係する。意味や方向、未来が「客観的」にあるとは、行為者が、具体的な対象や経験にたいして客観的意味・方向・未来を感じることであり、それは「主観的なもの」が入り込んだ「客観性」なのである<sup>36</sup>。

つまり、実践感覚とは、身体化された過去の経験にもとづいて現在のなかに行行為者が感じる主観的意味と主観的方向が、実践するなかで行為者が客観的世界に見出した意味や方向と照らし合わされ、確認・再獲得され続ける過程ということになる。4章で主観的意味は客観的意味に支えられていると論じたが、それに加えてこの項の議論で見えてきたのは、客観的意味や客観的方向に主観が入り込んでいるということである。主観は客観に支えられ、そして客観には主観が入り込んでいる。実践に関係する「主観性」と「客観性」は、どちらも閉じたものではなく、「主観性」は「客観性」と、「客観性」は「主観性」と結ばれている。

このように実践感覚をとらえなおすことで見えてくるのは、まず、実践感覚のプロセスにおける行為者の存在の重要性である。客観的意味や客観的方向は、普遍的なものとして行為者に与えられるのではなく、行為者が客観的世界のなかに見出すものである。行為者は、実践の過程のなかで客観的世界のなかで意味や方向を探し、自分が見つけた客観的意味と客観的方向に照らして主観的意味=方向を確認・再獲得しつづけている。そして、客観的意味=方向を客観的世界に見出すところに行行為者は積極的に関わることができる。ドン・キホーテのようになかば無理やり客観的意味=方向を見出し続けることもできれば、客観的世界において意味や方向がずれたこと（たとえば会話が微妙に噛み合わないこと）に敏感になることもできる。行為者はこの実践の過程に、客観的世界との関わりのあるところで積極的に関係している。

これまで、ブルデューの理論やハビトゥス概念にたいしては、行為者についての議論が足りないと言われてきた。たしかにブルデューの議論のなかには、一般的にイメージされるような行為者や「主観的なもの」についての議論は足りないように見える。しかしそれは、ブルデューの議論において「主観」と「客観」の性質が変容していることによるものであろう。「主観」のなかを掘り進むと「客観」に出る（身体化した客観的構造や、実践のなかで照らし合わされる客観的意味=方向）。だから一見ブルデューの議論には行為者がいないように見える。しかし逆に、「客観」を掘り進むと「主観」に出るのである（客観的世

---

<sup>36</sup> これ以降の議論では、「客観的な意味=方向」など、意味や方向という言葉につく「客観的」という言葉は、「行為者が見出したもの」、すなわち「主観性の入り込んだ客観性」という意味で使う。それ以外の「客観的」、たとえば「客観的世界」という場合の「客観的」は、誰から見ても存在しているものという一般的な意味で用いている。

界に意味や方向を見出す行為者)。したがって、ブルデュー理論において行為者を見出すためには、行為者の主観＝行為者の「なか」＝身体化したハビトゥスではなく、行為者と客観的世界の関わりところに注目する必要がある。客観的世界との関わりところにこそ、行為者が自ら意味や未・来を見出し、実践を制御する契機が存在するのである。

この項では、「客観的に意味や方向がある」とはどういうことかを再検討することによって、実践感覚による実践の過程における行為者の存在の重要性をあらためて確認してきた。この項の検討のなかで見えてきたのは、行為者が客観的世界との関わりなかでさまざまな意味や未・来を見出し、意味や未・来を確認・再獲得していく過程である。能動的な行為者は身体化した過去・感覚との関係において見出されるのではなく、客観的な世界との関わりところに見出されるのである。

## 2-2 行為者と現在

次は、5章などの議論で新しい実践感覚理解の鍵になっていた「行為者が現在のなかで意味や未・来を見出すこと」について、先の項で「客観的意味＝方向」についておこなったように掘り下げて考察してみたい。

5章では「現在の具体的な局面や事象のなかで未・来のきざしをつかむ」という議論をしたが、この「現在」というのは実は曖昧なフレーズである。「現在」というとボクシングや会話の例でイメージされるような「今・ここ」を指しているとまずは考えられる。しかし、未・来や意味を感じる対象は「今・ここ」にはおさまらないことがある。ブルデューのテキストでも未・来の例として家族計画のような遠い未来があげられていることからわかるように(Bourdieu [1997]2003: 319=2009: 378)、実践感覚の議論は対面状況に限る必要がない。時間的にも空間的にも大きな広がりのあるゲームや界との関わりなかでおこなわれる実践（たとえば論文を書くことは、研究の界との関わりが深い）の場合、意味や未・来が見出される「具体的な状況の事象や局面」は今・ここに限定されないことがある。そこでこの項では、未・来や意味を感じるものが「今・ここ」を越えておこなわれるとき、この場合の「現在」とは何なのか、「現在への行為者の注意」とはどういうことかを検討することをおして、現在において未・来や意味をつかむ実践感覚の核となる部分を浮かび上げ、過去と現在のあいだで発揮される行為者の能動性についての理解を深めたい。

「現在」とは何かについて考えるとき重要になるのは、現在と意味、とくに現在とイリュージョンとの関係である。

4章で主観的意味に関連して論じた「イリュージョン」（ゲームへの暗黙の同意）について、

ブルデューは次のように書いている。

イルーシオとは、世界のなかにいる、世界によって占められている仕方 (*manière*) である。それは、行為者が遠くに離れたものによって、いや（それが、行為者が参加しているゲームの一部をなしているならば）不在なものによってさえ、影響されることがありうるという仕方である。身体は場所 (*lieu*) と直接的な接触関係で結ばれているが、この関係は世界と関係を結ぶ仕方のひとつにすぎない。行為者はある空間 (*espace*)（界の空間）と結ばれているが、そのなかでの近接性は物理的空間における近接性とおなじものではない（他の条件がすべておなじとした場合、直接的に知覚されたものが常に実践的特権を持つということはあるが）。(Bourdieu [1997]2003: 196=2009: 231)

イルーシオ、すなわち、行為者があるゲームに意味を感じているとき、行為者は、ゲームの一部をなしているものならば、そこに不在のものからも影響される状態になる。言い換えると、主観的意味＝イルーシオを介して、行為者の現在には、ゲームの一部をなしている「今・ここにはないもの」も入り込んでくるのである。ボクシングの例に見られたような「今・ここ」に未-来を見出すこと、世界との直接的な接触関係のなかで未-来や意味を見出すことは、行為者が未-来や意味を見出すひとつの仕方にすぎない。別のかたちで「近い」ものも、行為者の現在には含まれている。ゲームの一部をなしていて、行為者が現在関わっているものは、ここに不在であっても行為者にとって非常に近いものであり、行為者の現在のなかに含まれる。

たとえば、わたしは今論文を書いているが、その場合、わたしは、目の前にある紙・ペン・パソコン・本・書きかけの原稿などだけではなく、〇〇主義・〇〇概念・〇〇概念を評価する立場／批判する立場などとの関係のなかで、論文を書く。このときわたしは、〇〇概念をめぐる議論や〇〇概念を批判する議論のなかに未-来のきざしを見出したり、それについて論じる意味を感じたりしながら論文を書いているが、この「〇〇概念をめぐる議論」「〇〇概念を批判する議論」のすべてが現在目の前に物理的に存在する必要はない。わたしの現在には、イルーシオ（わたしは社会学の分野で博士論文を書くことに意味を見出している）のなかで意味がある対象（重要な概念、重要な立場…）が入り込んでいる。わたしの「現在」は、目の前にある書きかけの原稿と目の前にはないがゲームにとって重要な要素の両方によって成り立っている。

こうして主観的意味・イルーシオを介して現在に入り込む要素は、行為者の過去のゲーム経験であろう。つまり、行為者の現在には、主観的意味を介して、過去が入り込んでいるのである。過去も入り込んだ広がりのある現在のなかに、行為者は意味や未-来を見出し

ているのである<sup>37</sup>。

このように過去と現在が明確に区別できなくなった今、行為者が「現在に意味や未-来を見出す」とはどういうことなのか、あらためて考え直す必要があるだろう。

行為者が未-来や意味を見出す対象は、現在目の前にあるものに限定されなくなった。しかし、行為者が「現在、世界に注意を向けているなかで意味や未-来を見出していること」は変わらず重要である。行為者は、現在の時点において世界に注意を向けていて、その注意のなかで意味や未-来を見出している。つまり、「現在」とは、「現在の目の前の状況」という意味ではなく、行為者が意味や未-来を見出す「時点」を示しているということになる。

そして、その現在の時点において、行為者は具体的な何かに意味や未-来を見出している。行為者が意味や未-来を見出すのは、具体的な局面や事象にであった。それは、「現在」が拡張しても変わりがない。行為者が意味や未-来を見出すのは、具体的な人・物・活動のなかに、である。

討論や問いや知のあるひとつの状態（それ自身、行為者たちや制度、傑出した人物、「…主義」という概念などに具体化しているわけだが）のかたちで界のなかに刻み込まれている固有の可能態（possibles）の空間（問題系(problématique)）（Bourdieu [1997]2003: 164=2009: 192）

たとえば研究者の場合は、未-来、自分にとって未-来に可能なことを見出すのは、具体的な制度や人物、概念などのなかにである<sup>38</sup>。

---

<sup>37</sup> 意味と現在の関係は複雑である。主観的意味＝イリュージョンによって今・ここにはない要素が現在に呼び込まれるという面とともに、先の1節で論じたように、今・ここにある具体的対象（たとえば骨とう品のなかに意味を感じるという面もある。

おそらく、今・ここにあるもの（たとえば目の前の印刷された紙の束）に行為者が今・ここを越えた意味（読むべき論文）を感じるとき、その今・ここを越えた意味が、関連する他の要素を現在に呼び込み、行為者の現在を拡張させるのだろう。

<sup>38</sup> 仕事を失い意味と未-来を失った人についてのブルデューの記述にも、意味や未-来が現在において具体的な何かのなかに見出されていることが読み取れる。

「失業者は、自分の仕事を失うと同時に、社会的に認識され認知された役割（fonction）が具体的に現実化し顕現する数々のものを失ったのである。すなわち、意識的計画としてではなく、必要と緊急事の形で（『重要な』アポイントメント、納入すべき仕事、切るべき手形、作成すべき見積書など）前もって指定された目的のすべてを、また、守るべき期限・日付・時間割の形で（乗るべきバス、遵守すべき作業速度、終えるべき仕事など）この今現在のなかにすでに与えられている未来を失ったのである。行動を、またそれを介して社会生活を方向づけ刺激する誘因と指示から成るこのような客観的世界を奪われた彼らは、残された自由時間を死んだ時間、何の役にも立たない、いっさいの意味＝方向（sens）を抜きとられた時間として生きるほかない」（Bourdieu [1997]2003: 320=2009: 378-9）。

仕事を失うと同時に人々は意味や未-来を見出す具体的な対象を失い、意味と方向のない時間を生きることになる。この意味や方向のある時間を失った（「生きていく上で欠かせない幻想を奪われた」（Bourdieu [1997]2003: 320=2009: 379））人々は、賭け事などに熱中することがあるのだが、この賭け事は、時間のベクトル・流れを再創造することを可能にする（Bourdieu [1997]2003: 320=2009: 379-80）。仕事を失い、意味や未-来を失った人々は、それでも今の状況のなかでできる限り意味や未-来を見出そうとするのである。

つまり、行為者が「現在」に意味や未来を見出すとは、行為者が「今」、「具体的な対象・世界に関わるなかで」そのなかに意味や未来を見出すということをあらわしている。行為者が現在、具体的な世界とも関わりが、直接的なものであれ主観的意味を介したものであれ、実践感覚による実践においては重要なのである。

先の5章では、未来について考察することをおして、現在の具体的な状況と、それに向かう行為者の注意が実践感覚において重要であること、そして、身体化した過去による実践の構造化は、行為者が「現在」に注意を向けるなかで成立することを明らかにしてきた。この項では、この「現在」についてより深く検討し、行為者にとっての「現在」が、直接接触している今・ここに限定されない、過去の経験も入り込んだ広がりのある現在であるということを論じてきた。「現在」とを捉えなおすことで見えてきたのは、行為者が意味や未来を見出す「現在」とは、目の前の状況という意味ではなく、「行為者が現在の時点において関わりをもつ具体的な世界」であるということである。行為者が現在、具体的な対象・世界に関わり注意を向けるなかで、身体化された過去にもとづく意味や未来が具体的な対象のなかに見出され、身体化された過去による実践の構造化が生じるのである。

ハビトゥスについての従来の理解では、ハビトゥスは身体化された過去とほぼ同一視され、その身体化された過去は行為者を覆い尽くすほどの存在感をもっていた。しかし本稿の議論においては、身体化された過去は、行為者が現在具体的な何かに注意を向け、そこに意味や未来を見出すなかにしか存在しない。身体化された過去は行為者を決定するものではなく、むしろ身体化された過去は現在の時点において行為者が世界に関わるなかで行為者によって形作られるものである。

ブルデューは、実践は時間のなかにあるのではなく、時間（生物学的・天文学的時間と異なる人間的時間）をつくと述べている（Bourdieu [1997]2003: 299=2009: 354）。行為者が現在の時点において具体的な世界に注意を向け、その世界と関わるなかで、行為者が意味や未来を見出す現在の広がりが生じ、身体化された過去も、未来に向かう流れもそこではじめて見出される。そして、行為者が先取りした未来に向かって実践をおこなうことで、未来が現在になり、時間が流れていく。行為者が現在の時点においても世界との実践的な関わりが、行為者の時間のある意味で作っているのだ。すべては、行為者が今具体的な何かに注意を向けて関わりをもつ、そこからはじまっているのである。

## 2-3 あらためて行為者の能動性とは

ここまでの2つの項で、「客観的意味や客観的方向があるとはどういうことか」と「行為者が意味や未来を見出す現在とはどういうものか」について検討してきた。その結果、ど

これらの項の議論からも見えてきたのは、従来の一般的な理解とは異なる実践感覚の像であり、実践感覚のプロセスのなかにいる、世界に意味や未来を探し見出す行為者の存在である。

1項で客観的に意味や方向があるとはどういうことかについて再検討するなかで見えてきたのは、実践感覚による実践のなかで確認される客観的意味や客観的方向は普遍的なものではなく、行為者の主観の入った客観的意味=方向であること、客観的世界に行為者が見出す意味と方向であるということだった。主観と客観を照らし合わせる実践感覚とは、客観的世界に行為者が見出す意味や方向をとおして、主観的意味=方向を確認・再獲得し続けるプロセスなのである。行為者は、客観的世界との関わりのなかでさまざまな意味や未来を見出し、身体化した感覚によって示される意味や未来を確認・再獲得している。行為者は、意味や方向を客観的世界にどのように見出すか（強引に見出すか／客観的世界の変化に敏感になるか）というところに関わることができる。行為者と客観的世界との関わりのところにこそ、行為者が実践を制御する可能性が存在する。能動的な行為者は身体化した過去・感覚との関係において見出されるのではなく、客観的な世界との関わりのところに見出される。

2項で行為者が意味や未来を見出す「現在」について再検討し明らかにしたのは、行為者が現在の時点において具体的な世界ともつ関わりがすべてのはじまりにあるということであった。行為者が現在において具体的な事象・局面ともつ関わりこそが、身体化された過去を存在せしめる。行為者は現在の時点において具体的な世界と関わるなかで、身体化された過去と、過去の入り込んだ広がりのある現在、そして未来への流れをつくる存在なのである。

これらの議論から浮かび上がるのは、行為者が今、この時点において、具体的対象や客観的世界に注意を向け、そこに意味や未来を探そうとする姿であろう。実践感覚による実践の過程において核心にあるのは、身体化された過去や身体化された実践の原理ではなく、現在において世界に注意を向けそこに意味や未来を探す行為者である。具体的・客観的世界に関わろうとする能動的な行為者がすべての基盤にあるのである。

一般的な理解、すなわち、実践感覚は経験のなかで培ってきた感覚的な知やノウハウのようなものだという理解でとどまっていると、過去の経験のなかで身体化された知や感覚が、一方的に世界に意味や方向を付与しているイメージになる。それにたいして、実践感覚と2つの *sens*（意味・方向）の関係に目を向けることで見えてくるのは、行為者と実践感覚や世界のあいだにある従来のイメージとは異なる関係である。行為者の身体化した知・感覚や、行為者の抱く意味、方向、未来は、行為者が過去においてすでに獲得していて、それを世界に適用するというものではない。また、行為者のコントロールの外から（身体化された自動的プログラムから）降ってくるものでもない。行為者の身体化した知・感覚や、行為者の抱く意味、方向、未来は、行為者が現在において客観的・具体的な世界と

関わるなかで身体化した過去と客観的・具体的世界を照らし合わせ結びつけることで生じるものである。実践感覚とは過去の経験のなかで行為者が身につけてきた能力というよりは、行為者が現在世界と関わるなかで見出した意味や未来を介して身体化した過去と客観的・具体的世界をつないで調整しつづける一連の絶え間のないプロセスであり、実践感覚、そして実践感覚による実践を駆動しているのは、身体化された過去と客観的な世界を結びつける位置にいる、世界に意味や未来を見出そうとする能動的な行為者である。先行研究においては、ハビトゥスや実践感覚による実践の過程には能動的な行為者が不在であると批判されることが多かったが、それにたいして本稿の議論が示すのは、身体化された過去にもとづいた意味や方向が現在に存在するためには、そして身体化された過去によって実践が構造化されるためには、行為者の能動性が必要であるということだ。実践感覚は、行為者が身体化された過去に取り憑かれておこなう無意識の実践過程ではなく、行為者が世界に意味や未来を見出すなかで身体化された過去と客観的・具体的世界をつないで実践をおこなう能動的な過程である。

本稿はブルデューの実践感覚をめぐる議論のなかに以上のように能動的な行為者を見出してきた。実践感覚における能動的な行為者とは、客観的・具体的世界へ注意を向け、その世界への注意のなかで身体化した過去と世界を照らし合わせたり結びつけたりすることで、実践への導き（意味・未来）を自ら獲得する存在である<sup>39</sup>。このような、身体化した過去と客観的・具体的世界を世界への注意のなかで結びつける行為者の能動性、身体化した過去と客観的世界のあいだで成立する能動性について考えることは、ブルデューの実践の理論を、これまでの理解より柔軟で多様な実践の可能性を描くものとして理解しなおすことを可能にする。行為者は、客観的・具体的世界との関わりのなかで、世界から提示される複数の可能性（注意を向け意味や未来を見出しうる対象が複数ある状態）と対峙し、そのなかで意味や未来を調整しさまざまな変えていく可能性に開かれている。このような行為者の実践は、身体化した過去と切り離されていないことで恒常的な性格をもつとともに、新しい状況に出会うことで生じる変動の可能性をももっている。

本稿がブルデューの実践感覚をめぐる議論のなかに見出した行為者の能動性は、行為者の能動性について、身体化された過去や客観的・具体的世界と切り離して考えることができないことを示している。しかし同時にこの逆も重要である。身体化された過去による実践の構造化は、客観的・具体的世界に注意を向け世界と関わっている行為者の能動性のなかではじめて実現するということだ。具体的・客観的世界への行為者の能動的な関わりと

---

<sup>39</sup> 本稿がブルデューの議論のなかに見出した行為者の能動性は、意味や未来が見出される過程や実践の過程を、行為者が現実に向かい合うなかで具体的な状況に自ら取り組む過程として見るということをあらわしている。自ら意味や未来を見出した結果、行為者は既存の社会秩序に抵抗することもあるだろうし、逆に不平等な構造を再生産するような実践をおこなうこともあるだろう。



身体化された過去・社会構造による構造化・規定は、たがいを制約しながらたがいを可能にするというかたちで「車の両輪のように」成立するものである。ブルデューの議論にたいする従来の理解では、身体化された過去による構造化だけが「一人歩き」していたが、この「構造化」は「行為者の能動性」とセットになってはじめて生じるものであり、逆に、ブルデューの議論に不在だと言われていた「能動的な行為者」は、「構造化」のなかにこそ見出すことができる。

この行為者の能動性は、一般的にイメージされる「能動性」とは異なるだろう。通常は、行為者が他の要素に影響されずに世界に働きかけることを「能動性」だと考える。それにしたって、実践感覚に見られる行為者の能動性は、身体化された過去による構造化の作用と切り離されてはいない。実践感覚による実践のなかには、不可分なかたちで、行為者の能動性と身体化した過去・社会構造による構造化が成立している。実践感覚による実践は、どの部分においても、能動性／構造化、行為者／社会のどちらかの項に単純に分類することはできない。そして、この二項対立を乗り越えた実践感覚における行為者の能動性を理解するためには、「従来型の」独立した自由な「能動的な行為者」を思い描いてはならない。実践感覚をめぐるブルデューの議論から見えてくるのは、能動性を行為者の側に強く結びつけたかたちで概念化するのではなく、行為者と世界のあいだで成立するものとして、概念化をやり直す必要があるのではないかということだ。能動性／被拘束性の二者択一・二元論を逃れるためには、このような「新しい」概念化が必要だと考えられる。

実践感覚のプロセスを働かせるためには、能動的な行為者の存在がとても重要であった。実践感覚のプロセスを働かせるためには、行為者が、現在、注意を具体的対象に向けることによって意味や未来を見つけたり、客観的な世界のなかで意味や未来を確かめたりする必要がある。行為者は、具体的な事象や局面のなかに身体化された過去とのつながりを見つけてそれに導かれて実践し、客観的世界のなりゆきからたえず意味や未来を紡ぎなおしていく能動的な存在である。行為者は、世界と関わる＝実践するなかで、意味や未来を見出し再獲得し続けるというかたちで、身体化された過去と客観的・具体的な世界を結びつける位置にいる。このような実践の理解は、ブルデューの議論にたいして加えられてきた批判のいくつか（変わらない社会状態のなかの実践だけを説明する／無意識的な実践のみを説明する）を乗り越えて、さまざまな実践をおこなう可能性に開かれた創造的な行為者をブルデューの議論の展開の先に描くことを可能にする。そこで次の3節と4節では、ここまで論じてきた実践感覚による実践モデルの先に、変わりゆく社会状態のなかでおこなわれる実践と、行為者の創造性を描き出してみたい。

### 3 行為者の実践的反省——身体化した過去と客観的な世界がずれるとき

実践感覚による実践に能動的な行為者の存在を見出すことによってどんな議論の可能性が開かれるのか。6章の後半では、本稿がブルデューの議論のなかに見出した新しい実践感覚像をさらに展開することを試みたい。具体的には、意味や未来が容易には見出せないケースにおいて、この事態を行為者が実践感覚によってどのように切り抜けうるのか考察する（3節）。そしてその先に、行為者が柔軟に変化に富む実践をおこなう可能性、行為者の創造性の可能性を論じたい（4節）。この作業は、本稿で論じてきた実践感覚の議論を、ブルデューを越えて展開する試みである。

ブルデューの議論にたいして多くの人が抱くだろう大きな疑問、そして本稿のここまでの議論にたいしても抱かれるだろう疑問は、次のようなものだろう。社会が変化するとき、行為者の実践の原理はハビトゥスとは別のものになるのか？あるいは、社会が変化すると行為者はうまく実践できなくなるのだろうか？本稿で用いた言葉を使って言い換えれば、身体化された過去と客観的・具体的な世界がつながらないときはないのか、意味や未来を見つけられなかったり見失ったりすることはないのか？

わたしたちは、進学や就職、転職、結婚など大きな変化を経験することがある。そのような変化のなかではもちろん、身体化された過去と客観的・具体的世界のあいだは容易にはつながらず、意味や未来をうまく（客観的に意味や未来が支持されるかたちで）見出すことはむずかしい。なかなか意味や未来を見出せず、目の前の事態が理解できず、うまく実践できないことも多い。また、一見変化のない日常のなかにも、先取りした未来が外れて、たとえばボールが思わぬ場所に飛んでいってしまったり、信じていた意味が裏切られて実践が失敗したり（効果を持たなかったり）、他者の実践が理解できなかったりする状況はしばしば起こる。こういった事態は、ハビトゥスでどのように説明されるのだろうか。本稿が提示する実践感覚のモデルは、この事態を説明できるのだろうか。

ブルデューは、大きな変化が起こったときは、行為者たちは苦勞することが多いと言う（Bourdieu [1997]2003: 232=2009: 273）。その変化のなかで一部の人々は、新しい状況に適応できず、挫折に追い込まれる（Bourdieu [1997]2003: 232-3=2009: 274）。より一般的に見られるケースでは、「ハビトゥスには不調（raté）があり」、その「狼狽とずれの危機的瞬間に」、「即時的な適応の関係は中断され」、「反省（réflexion）の一形態が入り込む」（Bourdieu [1997]2003: 233=2009: 274）。

ブルデューのこのような議論からは、変化のなかでは、行為者は挫折するか、反省するかのどちらかであり、どちらにせよハビトゥスでは変化をうまく乗り切れないように見える。しかしこの説明は、ハビトゥスと反省という2つの行為原理が考えられていることか

ら、N・クロスリーが指摘していたように（Crossley 2002b: 330-2）、議論における一貫性のなさや二元論を招き入れているように見える点で批判されやすいだろう。

だがブルデューは、この反省について、続けて次のようなことも述べている。ハビトゥスによる部分と意識的意志による部分の区分けは容易ではなく、明示的な規則にはっきりと従っている場合でもハビトゥスの実践的戦略に委ねられる部分は常にあり、逆に、即興のような実践（＝ハビトゥスが説明する実践）においても、「ある形態の思考、実践的反省（*réflexion pratique*）、状況のなかで働いている反省（*réflexion en situation et en action*）」（Bourdieu [1997]2003: 234=2009: 275）が含まれる。つまり、「ずれの危機的瞬間」だけではなく、実践には常に反省がともなっていると考えられている<sup>40</sup>。しかしこの実践的反省については、「実践的反省を、ハビトゥスが実践を生成するさいに付随する意識の形態として位置づけるだけで、この意識の形態の固有の役割を描き出してはいない。……ブルデュー氏は実践における反省に一定の役割を認めているが、これを十分に解明することはなかった」（倉島 2007: 256 n.19）と批判されているように、この反省はどのようなものか不明であり、ハビトゥスとの関係もよくわからない状態にある。

このように、ブルデュー自身の説明を読む限りでは、ハビトゥスだけでは変化する状況における実践を説明できないように見え、そして、変化する状況のなかで必要になる反省についても、どんな実践にもともなうと言われているが、その位置づけや性格が残念ながらよくわからない。

上記のようにブルデューの変化についての議論<sup>41</sup>が不完全なものになっている理由は、能動的な行為者の位置づけがブルデュー自身の議論においては十分に整理されていないからではないだろうか。本稿でブルデューのテキストから引き出してきた、能動的な行為者の存在を積極的に評価する実践感覚理解の延長になれば、変化のなかでの行為者の実践や、ブルデューの議論のなかで適切に位置づけられなかった反省についても内包することができるのではないだろうか。

---

<sup>40</sup> 『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』においても、ブルデューは実践的反省とハビトゥスを関連づけている。「ハビトゥスの概念は、『フョイエルバッハについてのテーゼ』のなかでマルクスが示したプログラムにしたがい、すべての知識は通俗的なものであれ学問的なものであれ、構築の作業を前提にしているという観念論の考えを放棄することなしに、知識についての唯物論的理論を可能にすることを目指しています。しかしハビトゥスの概念は、この構築作業が純粹に知的な作業とまったく異なること、実践的な構築の活動、それどころか実践的反省（*practical reflection*）の活動によって成り立っていることを強調します」（Bourdieu and Wacquant 1992: 121=2007: 161）。

<sup>41</sup> 近藤理恵（1997）は、大きな変化が生じる危機的状況とハビトゥスの実践との関連を論じている。近藤は、ブルデューの実践理論は、これまでの生活を断絶しかねないほどの危機的状況を切り抜ける力を過去からの「持続的」行為に見出す点に特徴があると論じている（近藤 1997: 199-200）。「過去はオイルのごとく揮発することなく、痕跡のごとく私たちの身体の中に『ハビトゥス』として沈澱するといえる。この『ハビトゥス』こそが、予測不可能な状況に際し、危機および批判的な疑問視から身を守りつつ、新たな戦略的行為を産み出すというアンチテーゼを提示するのである」（近藤 1997: 212）。本稿は、近藤が指摘するように行為者が予測不可能な状況を乗り切る力の源泉が過去からの持続性にあることは認めつつ、さらに、なぜ過去からの持続性のなかで新しい状況への柔軟な対応が可能なのかを考察するものである。

そこで以降では、先ほどのブルデューの変化についての議論のなかでも登場した「実践的反省」に注目し、この「実践的反省」についてのブルデューの議論を実践感覚について考察するなかで見てきたことをベースに実践感覚に関する概念を使いながら読み解き整理することをとおして、実践的反省の概念を理解・発展させてみたい。そして、実践感覚と実践的反省の関係を考察し、実践感覚概念を（ブルデューのハビトゥスについての説明がもっていた限界を越えて）発展させることを試みたいと思う。

実践的反省についてのブルデューの議論を引用しておこう。

より一般的に言うと、ハビトゥスには不調がある。狼狽とずれの危機的瞬間がある。そのとき、即時的な (*immédiate*) 適応の関係は中断される。そのためらいの瞬間に、反省の一形態が入り込む。この反省はしかし、スコラ的思想家の反省とはいかなる関係もない。シャドー・プレイイングのような動作をとおして (*à travers les mouvements esquissés du corps*) (たとえばテニス選手がミスプレーの動作をもう一度やってみて、遂行した動作の効果を、あるいはその運動となすべきであった運動とのずれを目と身振りで見積もるときのように)、動作を遂行する者ではなく、実践の方に向けられた反省である。

意識と無意識の二分法のように、実践を決定する要因としてハビトゥスの性向による部分と意識的意志による部分はそれぞれどの程度なのかの問題を提起させるような思考習慣に従わなければならないのだろうか。……現実には、この区分けは容易ではない。……ピアニストの即興や体操選手の自由演技も、かならず、ある種の沈着・機転 (*présence d'esprit*)、いわゆる、ある形態の思考、実践的反省 (*réflexion pratique*)、状況のなかで働いている反省 (*réflexion en situation et en action*) をともなっている。それは、遂行された行動や身振りをその場で評価し、悪い姿勢を矯正し、不完全な動作をやり直すために必要な反省である (Bourdieu [1997]2003: 233-4=2009: 274-6)

ブルデューはハビトゥスの「即時的な適応の関係」が中断したときに「反省」が入り込むと言ひ、この反省を「実践的反省」と呼んでいる。実践的反省は、即時的な適応の関係の中断、すなわち、身体化された過去と客観的な世界がずれたときに入り込むものであり、「即興」のようなハビトゥスによる発明的な実践にもともなっているものである。

この実践的反省は、実践（動作）や実践の効果を評価し、悪い部分を直し、実践をやり直すために必要な反省と考えられている。これは、実践が客観的に意味をなしているかどうか、実践に客観的に流れや方向が見出せるかどうかを確かめ、そこで意味や方向がうまく見いだせなかったときに、客観的に意味や方向が得られるように実践を修正する反省だと解釈することができる。

客観的意味=方向を得るためのこの反省は、「動作をとおして」の反省だと言われている。それはたとえば、テニスの選手がミスプレーの動作をもう一度やってみて、おこなった動作の効果を、あるいはその動作となすべきだった動作のずれを目や身振りで見積もるときのようなのだとブルデューは考えている。したがってこの実践的反省とは、実践をおこなないながらの反省、実践を試行錯誤することで効果のある実践のありかたを探す<sup>42</sup>こと、実践の結果、すなわち実践と客観的世界の關係に注意を向けながら実践を試行錯誤するなかで、客観的に意味や方向を見出すことのできる実践のありかたを探り出すことだと考えることができる。たとえば、評価が得られなかった論文を少しずつ書き直し、何度も読み直し、人にも読んでもらって反応を確かめてみるという作業をとおして論文を修正していくことが、この実践的反省の例だと言える。ここで反省や意識はあくまでも、自分にではなく、論文それ自体や論文にたいする他者からの具体的なコメント、つまり実践それ自体や実践の効果、実践と世界の噛み合わせがうまくいっているかどうかという点に向かっている（「動作を遂行する者ではなく、実践の方に向けられた反省」）。実践的反省は、わたしたちが意味や未-来を見失ったときに、実践を試行錯誤するなかで、客観的世界のなかに再度意味や未-来を見出そうとする過程だと解釈することができる。

ここで、意味や未-来を見失った場合の実践的反省について、その一連のプロセスを描いてみよう。

身体化された過去と客観的世界がずれてしまったとき、社会状況が変わってしまったときには、従来通りの実践はうまくいけなくなり、行為者は実践の結果に不満を感じる。これは言い換えると、実践が客観的に意味をなさなくなること、一連の実践に客観的な方向を見出せなくなることであり、行為者が抱いていた主観的意味や主観的方向が、客観的な世界に支持されなかったということでもある。このとき行為者は意味や未-来を見失い、意味や未-来を再び見出したい、主観的に感じる意味や未-来が客観的にも支持される状態を再び取り戻したいと願うだろう。

ここで「反省」が入り込むことになる。一般的には、反省というと、おのれを省みて自分のありかたを変えていくことであり、それは主観的意味や主観的方向を考え直し変えていくことを意味している。しかしブルデュー理論においては、身体化された過去は忘却されており、行為者は自分が身体化している過去がどのような意味や未-来を示すのかを単独で把握することはできないはずである。したがって、行為者が自分の内にある主観的意味や主観的方向について反省し、それらを直接変えていくことはできないということになる。

そこでブルデューの論じる「実践的反省」では、行為者は、自分について反省するので

---

<sup>42</sup> 反省はいつも、実践の結果に向かっている。「行為自身への反省的な回顧（*retour réflexif*）がなされても、それが到来する時には（つまり、自動運動（オートマティズム）が失敗する時にはほとんどいつも）結果の追求に従属し、費やした努力の収益を最高に引き上げようとする（そのものとしては、必ずしも知覚されない）探究に従属したままである」（Bourdieu 1980: 153=2001(1): 150）。

はなく、実践をとおして、実践のただなかで反省をおこなう。行為者は、自分の実践の結果（実践と客観的世界の関係）に注意を向けながら試行錯誤するなかで、自分の実践と客観的世界がうまく噛み合うところを探り出し、実践に客観的に意味や方向を再び見つけ出そうとする。試行錯誤が功を奏し、実践と客観的世界がうまく噛み合い、実践に客観的に意味や方向が見出せたとき、客観的意味=方向から主観的意味=方向が直接獲得される（4章などを参照）。行為者は、自分の実践にたいして主観的にも再び意義や存在理由を見出し、未来に向かう実践の流れを感じることもできるようになる。このとき行為者は、実践やゲームの客観的意味=方向だけではなく、主観的な意味=方向をも新たに得なおしている。つまり、実践的反省とは、実践の客観的意味や客観的方向について反省する・注意を向けながら実践をおこなうなかで、主観的にも客観的にも意味や方向が感じられる実践のありかたを探ることだと言えることができる。実践的反省においては、実践についての反省を経由して、主観的意味=方向について、すなわち自分についてのとらえなおしがおこなわれている。

この実践的反省は、身体化された過去と客観的世界がずれたときだけではなく、ハビトゥスによる柔軟な実践の典型例である即興的な実践にもともなうと言われている。即興は、自分の内からあふれ出てくるもののように思われるが、そうではない。即興にも、実践の結果（客観的意味=方向）に注意しながらよりいい結果がえられるように実践を調整する過程が含まれている。たとえば、状況に合った発言を即興的にこなうためには、行為者が自分の実践（発言）と他者の実践（発言・反応）の関係に見出せる意味や方向に注意を向け、そこに即座に合わせて柔軟に発言をおこなうことが必要である。即興は、前もって計画された行動とちがい、実践と客観的世界の関係に柔軟に合わせて実践を調整することが不可欠である。即興に含まれる実践的反省とは、実践の効果、実践と客観的世界の関係に注意を向け、その場で見出される客観的意味や客観的方向に柔軟に合わせて実践を調整する（そしてその過程で、主観的意味や主観的方向を調整する）ことだと考えることができる。

このように理解される実践的反省の核心部分にあるのは、実践しながら実践と世界の関係のなかに意味や未来を探ることである。他方実践感覚とは、この章の2節で見てきたように、行為者が客観的・具体的世界のなかで意味や未来を見出していく能動的な過程であった。このように考えると、実践的反省と実践感覚のプロセスはその核心部分において非常に近いものであることがわかるだろう。また、即興的な実践は、先に述べたようにハビトゥスによる発明的な実践の典型例であり、もっとも実践感覚らしい実践である。これらの理由から、実践と客観的世界の関係に注意を向けながら実践を調整するなかで主観的にも客観的にも意味=方向を新たに得ていく過程である実践的反省は、実践感覚のひとつのか

たちだと考えることができるだろう。実践的反省は、実践感覚と別のものではなく、付随する別の要素というわけでもなく、実践感覚そのものなのである。

この実践的反省には、意味や未・来を新たに得なおす、すなわち意味や未・来を修正する過程であるという特徴があった。実践感覚を実践的反省とつなぐことによって、実践がうまくいかないときに実践を試行錯誤しながら意味や未・来を探す、意味=方向の修正プロセスを含むものとして実践感覚を拡大することができる。また、この意味=方向の修正には、時には長い時間がかかることもある。実践感覚と実践的反省の共通性に着目することで、実践感覚による実践を即興という言葉がイメージさせるような瞬間的な実践に限定することなく、長期にわたって悩みながら実践する過程まで含むものとして拡大することが可能になるだろう。また、即興的实践についての理解という点から考えても、即興を無意識的・感覚的におこなうものとしてしまうのではなく、そのなかにある調整や反省の過程を考えることができるようになる点でメリットがある。

6章の前半までは、行為者が主観的意味=方向にもとづいておこなった実践が客観的意味=方向をいつも自然に獲得できるかのように論じてきた。しかしわたしたちの日常には、意味を見失ったり、未・来を読み間違ったりすることはよくあることである。実践的反省は、このようなわたしたちの日常を描きうる概念である。しかし、ハビトゥスと実践的反省の関係がブルデューの議論では不明瞭であった。この節では、実践的反省も、実践感覚と同じように、行為者が実践と世界の関係のなかに意味や未・来を探す過程であることを明らかにした。実践的反省と実践感覚をつなぎ、実践的反省を実践感覚のなかに位置づけることで、身体化された過去と客観的世界がずれたときに、そのずれを修復する過程をも、実践感覚のプロセスのなかで考えることができるようになる。実践感覚は、自動的に進行する閉じた再生産プロセスではなく、行為者が客観的世界に合わせて意味や未・来を修正したり調整したりし続ける開かれたプロセスなのである<sup>43</sup>。

### 意識的反省を実践感覚のなかに位置づける

これまで、反省は、ハビトゥスや実践感覚の対極だと考えられることが多かった。このように考える場合、実践感覚による実践は意識的思考の対極の、勘的なもの、無意識的な

---

<sup>43</sup> 身体化した過去と客観的世界がずれて失敗したり意味や未・来を見失ったりするときに、行為者は、実践的反省によって意味や未・来を積極的に探すだけではなく、うまくいかない状況から逃げたり、何もできず立ち尽くす場合もある。このようなケースも、積極的に実践感覚のモデルを拡張するならば、説明することが可能になるだろう。たとえばうまくいかない状況から逃げる行為者は、意味や未・来を見出せない状況から別の状況に移ることで客観的世界に意味や未・来を見出そうとしている。状況の変化に呆然と立ち尽くす行為者は、事態が好転して意味や未・来が見出せるようになるのをただ待っている。

ものを象徴することになる。したがって多くの論者は、ハビトゥスによる実践モデルを改良するためには、ハビトゥスと意識的思考・反省という2つの原理を和解させる必要があると考えていた（2章を参照）。ブルデュー自身も、実践的反省について論じるさいに、ハビトゥスを無意識、反省を意識と、分けているように見える。

しかし、この節で論じてきたように、実践的反省は実践感覚のなかに位置づけられるのであり、両者は対極的な位置にあるものではない。そして、両者が対極にあるものではない以上、実践的反省は意識的なもの、実践感覚は無意識的なもの、と分けてしまうこともできない。実践的反省も実践感覚も、無意識／意識の一方の項に単純に分類してしまうことはできないのである。

まず、そもそも、実践的反省概念を検討する前から、本論文で論じてきた実践感覚の実践のモデルには行為者の意識が「実践や状況に向かう注意や関心」というかたちで含まれていた。現在、行為者は客観的・具体的世界へ絶え間ない注意・意識を向け、客観的・具体的世界のなかに意味や次の展開のきざしをつかんでいる。実践感覚とは、行為者が注意や集中、意識を世界に向けることなのである。このとき行為者ははっきりと現在を「意識」しているのであり、「無意識」に実践しているとは言えない。したがって、実践感覚は無意識のほうに単純にカテゴライズすることはできない。その上、この実践感覚のなかに実践的反省が位置づけられることで、実践感覚には長期にわたって実践の効果を注視し、どう実践すべきか悩む過程が含まれることになる（もちろんこの悩みは、自分に向かうのではなく、あくまでも実践自体や実践と客観的世界の関係に向かっている）。

そして、通常「意識」の方にカテゴライズされる反省だが、実践的反省は単純に「意識」の側に分類することはできない。実践的反省には、動作を繰り返すなかであるべき動作を目や身振りで探るなど、実践を試行するなかで感覚的に意味や方向をつかむこと（いわば実践の無意識的試行）が含まれている。反省は、意識的思考に限られないのである。もちろん、意識的に考えながら実践を修正することも、実践の無意識的試行と同様に実践的反省に含まれると考えるべきだろう。実践がうまくいかなかったときに、どこがうまくいかない原因なのだろうと考えることも、実践を繰り返すなかでなすべき実践を感覚的につかんでいくことも、同等の資格で実践的反省のなかに含まれる。そう考えると、意識的思考、何をどうしたらいいか考えることは、身体化された過去と客観的世界をつなぐためのひとつの手段と位置づけられる。意識的思考は実践感覚やハビトゥスの対立項ではなく、実践感覚の過程のなかで身体化した過去と客観的な世界をつなぐために行為者の実践のとりうるひとつの手段であると考えることができる。

実践感覚に導かれて行為するとき、行為者は、客観的・具体的な世界に意識を集中しているため、自分自身にたいしては「無意識」である。また、わたしたちは実践感覚の原理を説明できない。そういう意味でも、ハビトゥスや実践感覚は「無意識」である。しかし、



実践はハビトゥスや実践感覚によって無意識に編み出されているのではない。実践は世界に向かう行為者の「意識」のなかでおこなわれており、その意識のなかで思考しながら意味や未来を採することも実践感覚の過程のなかに含まれる<sup>44</sup>。したがって、実践感覚やハビトゥスによる実践を無意識のものと単純に分類してしまうことはできない。無意識／意識の二項対立を越えたものが実践感覚やハビトゥスなのである。

これまで、ハビトゥス、とくに実践感覚による実践は、意識的なものが介入しない身体的な実践として理解されることが多かった。たとえば、次に引用するL・ヴァカンの議論は、ボクサーのハビトゥスや実践を身体的なものとして描いている。

ボクサーとトレーナーは、一見して、自分たちの活動の「精神的」側面について矛盾した見解を持っているように見える。彼らは、一方でボクシングは「思考する人のゲーム」であると主張し、それをしばしばチェスにたとえる。だが他方で、一旦ボクシングリングに足を踏み入れたなら、合理的な推論はありえないと主張する。……リングのなかで思考し推論するボクサーの能力は、身体と精神が分裂していない有機体——ジョン・デューイならさしずめ「身心複合体 (body-mind complex)」と呼ぶもの——の性質と化していることに気づいたなら、謎はおのずと解決する。

ボクサーとしての優越性は、このようにファイターの身体が彼自身のために即座に抽象的思考、事前の表象、戦略的計算による媒介——と、それがもたらす致命的な遅延——なしに計算し判断するという事実によって定義することができる。……訓練された身体こそ、自発的な戦略家である (It is the trained body that is the spontaneous strategist.)。それは同時に知り、理解し、判断し、反応する。そうでなければ、ロープのなかで生き残ることはできないだろう。そして、アマチュアの戦いでは、初心者容易に見分けることができる——固くて機械的な動き、遅く「見え見えの」コンビネーション。固さと頭でっかちのために、彼らの身振りと動作の協応に意識的な思考が介入していることが曝け出されてしまうのである。

したがって、ボクサーの戦略は、ボクサーのハビトゥスとそれをまさに生産した場の遭遇の産物として、意図的なものと習慣的なもの、合理的なものと感情的なもの、身体的なものと精神的なものとの学術的な区別を消し去るのである。それは、社会化された有機体に深く食い込んでいるため、個人の選択の論理を逃れてしまう、身体化された実践理性に関係している。(Wacquant [2004]2006: 97-8=2013: 143-4, 下線は引用者による)

---

<sup>44</sup> このように、実践感覚にかかわる意識と無意識について考察をすすめると、実践と意識／無意識の関係を考えるときに重要なことは、何にたいする無意識と、何にたいする意識が関わっているのかを考えることだということが明らかになる。

ここでヴァカンは、ボクサーの実践について、アマチュアの意識的な思考が介入している「固さと頭でっかち」の実践と、意識的な思考が介入しない優秀なボクサーの実践を対比的に描いている。しかし、このような対比の構図を用いることで、優秀なボクサーの実践にも関わっているはずの「意識」が見えなくなっている。その結果、優秀なボクサーの実践は、訓練された身体がおこなうものとなる。ボクサーは身体に還元されてしまうのだ。訓練された身体が「自発的な戦略家」であり、この身体が巧みな「計算」と「判断」をおこなう。ボクサーの戦略は、ボクサー自身ではなく、ボクサーのハビトゥスと場の遭遇によって説明されてしまう。

このヴァカンが描く実践の像は、ハビトゥス概念のもつ身体的な次元を積極的に評価したものだ。しかしこの議論には問題がある。実践の巧みさを身体の中、ハビトゥスや身体の見えない内部に帰してしまうのだ。そうすると、この巧みな実践において「知り、理解し、判断し、反応する」とはどういうことか、行為者がどのように実践に関わっているのかは身体という「ブラックボックス」の中、隠されてしまい、見えなくなってしまう。

このように、ハビトゥスや実践感覚についてのブルデューの議論を意識的思考の対極を描く議論や身体的におこなわれる実践をめぐる議論として（だけ）理解すると、実践における行為者の意識が不明瞭になる。本稿で主張したいことは、実践感覚による実践を、身体化した過去だけでもとづくものと理解したり、意識／無意識、能動性／被拘束性の対立項の一方（無意識・被拘束的）に置いたりすることなく、身体化された過去による構造化と客観的・具体的世界への行為者の能動的な関わりの両方が支え合うメカニズムとして理解するべきだということである。このように実践感覚をとらえるならば、実践の過程における行為者の意識を理解することが可能になる。

「意識」というと、（行為について論じる文脈では）自分自身について意識することだと考えられる傾向がある。しかし実践感覚に見られる行為者の意識は、自分自身ではなく、実践、実践の成果、客観的世界に向かっている。実践感覚に見出される行為者の意識は、世界に向かう意識、自分がある意味で忘れることによって発揮される意識である。このような実践感覚における行為者の意識は、実践的な状態での意識のありかたを示していると考えられる。

能動性についてと同様、意識についても、行為者の側に強く結びついたかたちで概念化するのではなく、行為者と世界のあいだで成立するものとして、概念化をやり直す必要があるのだろう。意識／無意識の二者択一・二元論を逃れるためには、意識についても「新しい」理解が必要なのである。

#### 4 行為者の創造性の可能性

先の節では、身体化した過去と客観的世界がつながらないとき、すなわち、意味や未来を見失ったり、実践が失敗したりするときについて考えた。実践的反省という概念に注目し、実践的反省と実践感覚の関係について検討することで見えてきたのは、身体化された過去と客観的な世界がつながらないときに生じる実践的反省は実践感覚のなかに位置づけられるのであり、身体化された過去と客観的な世界がつながらないときについても実践感覚の議論は有効だということだ。行為者は、意味や未来を見失ったときも、実践感覚のプロセスを作用させる。行為者は、客観的世界に意味や未来の可能性を探し、身体化された過去と客観的世界の新たなつながりを探り出そうとする。本稿で見出した実践感覚のモデルには世界に能動的に意識や注意を向けて世界のなかに自ら意味や未来をつかみとる行為者の存在があるからこそ、このような展開が可能である。

実践的反省において、行為者は、身体化した過去と客観的・具体的世界のあいだに生じたずれを、客観的世界に意味や未来を探すことを通じて修復していた。この実践的反省は、身体化された過去と客観的・具体的世界をさまざまに柔軟につなぐことが可能であることを示しているだろう。実践的反省の過程に特徴的に見られるように、行為者は、客観的・具体的世界と関わり、世界から提示される意味や未来と対峙するなかで、(主観的) 意味や未来を調整しさまざまに変えていく可能性に開かれている。行為者の身体化された過去が許容する意味や未来は、世界に見出せる意味や未来に合わせて柔軟にあらわれかたを変えることができる(もし身体化した過去が許容する意味や未来の可能性がひとつしかないならば、いったんずれてしまった身体化された過去と客観的・具体的世界のつながりは二度と修復されることはない)。この節ではこの点に注目し、行為者の創造性について考えてみたい。

まずは、ブルデューのテキストのなかに、身体化された過去と客観的・具体的世界における意味や未来の複数性を確認しておこう。

客観性の側 (*a parte objecti*)、世界の側では、世界の意味 (*sens*) は、それが依存している未来として開かれているがゆえに、複数の解釈に応じる。主観性の側 (*a parte subjecti*)、行為者の側では、ゲームのセンス (*sens du jeu*) はさまざまな仕方で自己を表現する、あるいは表現される、あるいはさまざまな表現のうちに自己を認める。

(Bourdieu [1997]2003: 337-8=2009: 399)

世界と行為者の意味=方向=感覚 *sens* は、客観的世界の側でも、行為者の側、ゲームのセンス・実践感覚の側でも、現実化の仕方に複数の可能性をもっている。身体化された過去

から引き出される意味や未・来、客観的世界がもちうる意味や未・来、ともに複数の可能性がある。意味や未・来は世界の側でも行為者の側でも一義的に決定されているわけではなく、どんなときにもあいまいさや両義性を含み、そこに複数の可能性があることが重要である。

行為者が、身体化した過去が含んでいる主観的な意味や主観的未・来に強く固執するならば、ドン・キホーテのように、客観的世界に起こるどんな出来事（たとえば風車の存在）にたいしても、自分の身体化した過去＝騎士道物語に極度にひきつけて意味や未・来を見出す（戦うべき相手として）。しかしこれが実践感覚やハビトゥスによって行為者が見出す意味や未・来の唯一のかたちではない。このドン・キホーテの場合と逆に、行為者には、客観的世界に起こる出来事に合わせて即興的に柔軟に主観の意味や主観的未・来を調整していくことも可能である。たとえば人は、「市場の以前の状態において最大の利益をもたらしてくれた学校の価値にいつまでも執着していないで、価値の下落してしまったコース (filières) やキャリア (carrières) とは適当な時期をみはからって手を切り、将来性のある (d'avenir) コースやキャリアに進路を見出す」(Bourdieu 1979: 158=1990 I: 218) ことができる（このような柔軟な実践を可能にするものをブルデューは「投資感覚 (sens du placement)」と呼び、これは市場の変動 (fluctuations) についての知識だと述べている (Bourdieu 1979: 158=1990 I: 218)）。このとき行為者は、客観的・具体的世界のなかにある未・来のきざし、世界の変動の方向を敏感に見てとって、その客観的・具体的世界のなかにある未・来のなかに自分の未・来を見出していく。この場合、行為者は、ドン・キホーテとは逆に、客観的・具体的世界にある意味や未・来に合わせて主観の意味や主観的未・来を柔軟に変形させていくと言えるだろう。

他にもさまざまなケースを考えることができるだろう。身体化した過去と客観的世界のずれに気づき居心地の悪さを感じている行為者のなかには、客観的世界を変えることで主観的意味＝方向と客観的意味＝方向の交点をつくりだそうとする者もいるだろう。身体化した過去に合った意味や未・来を客観的世界において実現させようとする、いわば現実へ抵抗する行為者である。たとえば、学歴資格の価値が低下していることにどこかで気づいていながらも、それでもこの学歴には価値があると積極的に主張し、学歴資格が活用できる新たなポストを創設しようとする行為などが考えられる。これは先の節で論じた実践的反省の別のバージョンだと考えることができる。この行為者は、客観的・具体的世界に注意を向けながら、自分の実践によってその客観的・具体的世界自体を変えることで、身体化された過去と客観的・具体的世界をつなごうとする。

他にも、客観的世界が提示する意味や未・来のなかで自分が納得できる（主観的意味＝方向を見出せる）ぎりぎりの交点を見つけ、しぶしぶ現状と折り合いをつけようとする行為者もいる。また、世界から提示される客観的な意味や未・来の可能性に合わせて、自分の身体化した過去のもつ意味や未・来の潜在的可能性を引き出し、積極的に変化していこうとする行為者もいるだろう。たとえば旅に出て新しい経験をし、その新しい経験のなかで新たな

意味や未・来を見出すことで、これまで知らなかった自分（＝これまで気づかなかったところに意味や未・来を感じる自分）を見つけようとするのが、変化していこうとする行為者の例として考えられる。このように、実践感覚と意味=方向をめぐる議論は、多様性に富む実践、状況に合わせて変化していく実践のプロセスを十分に描き出すことができるのである。

そして、行為者が身体化された過去と客観的・具体的世界をさまざまにつなぐ可能性をもつこの部分に、行為者の創造性を見出すことができる。

実践感覚に着目した数少ない先行研究においても、実践感覚には行為者の *virtuosity* (妙技) が見出せると主張されていた。3章でも紹介した A. King (2000) は、ハビトゥス概念を否定し、実践感覚 (名誉の感覚) をめぐる議論のなかには、ハビトゥス概念がとらえそこねた行為者の *virtuosity* があると論じていた。King は、実践感覚をめぐる議論では実践の妥当性が間主観的な交渉に開かれている点に、行為者の *virtuosity* が見出せると考えていた。

本稿は、King とちがい、行為者が身体化した過去と客観的世界の折り合いをさまざまなかたちでつけていく——身体化した過去寄りで交点を見つけるか、客観的世界寄りで交点を見つけるか——点に、行為者の *virtuosity* が見出せると考える。そう考えるならば、King のようにハビトゥス概念を拒絶しなくても、「社会構造を身体化したハビトゥス」の先に行為者の *virtuosity* を描くことができる。そして、行為者の創造性とは、こうした行為者の *virtuosity* によって、これまで実現していなかった身体化された過去と客観的世界の新たなつながり——身体化された過去と客観的世界をぎりぎりのところでつなぐうまい手 (妙技) ——を繰り出すことだと考えることができる。

ブルデューは、ハビトゥスによる実践を、機械的な単なる再生産と、予見できない完全に新奇なものの創造のあいだにおく (Bourdieu 1980: 92=2001(1): 87)。機知は、予見はできないが、あとから振り返ったときには必然性を感じるものとされている (Bourdieu 1980: 95=2001(1): 90)。本稿が実践感覚のなかに見出す行為者の創造性は、身体化された過去にもとづく限りで完全に新奇なものの創造ではなく、しかし同時に、客観的・具体的世界との関わりのなかで行為者が新たに実現するものである限りで、決して過去の単なる再生産にはならない。身体化された過去にもとづいていながら、それが行為者の客観的世界への関わりのなかでどのようなかたちであられるかを予測できないのが、ハビトゥス・実践感覚による創造的な実践である。そうして行為者によって創造的に繰り出される手は、「前代未聞でも不可避でもあるもの」 (Bourdieu 1980: 96=2001(1): 91) となる。

実践とは、身体化された過去にもとづく意味や方向だけではなく、身体化された過去の意味=方向と客観的・具体的世界に見出される意味=方向のあいだで行為者が実現するものである。行為者は、実践のなかで、身体化された過去と客観的・具体的世界をさまざまに

照らし合わせ、さまざまな交点を見つける。そのなかで、行為者は、身体化された過去にもとづく限りで必然的でありながら、客観的・具体的世界とのまじわりのなかで予測不可能な手を繰り出す可能性に開かれている。現在、具体的世界に向かう注意や意識のなかで、世界と必死に取り組むなかで、考えながら、ときどき自分でも思いもよらなかった新しい可能性を開拓しながら実践するのが、実践感覚による実践である。ハビトゥスと世界をさまざまにつなぐ創造性を発揮する能動的な行為者がそこにいる。

二元論の乗り越えは、ブルデュー自身の議論では明確に説明されているとは言えなかった。ブルデューの議論、ハビトゥス概念には、実践に意識的・能動的に関わる行為者が多様な実践をおこなう過程についての説明が不足していた。しかし、実践感覚と意味や方向との関係、すなわち、実践感覚をもつ行為者がどのように世界を認識し世界と関わっているかに注目してブルデューの議論を読みなおすことで、ブルデュー理論のなかに、能動的で創造的な行為者を位置づけることができるようになる。本稿がブルデューの議論から引き出してきた、実践感覚によって能動的に実践する行為者の像は、完全な決定論でもなく、完全な自由を思い描くものでもない、決定されながらも自由な行為者、二元論を乗り越える行為者である。二元論の乗り越えは、身体化され閉じてしまった（従来のとらえかたでの）ハビトゥスのなかではなく、更新され続ける開かれたプロセスとしての実践感覚のなか、行為者が身体化された過去と客観的・具体的世界のあいだで意味や未来を更新し続けるプロセスのなかで可能になるのである。

## 終章 構造から感覚へ——本稿の意義と可能性

### 1 まとめ

ブルデューの理論は、そのキー概念であるハビトゥス概念とともに、客観主義／主観主義、社会／行為者、条件づけ／自由、無意識／意識などの二項のうち、前者に偏ったものであると理解される傾向があった。しかし本稿は、ブルデューの議論を実践感覚概念に注目して読みなおし、ブルデュー理論のなかに能動的で創造的な行為者を見出してきた。

本稿の前半では、ハビトゥス概念について主に検討し、それがどのような概念であり、どのような問題点が指摘され、本稿はハビトゥスについてどのように検討するのかについて考えてきた。まず1章では、ブルデューが直面した客観主義と主観主義の二元論の問題をとりあげ、ブルデューがそれぞれにどのような問題を感じていたのか、ハビトゥスとはどのような概念で、それはどのようにして客観主義、主観主義それぞれの問題点を乗り越えようとしているのかを説明した。ハビトゥスによる二元論の乗り越えは、研究者のものの見方に潜む問題点の乗り越えと、人間観における偏りの乗り越え、2つの角度から試みられている。

次の2章では、このハビトゥス概念が、先行研究においてどのように評価され、どのように批判されているのかを見てきた。ハビトゥス概念は、構造主義の行為者理解を乗り越える概念として、そして行為の慣習的側面や身体的次元に光をあてる概念として評価されている。しかしその一方で、ハビトゥス概念にたいしては、「客観主義に戻っている」あるいは「二元論を抜け出す道を完全には示すことができていない」という批判が多い。社会／行為者の二項のうち、後者についての議論の不足が指摘されている。具体的には、ハビトゥスは無意識的次元しか描かない概念ではないか、能動的な行為者が見出せないのではないか、ブラックボックスではないか、変化や多様性が説明できないのではないかと批判されていた。そしてこれまでの研究では、このハビトゥスの問題点を乗り越えるために、行為者についての議論やハビトゥスと意識的反省などの関連づけ、行為者の多様性をフォローできるような実践のメカニズムを考えるなど、ブルデューに足りない要素を外から「足す」ことがさまざまに試みられていた。

3章では、本稿はハビトゥス概念をどう評価するのか、ハビトゥスにたいしどのような検討をおこなうのかを論じた。本稿も、先行研究で指摘されているように、たしかにブルデューのハビトゥスについての議論には実践の過程における行為者の位置が見えにくいという問題があると考えた。しかし、この問題にたいしてどう対処すべきかについては、本稿は先行研究とは異なるアプローチを考えた。先行研究ではブルデューに足りない要素を

ブルデュー理論に補う必要があると言われていたが、本稿は、ブルデュー理論やハビトゥス概念をより深く理解し発展させるという道をとることが可能であり必要であると主張した。ブルデューの議論やハビトゥス概念は、まだそのポテンシャルが十分に引き出されているとは言えない。まだブルデューの議論には検討の余地がある。ブルデューのハビトゥスのなか／延長に行為者の存在は見出されるべきなのである。

そこで本稿が注目したのが「実践感覚」である。多くの先行研究では、ハビトゥスは広い意味での「習慣」のようなものとして理解されている。しかしブルデューは、ハビトゥスを慣習的な実践の原理として説明するだけでなく、実践感覚としても描いている。前者の側面はこれまでも検討の対象になってきたが、後者の側面については、ハビトゥスの「たとえ」、あるいはハビトゥスによる実践が無意識的・自動的におこなわれることを示す表現として表面的に受け取られるだけで、理論的に検討されることはほとんどなかった。しかし実践感覚は、構造主義的見方からの分岐点を示すものであり、ブルデューの研究の背後にある問題関心のひとつを象徴する概念でもあると考えられる。その上、数は少ないが、実践感覚を能動性や行為者の存在を示す概念として評価し考察する研究も存在する。実践感覚についてのブルデューの議論を理論的に検討することは、習慣としてのハビトゥスでは説明できないところ、すなわち、実践の過程における行為者の役割や行為者の能動性について理解する手がかりを与えてくれるのではないか。

そこで第2部では、この実践感覚に着目して、ブルデューの議論を新たな観点から「読みなおす」作業をおこなった。これまでの研究では実践感覚は無意識的・身体的な感覚（スポーツのたとえのような）にとらえられて批判されていたため、本稿では、実践感覚のそれ以外の面、「実践的理解の原理」、「状況の意味＝方向（sens）を評価」する感覚としての実践感覚に注目することにした。そこで検討対象となったのが、ブルデューが実践感覚（sens pratique）の sens の3つの意味（感覚／意味／方向）を利用しておこなっている議論である。

まず4章では、sens の3つの意味のうち「意味」に注目し、意味を与える実践感覚について検討した。実践感覚による実践のなかで立ち現れる意味には、主観的意味と客観的意味の2つがある。行為者は、経験の産物である実践感覚によって、実践やゲーム・界に主観的意味を見出す。その主観的意味に導かれる実践は、客観的にも意味をもつ。そしてこの客観的意味から、直接主観的意味が再獲得される。主観的意味は、身体化された過去の経験から得られるだけでなく、客観的意味、すなわち、実践が状況のなかで意味を持つことにも支えられていることが見えてきた。

意味（sens）と実践感覚についての議論のなかから浮かび上がってきたのは、実践感覚は、経験を身体化した感覚であると同時に、身体化された過去の経験にもとづく行為者の主観的感覚＝意味と、自分の実践と実行条件や他者の実践との関係にもとづく客観的意味、これらの2つの感覚＝意味が照らし合わされるプロセスでもあるということである。実践感



覚による実践は、身体化された過去の経験だけにとづいていではなく、客観的な世界のなかで意味をもつことにも支えられているのである。この4章の議論によって、実践感覚が閉じたものではなく、行為者の実践のなかで更新され続ける開かれたプロセスであることが明らかになった。

次の5章では、sens の方向としての面に注目するために、ブルデューが方向の言い換えとして用いていた「未・来 (à-venir/ à venir)」という概念に注目した。実践感覚は、方向、未・来（一瞬先に起こりそうなこと）を先取りする感覚でもある。

未・来は、従来の研究では、身体化された過去の延長に描かれるものだと考えられていた。しかし本稿は、未・来が過去の延長に予見されるものであると同時に、「現在のなかに刻み込まれているもの」である点に注目した。未・来が「現在のなかにある」ことに注目すると、実践感覚は、単に過去の延長に未・来を描くだけのものではなく、現在に注意を向け現在の具体的な局面や事象から未・来のきざしを読み取るものでもあることがわかる。未・来は行為者の身体化した過去から自動的に示されるものではなく、行為者が現在に注意を向け、その注意のなかで現在の具体的な局面や事象のなかに未・来のきざしを見出すことで読み取り可能になるものなのである。

このように未・来や実践感覚と現在のかかわりに注目するならば、ふたつのことが明らかになる。まず未・来は、単なる過去の延長ではなく、身体化された過去と現在の「交点」であることがわかる。したがって、未・来は、身体化された過去に規定されるとともに、現在の具体的な文脈によっても規定され、現在の文脈の影響を受けて変形するものだと考えられる。したがって、その未・来に導かれる実践は、過去の延長でありながら過去の単純な再生産ではない。

もうひとつ明らかになることは、身体化された過去による未・来の先取り、すなわち過去の経験による実践の構造化は、行為者が現在の具体的な局面や事象に向ける注意のなかで、行為者の能動的な状況への関わり<sup>のなかで</sup>生じているのだということである。過去による構造化は行為者の能動性と独立しているわけではなく、過去による構造化と行為者の現在への能動的な関与は、支え合う関係にあると考えるべきだとわかってきた。

そして、最後の6章では、4章と5章の議論をさらに深め、4章と5章の議論の先により能動的で創造的な行為者を描き出すことを試みた。まず、4章と5章の議論を統合し、各章の議論で重要なキーワードになっていた「客観性」と「現在」についてより詳しく考察する作業をとおして、主観／客観、過去／現在の関係の複雑さと、本稿が明らかにした実践感覚理解がどのような能動的な行為者を含んでいるのかについて論じた。実践感覚のプロセスは、行為者抜きでは考えることのできないものである。実践感覚とは、行為者が客観的世界に感じる意味と方向をとおして主観的意味=方向を再構築し続ける過程であり、行為者と客観的世界のあいだで意味や方向が紡がれ続ける過程である。また、行為者が現在の時点において具体的世界とのあいだでもつ関わりが重要であり、そのなかに（だけ）

身体化された過去は存在する。実践感覚は、行為者が行為者を越えたものに取り憑かれておこなう無意識の実践過程ではなく、行為者が身体化された過去と世界をつないで実践をおこなう能動的な過程である。

このように実践感覚による実践の過程における行為者の存在を認識するならば、その先に、行為者によるさまざまな実践、創造的な実践を描くことが可能になる。まず考えたのは、変化する状況のなかで意味や未-来を見失い、意味や未-来を修正していく行為者だ。変化する状況のなかで行為者は意味や未-来を見失うこともあり、当然失敗することもある。そのような事態をも、実践感覚による実践のモデルのなかで考えることが可能である。また、身体化された過去と客観的世界のつながかたに複数の可能性があることに注目すれば、因習どおりに実践し続ける行為者から、状況に合わせて柔軟に自分を変えていく行為者まで、さまざまな実践・さまざまな行為者を実践感覚のなかで描くことができる。このような身体化された過去と客観的世界のつながかたの多様性のなかに、行為者の創造性、これまで思いもよらなかったつながかたを実現する可能性を見出すことができる。このように実践感覚や行為者を理解することで、決定論でもなく完全な自由を想定するのでもなく、しかし決定論でもあり自由でもあるかたちで行為者と実践を描くことができる。

これまでの研究において、実践感覚やハビトゥスは、無意識的で自動的なものと理解されたり、創造的で能動的な実践過程のメカニズムが十分理解されないままであったりした。本稿は、実践感覚についてのブルデュー自身の議論のなかから、なぜハビトゥスや実践感覚による実践に能動的な行為者や創造性をブルデューが想定することができたのか、その理由・メカニズムを明らかにしてきた。ブルデューにとってハビトゥスや実践感覚は、彼自身の記述が強調する「客観的構造や過去を身体化した構造」という面だけではなく、もう一方の面、「世界を構築し世界に意味（sens）を与えるところの、参画と緊張、注意の直接的関係（une relation immédiate d'engagement, de tension et d'attention）」（Bourdieu [1997]2003: 206=2009: 242）を常に含んだものだったのである。

本稿がブルデューのなかから引き出してきた行為者像、実践観は、批判者たちがブルデューに足りないため補うべきだと考えていた事柄に対応するものである。したがって本稿がブルデューの議論から引き出してきた能動的な行為者像、新しいハビトゥス・実践感覚の理解は、先行研究がハビトゥスを批判した上でブルデューに足りないものを補って到達しようとする地点に近づく。たとえばB・ライールは、「行為（実践、ふるまいなど）とはつねに、行為図式（感覚・運動図式、知覚図式、評価図式、認知図式など）や習慣や様式（見方、感じ方、話し方、ふるまい方）という形で身体化された個人の過去の諸経験と、現在の社会的状況との出会いの地点である。目前に示された個々の『新しい』状況に相対して、行為者は、その状況によって呼び起される身体化された図式を『動員する』ことに

よって（これを動員していることについては必ずしも意識することなく）行動していく」（Lahire 1998[2001]: 81=2013: 129）と述べており、この見方は本稿が5章などで提示した実践観と遠くはないだろう。またN・クロスリーは、反省をハビトゥスに支えられるものと考えており、これは本稿の見解と同じではないが本稿の見解と対立するものでもない。

しかしここで本稿が主張したい大切な点は、このような展開を可能にするのは「習慣」として理解されたハビトゥスではなく「実践感覚」としてのハビトゥスであるということである。ハビトゥスを「習慣」的な面だけで理解すると、ブルデューの議論には足りないところがあるように見える。しかしハビトゥスの「実践感覚」という面に注目し、意味や未来をめぐる感覚と世界と行為者の関係に目を向けるならば、ハビトゥス・実践感覚概念のこれまで批判されていた問題点を乗り越えることができる。そして、実践感覚に注目してとらえなおした実践の過程は、行為者が能動的であること、意識的に実践的に反省しながら実践しているということを明らかにし、行為者の能動性や意識、反省といった概念自体を再検討する必要性を浮かび上がらせる。実践感覚に着目することは、ブルデューによる二元論の乗り越えを不完全なものとして諦めるのではなく、ブルデューがどのように二元論的発想を乗り越えようとしていたのかを積極的に理解・評価し、その先に従来の行為観・行為者観・社会観を越えた理論へと続く道を見出すことを可能にするのである。

## 2 構造としてのハビトゥスから、実践感覚としてのハビトゥスへ

1節では、本論文のここまでの議論をふりかえってきた。本稿では、実践感覚としてのハビトゥスに注目することで、ブルデューの議論のなかに、意味や未来を世界に見出すことによって主観と客観、過去と現在をつなぐ能動的で創造的な行為者の存在を見出してきた。そしてこのような理解は、ブルデュー批判を乗り越えるものであることを示した。

この2節では、本稿の議論がブルデュー自身の議論をある意味で乗り越えるものであることを示したい。ブルデューの議論では行為者の存在がかなり見えにくくなっていた。この節ではその理由を考え、本稿の見出した実践感覚のモデルはブルデューのハビトゥスの描きかたの問題点を乗り越えることができるものであると論じたい。本稿の議論は、ブルデューの理論をブルデューを越えて理解することを可能にするのである。

### ハビトゥスと客観的構造の共犯関係

1章で述べたように、ハビトゥスは、「構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造」（Bourdieu 1980: 88=2001(1):

83) と言われている。ハビトゥスは、実践を産出する身体化された構造、過去の客観的構造に構造化された構造だと考えられている。ブルデューの理論では、このように「構造」としてハビトゥスをとらえ、実践を客観的構造と身体化された構造の関係によって説明することが多い。

ブルデューの議論のなかで論じられる客観的構造とハビトゥスの関係は、2つある。

ひとつめの関係は、先ほど引用した部分にもあった、「過去の客観的構造の身体化＝ハビトゥス」という関係である。この点は、実践感覚にとっても重要である。実践感覚も、過去の経験を身体化した感覚としての側面をもつからである。

もうひとつの関係は、行動する時点での客観的構造と身体化された構造の関係である。

行動の原理は純粹認識の關係のなかで対象としての世界に立ち向かう主体でもなければ、行為者に対して機械的な因果關係を行使する「環境 (milieu)」でもない。行動の物質的あるいは象徴的目的のなかにあるのでもなく、界の諸拘束のなかにあるのでもない。行動の原理は、社会的なものの二つの状態の共犯關係 (complicité) のなかにある。身体となった歴史とモノとなった歴史とのあいだ、より精確に言えば、(社会空間や界の) 構造とメカニズムの形でモノのなかに客体化された歴史とハビトゥスの形で身体のうちに骨肉化された歴史とのあいだの共犯關係のうちにある。この共犯關係が、これら歴史の二つの具現 (réalisations) のあいだのほとんど魔術的な融即關係 (un rapport de participation) の基礎をなしている。(Bourdieu [1997]2003: 217=2009: 255-6)

行動の原理は、身体化された構造（歴史）と現在の客観的構造（客体化された歴史）の共犯關係のなかにあると言われている。すなわち、実践は客観的構造と身体化された構造の共犯關係によって可能になる。この共犯關係が身体化された歴史と客体化された歴史のつながりの基礎にあると説明されている。過去の客観的構造を身体化した構造であるハビトゥスがなぜ今巧みな実践を産出できるのかを、ブルデューは現在の客観的構造と身体化された構造という2つの構造の共犯關係によって説明する。

この、現在の客観的構造と身体化された構造の共犯關係によって実践がうまくできるという議論にはいくつか問題がある。

まず、このように実践の原理が2つの構造の共犯關係にあるとすると、身体化された構造と現在の客観的構造が不一致である場合は、このメカニズムの範囲外ということになる。この説明では、社会が変化しないときしか説明できない。

また、身体化された構造と客観的構造の共犯關係のゆえに行為者の巧みな実践は可能になるという説明では、行為者の外で実践の成功／失敗は定められているように見えてしま

う。これでは、行為者不在の実践のモデルだという批判を招きやすい。

このように身体化された構造としてのハビトゥスと客観的構造の共犯関係のなかで実践を説明するブルデューの議論は、批判を招きやすい弱点をはらんでいるのである。

## 2つの構造のあいだにいる行為者

身体化された構造と客観的構造の一致は、主観主義が描く「生きられた」経験、当たり前の世界が成立する条件であり、重要な議論ではある。

それ〔＝現象学的とよびうる認識様式〕は、社会的世界の「生きられた」経験を独自に特徴づけるもの、すなわちこの世界を自明のもの、当然のこと (*taken for granted*) として理解すること (*appréhension*)、を記述する以上のことはできない。なぜそうなのかというと、それはこの経験の可能性の条件についての問いを排除するからである。それは客観的構造と身体化された構造との一致であって、この一致のために慣れ親しんだ世界の実践的经验を特色づける直接的・即時的 (*immédiate*) 理解という幻想がもたらされるが、同時にこの経験からはそれ自体の可能性の条件を問うことが排除されてしまうのだ。(Bourdieu 1980: 44=2001(1): 38, [ ] 内は引用者による)

だが、ここで気をつけなければならないのは、この身体化された構造と客観的構造との一致は、あくまでも、行為者が世界で起こることを当たり前と感じることを支える背後の条件であり、行為者の実践的经验の次元のはなしではないということだ。2つの構造のあいだの共犯関係は、主観主義を乗り越えるために確かに非常に重要な論点ではある。しかし(だからこそ)、行為者の実践的经验、ブルデューが主観主義と客観主義の対立を乗り越えるために目を向け身を置く必要があると考えた行為者の「世界への実践的な関係」「現実の活動」(Bourdieu 1980: 87=2001(1): 83) については、身体化された構造と客観的構造の一致では説明できないのである。2つの構造の共犯関係では、行為者の実践のありようは描けない。身体化された構造と客観的構造の一致や共犯関係を強調するほど、ブルデューの議論は行為者の実践の現実から遠のいてしまうのである。

構造という言葉には、行為者の現実から遠のかせる作用がある。なぜなら、客観的な構造と身体化された構造の関係は、行為者の実践の背後の条件であり、行為者の実践的经验の次元ではないからだ。行為者の現実を見るためには、構造という言葉から離れて、行為者と世界との実践的関わりのなかに視点を移す必要がある。すなわち、ハビトゥスを実践感覚としてもつ行為者の世界への実践的関わりに目を向けなければならないのである。

本稿では、実践感覚をもつ行為者と世界の関係に注目してきた。4章と5章、6章で論じてきたように、行為者は実践のなかで、主観的意味=方向と客観的意味=方向を照らし合わせたり、身体化された過去が示す意味や未来と具体的な状況のなかに見出せる意味や未来を結びつけて現実化したりしている。実践は、構造としてのハビトゥスと構造としての客観的世界のあいだに生じるのではなく、感覚として身体化されたハビトゥスと世界の具体的な現れのあいだにいる行為者が意味や未来をつかみながらおこなうものである。

そして、ブルデューが2つの構造の共犯関係ゆえに成立していると考えた、身体化されたものと客観的なもののつながりは、実践感覚による実践の過程に注目すると、実践のなかで行為者によって達成されるものだとなる。実践においては、身体化された過去と客観的・具体的な世界の一致の関係は、行為者が意味や未来を見出す営みのなかで実現していくものである。行為者が、実践のなかで意味や未来を探し見出し維持することが、主観と客観、過去と現在の一致・つながりをつくりだすのである。

実践の過程を動かしているのは、身体化された構造と客観的構造の共犯関係ではなく、2つの構造のあいだにいる行為者が世界のなかで意味や未来を探し、見出し、再構築する一連のプロセスであると考えられるべきだろう。実践は、ブルデューの言うように身体化された構造と客観的構造の関係のなかにあるのではなく、行為者が身体化された過去と客観的世界のあいだで主観と客観、過去と現在のあいだにつながりをつくりだそうとすることのなかにあると言えるべきなのである。

ブルデューが言うように、身体化された構造と客観的構造が一致していれば、行為者はスムーズに自明性のなかで実践ができる。この点は確かにとても重要ではある。しかしそれがすべてではない。身体化された構造と客観的構造が不一致であったとしても、そのあいだでなんとか主観と客観、過去と現在をぎりぎりのところでつなごうとする創造的な行為者を考えることができる（たとえば、好景気のなかで育った行為者が不景気に直面したとき、この行為者は意味や未来を完全に失うわけではない。不景気な状況のなかでも、どこかに身体化された過去と世界のつながりを探しだし、何らかの意味や未来を見出していこうとするはずである）。構造としてのハビトゥスから実践感覚としてのハビトゥスへ、身体化された構造と客観的構造の共犯関係から、身体化された過去と客観的世界をつなぐ行為者へ、視点を移していく必要がある。そうすることで、身体化された構造としてのハビトゥスと客観的構造のあいだには見いだせなかった実践する行為者の存在や、変化する状況にたいする実践をも描けるようになる。身体化した過去の客観的構造に決定される行為者像からも距離をとることができる。ハビトゥス概念にたいして見出されていた数々の問題点（能動的な行為者の不在、意識の不在、変化と多様性の問題）は、実践感覚をもつ行為者と世界の関係についての理論としてブルデューの議論を読みなおすとき、乗り越えることができるのである。

身体化された構造としてのハビトゥスは、行為者の実践が現在の具体的状況だけに依存するのではなく、また、行為者から独立した客観的構造だけに操られるものでもないことを示すのに確かに有効ではある。行為者は客観的構造をそれぞれの経験のなかで身体化し、その身体化した構造が実践の原理となる。こう考えることで、実践が客観的構造に規定されていながらも客観的構造に直接決定されているのではないこと、行為者の実践が目の前の状況だけに決定されているのではないことが説明できるようになる。だが、身体化された構造としてハビトゥスを理解することは、実践の背後の条件、行為者の実践的経験の次元ではないところへ視点を移してしまう作用をもっている。そして、ハビトゥス概念によって議論に導入されたはずの行為者は、身体化された社会構造と区別がつかなくなり、まるでハビトゥスが実践しているかのような記述につながる。そうして構造としてのハビトゥスは、行為者不在のところで実践を産出・説明してしまうことになる。

しかし、実践感覚としてのハビトゥスは、上記とはすこし異なる性質をもっている。実践感覚は、もっとも単純に勘・コツ・ノウハウのようなものと理解した場合でも、行為者が現在において状況のなかで活用しない限り存在できないものである。実践感覚は、構造としてのハビトゥスとくらべて、それが活用される「現在」と、それを活用する「行為者」により密着した概念である。また、ブルデューは、感覚という意味のフランス語 *sens* が「意味」と「方向」という別の意味もあわせもつことを活用し、実践感覚とはどういうものか、実践感覚によって実践するとはどういうことかについて論じていた。そこで本稿では、実践感覚をたんなるハビトゥスの「たとえ」、ハビトゥスによる実践が感覚的におこなわれることを示すたとえとして理解して終わるのではなく、実践感覚についてのブルデューの議論を詳しく検討することによって、実践の過程のなかで行為者が果たす役割を明らかにしてきた。行為者は、現在において世界に能動的に注意を向けることによって身体化された過去を存在せしめる存在であり、客観的世界と自分の実践の関係を注視することによって意味や未来を確認・修正し、ハビトゥス＝実践感覚＝意味＝方向を現実化・再獲得・修正しつづける存在である。ブルデューのハビトゥスの理論は、その前提に能動的な行為者の世界への関わりをおくことによってはじめて機能する理論である。行為者の世界への能動的な関わりなくしては、意味も未来も見出されず、身体化された過去も発現せず、実践も構造化されない。すべては行為者の具体的・客観的世界への能動的な関わりからはじまるのである。

本稿は、実践感覚に注目することで、ブルデューの議論では明確に論じられることがすくなくあった行為者の存在をブルデューの自身の議論から引き出してきた。この行為者の存在に目を向けることで、ブルデューの理論を、ブルデュー自身の説明の限界を越えて、単なる再生産の理論ではなく、さまざまな実践と社会の関わりを論じる理論として理解できるようになるのである。

本稿の知見は、ハビトゥス概念についてだけではなく、1章で触れた界や資本といった他の重要な概念についても、ブルデュー自身の説明の限界を越えてより深く理解することを可能にするだろう。たとえば、ブルデューは界のなかである資本を保有する行為者の実践を次のように描く。

たとえてみれば、それぞれのプレイヤーの前には、異なる色のカードの山が置かれており、それぞれのカラーがそのプレイヤーのもつ所与の種類の資本に対応している、といった状態です。プレイヤーのゲームにおける相対的な力、プレイ空間のなかでの位置、そしてゲームのなかでどんな戦略を繰り出すか……さらにプレイヤーのとり動き、危険なことをするのかそれとも用心深くなるか、ゲームをひっくり返すことを狙うのか、それとも守りに入るのか、こういったことすべては、持っているカードの総数、カードの内訳すなわちそのプレイヤーの資本の総量と構造によって決まってくるのです。(Bourdieu and Wacquant 1992: 99=2007: 133)

この説明では、資本の量と構成によって行為者の実践が決定されてしまうような印象を受けるだろう。しかしブルデューの議論は決して「貧弱な資本しかもっていない者がみな必然的に革命的であり、多大の資本をもつ者がすべて機械的に保守的であるということの意味していません」(Bourdieu and Wacquant 1992: 109=2007: 145)。資本や界と行為者のあいだに「機械的ではない」関係を考えるためには、上の引用のような資本と実践の関係のなかに能動的な行為者を見出し、この能動的な行為者が資本量に制約されながらもさまざまな実践をおこなっている過程を考える必要がある。

行為者は、自分の保有するもの（たとえば金銭、芸術にたいする関心や知識、英語が堪能なこと、知り合いの存在など）に意味と未-来を見出すことでそれを資本として現実化させる存在であり、そのようにして見出された資本をめぐって実践することをおして界を成立させる存在である。第三者からは豊富な資本を持っているように見える人であっても、その人が自分の資本に意味と未-来を見出さない限りそれを資本として活用することはできない。どんなに豊富に資本を持っている人であっても、自分の持たない資本に価値や意味を見出すならば、誰よりも革新的で貪欲な人になりうる。

ブルデューの議論では、一見、界の構造や資本の保有量が行為者の実践を決めているように見える。しかし、そのメカニズムのなかには、行為者が具体的で客観的な世界に注意を向け、その世界に向かう注意のなかで自分の保有するもの（物質的なものであれ、形のないものであれ）に意味や未-来を見出し、自分に可能なことを見つけ出していく過程がある。ブルデューが急激な社会の変化に取り残されて時代遅れになっていく人々について描くときも、文化的再生産のメカニズムのなかで選別され排除されていく人々を描くときも、あるいは時代の変化をうまく乗り切っていく人々を描くときも、人々は自分のあずかり知



らない界やハビトゥスのメカニズムに動かされるだけの存在ではない。そこには身体化された過去と客観的・具体的世界をそれぞれに結びつけ展開している行為者がいると考えるべきだろう。6章で描き出したように、実践感覚による実践には、身体化された過去に引きつけて意味や未・来を世界に見出す保守的なものから、世界から提示された新たな意味や未・来の可能性に敏感になる革新的な実践まで、さまざまな実践、さまざまな行為者のありかたが含まれる。資本に従来通りの意味や未・来を見出しつづける行為者もいれば、資本と世界の関係のなかに積極的に新しい意味や未・来を見出していく行為者もいる。資本や界をめぐる実践のなかには、さまざまな行為者のさまざまな実践が存在する。このような理解は、ブルデューの経験的な研究を理解する際により繊細な理解を可能にするだろうし、経験的な研究においてブルデューの知見を活用するときにも柔軟で繊細なツールとして役に立つことができるだろう。このより繊細なツールは、ブルデューの理論にもとづいて、人や社会が変わっていく過程を現実的に描くことにも役立ちうるだろう。

また、ブルデューの研究スタンスや認識論をより深く理解することにも、本稿の知見を役立てることができるだろう。R. Brubaker (1993) は、ブルデューの理論をハビトゥスとして理解する、すなわち、ブルデューの研究をブルデュー自身の理論枠組みを適用して理解することを試み、その議論のなかで、**reflexivity** がハビトゥスのなかに位置づけられると考察すると同時に、この **reflexivity** は研究者にだけ可能なものであり（科学のハビトゥスは **reflexivity** をもつ点で他のハビトゥスとは異なる）、どのようにして研究者は他の行為者に不可能な **reflexivity** を発揮できるのかと問うている (Brubaker 1993: 216, 225)。本稿の提示したハビトゥス・実践感覚についての理解は、ハビトゥスと反省の関係について、そして反省そのものについて新たな理解が可能であることを示した。本稿が見出したこの新たなハビトゥス理解・実践感覚理解でもって Brubaker の試みを再度おこなってみることで、ブルデューの認識論や研究者の **reflexivity** についても理解を深めていくことができるのではないだろうか。これ以上の議論はより考察をすすめてからおこなうべきであろう。ここでは、ブルデュー社会学全体について理解を深めるために本稿の知見が活用できることを示すだけにとどめておきたい。

本稿は、ブルデューを硬直的に読むのではなく、ブルデューを内在的かつ創造的に理解することを試みた。本稿の議論の先に、ブルデュー理論のより積極的で創造的な活用の可能性が広がっているだろう。

### 3 二元論を乗り越える新しい行為者像へ

最後に、本稿の議論が、二元論という問題にたいして、あるいは、現代の社会学理論にたいしてどのような知見をもたらしうるのかを論じておきたい。

本稿は、実践感覚による実践の過程のなかに、行為者の能動性や意識を見出してきた。本論のなかでも論じたように、この能動性や意識は、一般的にイメージされる「能動性」や「意識」とはすこし異なっている。本稿が見出した行為者の能動性は、行為者が現在、具体的な事柄に注意を向けることでそのなかに意味や未来のきざしをつかむことであり、身体化された過去や客観的・具体的世界と切り離して考えることができないものである。意識も、自分に向かうのではなく、具体的な対象に専心している、対象や世界に向かう意識であった。

これまで、ハビトゥスは二元論を乗り越えられていないと批判されていた。その理由のひとつはブルデューの説明不足にあるが、もうひとつの理由は、批判者たちが従来型の「能動性」や「意識」をブルデュー理論のなかに探そうとしていたからだと考えられる。本稿の知見が示すのは、二元論を乗り越えるためには、客観主義／主観主義などの二元論のなかで考えられていた主観や行為者、主体、意識の観念を根底から再考しなければならないということである。二元論を乗り越えた先に見出されるべき行為者の像は、二元論を乗り越える前の、主観主義寄りの行為者概念ではないはずであり、二元論を乗り越え、より行為者の現実的な実践に沿った行為者理解・社会の理解をおこなうためには、社会のなかで実践する行為者とはいかなる存在なのか、社会のなかで実践するとき行為者が能動的であるとはどういうことか、行為者の意識はどうであるのか、すべてをあらためて考え直さなければならないのである。本稿の議論で見出した「能動性」や「意識」のありかたは、行為者概念や意識概念などについて再考する礎になると考えられる。

二元論の問題を離れても、行為者をいかに概念化するかは、社会学理論、現代社会論にとっても重要な問題である。近年、再帰的近代化の理論や批判的实在論<sup>45</sup> (critical realism) と関係して、再帰的・反省的 (reflexive) な行為者像が重視される傾向にあるが、この再帰的・反省的行為者や reflexivity については、社会に埋め込む (embed) 必要があると指摘されている。たとえば D. Farrugia (2013) は、再帰的・反省的行為者や reflexivity を社会的文脈に適切に埋め込むために、「アイデンティティや行為 (actions) が社会構造によって形づくられる方法を記述する」(Farrugia 2013: 289) ものとしてブルデューのハビトゥスについての議論を参照し<sup>46</sup>、reflexivity とハビトゥスをつなぐことで再帰的・反省的な行為者を社会に「埋め込む」ことを試みている。行為者と社会をいかに関連づけるか、行為者をどのように概念化するかは、二元論の文脈を離れても依然として重大な問題である。

再帰的・反省的な行為者は、自分について反省し、自分と対話するなかで、自分の人生

<sup>45</sup> 批判的实在論の代表的な論者としては、ギデンズの構造化理論を批判し乗り越えていこうとする Margaret S. Archer があげられる。

<sup>46</sup> ここでやはりハビトゥスは、行為者の能動的な側面ではなく、行為者と社会構造の関わりを示す概念として必要とされている。

をつくり上げていく存在であるだろう。それにたいして、本稿の議論が実践感覚のなかに見出した行為者は、「自分と対話する」行為者ではなく、いわば「世界と対話する」ことによって能動的で意識的な実践の「主体」となる行為者である。本稿が見出した新しい行為者像は、自分と対話する行為者を社会に埋め込むことではなく、別のかたちで能動的な行為者を社会と関連づける可能性を示す。本稿が示すのは、社会と切り離して概念化した行為者をあとから社会に関連づけるのではなく、最初から社会との関連のなかで行為者概念を練る必要性と可能性である。

ブルデューの理論は、個人と社会でいうならば、社会によりウェイトをおいた議論であると理解されることが多い。そのようなブルデューの理論だからこそ、そのなかで行為者を考えること、行為者の能動性や創造性について考えることをとおして見出した本稿の知見は、社会のなかのリアルな行為者とは、社会学にとっての行為者像とはどうあるべきかを考えるにあたって「意味のあるもの」だと考えられる。

本稿が見出した新しい行為者像の基盤となっていたのは、実践感覚、すなわち「感じること」であった。本稿は、実践感覚を中心としてブルデュー理論を読み解くことをとおして、行為者が「感じること」によって能動的・創造的に実践するありさまをブルデューのテキストから引き出してきた。社会学理論、とくに行為理論においては「考えること」が重視されがちであり (reflexivity の議論が典型的)、「感じること」は低く見られがちである。それにたいして、ブルデューの実践感覚をめぐる議論で一貫して底に流れているのは、妥当だと感じたり、腑に落ちたり、納得したり、自信をもったり、居心地が悪かったり、不満だったりとという広い意味での「感じること」の重要性である。「考えること」は実践の過程の一部でしかなく、実践を動かしているのは「感じること」である。二元論を乗り越え、社会による構造化と行為者の能動性を両立させる行為理解や行為者理解に至るためには、この「感じること」がおそらく鍵となるのだろう。ブルデュー以外の研究では、たとえば、感覚よりは狭い概念である感情については、これまでも A・ホックシールド (Hochschild 1983=2000) の研究などがある。あるいは、M・チクセントミハイの「フロー体験」についての研究 (Csikszentmihalyi 1990=1996) は、水を得た魚のような状態、人が実践感覚によってもっともうまく実践している状態についてさまざまな知見を与えてくれる。今後は、このような感覚や感情をめぐる他の研究と本稿の知見を対話させながら、ブルデューの理論を実践感覚の理論としてさらに考察・展開していく必要があるだろう。

実践感覚、「感じること」を基盤とする実践観は、わたしたちの日常を描く、「現実の活動」により近い行為理解ではないかと考えられる。本稿の議論の先には、二元論を乗り越えた、より現実的な行為理解への道、「考えること」より「感じること」を基盤とした新しい行為の理論、行為者の理論、社会学理論への道が続いている。



## 文献

以下に、本論文で引用・参照・参考にした文献の一覧をあげる。

なお、本文中で邦訳のある文献から引用している箇所については、必要に応じて訳文を変更している場合がある（英訳を参照した場合もある）。

### 【 ピエール・ブルデューの文献 】

- Bourdieu, Pierre, [1972]2000, « Le sens de l'honneur », *Esquisse d'une théorie de la pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Éditions du Seuil, 19-60. (=1979, Richard Nice trans., "The sense of honour", *Algeria 1960*, Cambridge University Press, 95-132.)
- , 1977a, *Algérie 60: structures économiques et structures temporelles*, Éditions de Minuit. (=1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』藤原書店.)
- , 1977b, Richard Nice, trans., *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press.
- , 1979, *La distinction: critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II——社会的判断力批判』藤原書店.)
- , 1980, *Le sens pratique*, Éditions de Minuit. (=2001, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚(1)』（新装版）みすず書房；2001, 今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳『実践感覚(2)』（新装版）みすず書房.）
- , 1984, *Homo academicus*, Éditions de Minuit. (=1997, 石崎晴己・東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店.)
- , 1987, *Choses dites*, Éditions de Minuit. (=1991, 石崎晴己訳『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店.)
- , 1988, *L'ontologie politique de Martin Heidegger*, Éditions de Minuit. (=2000, 桑田禮彰訳『ハイデガーの政治的存在論』藤原書店.)
- , 1989, *La noblesse d'État: Grandes écoles et esprit de corps*, Éditions de Minuit. (=2012, 立花英裕訳『国家貴族 I・II——エリート教育と支配階級の再生産』藤原書店.)
- , 1990, Richard Nice trans., *The Logic of Practice*, Stanford University Press. (1980, *Le sens pratique* の英訳)
- , 1992, *Les règles de l'art: genèse et structure du champ littéraire*, Éditions du

- Seuil. (=1995, 1996, 石井洋二郎訳『芸術の規則 I・II』藤原書店.)
- , 1994, *Raisons pratiques: sur la théorie de l'action*, Éditions du Seuil. (=2007, 加藤晴久・石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性——行動の理論について』藤原書店.)
- , 1996, *Sur la télévision*, Liber éditions. (=2000, 櫻本陽一訳『シリーズ<社会批判> メディア批判』藤原書店.)
- , [1997]2003, *Méditations pascaliennes*, Éditions du Seuil. (=2009, 加藤晴久訳『パスカルの省察』藤原書店.)
- , 2000, Richard Nice trans., *Pascalian Meditations*, Stanford University Press. ([1997]2003, *Méditations pascaliennes* の英訳)
- , 2002, *Le bal des célibataires: crise de la société paysanne en Béarn*, Éditions du Seuil. (=2007, 丸山茂・小島宏・須田文明訳『結婚戦略——家族と階級の再生産』藤原書店.)
- , 2004, *Esquisse pour une auto-analyse*, Éditions raisons d'agir. (=2011, 加藤晴久訳『自己分析』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre et Jean-Claude Passeron, 1964, *Les Héritiers: les étudiants et la culture*, Éditions de Minuit. (=1997, 石井洋二郎監訳, 小澤浩明・高塚浩由樹・戸田清訳『遺産相続者たち——学生と文化』藤原書店.)
- , 1970, *La Reproduction: éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Éditions de Minuit. (=1991, 宮島喬訳『再生産』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre et Hans Haacke, 1994, *Libre-échange*, Éditions du Seuil. (=1996, コリン・コバヤシ訳『自由—交換——制度批判としての文化生産』藤原書店.)
- Bourdieu, Pierre・加藤晴久, 加藤晴久訳, 2002, 「現代フランス思想と私——フーコーからブローデルまで」加藤晴久編『ピエール・ブルデュー——1930—2002』藤原書店, 71-101.

## 【 A 】

- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: the Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press. (=2007, 佐藤春吉訳『実在論的社会理論——形態生成論アプローチ』青木書店.)

Atkinson, Will, 2010, “Phenomenological Additions to the Bourdieusian Toolbox: Two Problems for Bourdieu, Two Solutions from Schutz”, *Sociological Theory*, 28(1): 1-19. (doi: 10.1111/j.1467-9558.2009.01362.x)

## 【 B 】

Bauman, Zygmunt, 2001, *The Individualized Society*, Polity Press. (=2008, 澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳『個人化社会』青弓社.)

Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局.)

Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房.)

Beck, Ulrich・鈴木宗徳・伊藤美登里編, 2011, 『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店.

Bernstein, Basil, 1996, *Pedagogy, Symbolic Control and Identity: Theory, Research, Critique*, Taylor & Francis. (=2000, 久富善之・長谷川裕・山崎鎮親・小玉重夫・小澤浩明訳『〈教育〉の社会学理論——象徴統制, <sup>ペダゴジー</sup>〈教育〉の言説, アイデンティティ』法政大学出版局.)

Boltanski, Luc, 2011, 三浦直希訳『偉大さのエコノミーと愛』文化科学高等研究院出版局.

Brubaker, Rogers, 1993, “Social Theory as Habitus”, Craig Calhoun, Edward LiPuma and Moishe Postone eds., *Bourdieu: Critical Perspectives*, Polity Press, 212-34.

## 【 C 】

Camic, Charles, 1986, “The Matter of Habit”, *American Journal of Sociology*, 91(5): 1039-87.

Chartier, Roger, 1991, *The Cultural Origins of the French Revolution*, Duke University Press. (=1994, 松浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』岩波書店.)

———, 1992, 福井憲彦訳『読書の文化史——テキスト・書物・読解』新曜社.

Crossley, Nick, 1996, *Intersubjectivity: The Fabric of Social Becoming*, Sage. (=2003, 西原和久訳『間主観性と公共性——社会生成の現場』新泉社.)

- , 2001a, *The Social Body: Habit, Identity and Desire*, Sage. (=2012, 西原和久・堀田裕子訳『社会的身体——ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社.)
- , 2001b, “The Phenomenological Habitus and Its Construction”, *Theory and Society*, 30: 81-120.  
(<http://link.springer.com/article/10.1023%2FA%3A1011070710987?LI=true>)
- , 2002a, *Making Sense of Social Movements*, Open University Press. (=2009, 西原和久・郭基煥・阿部純一郎訳『社会運動とは何か——理論の源流から反グローバルズム運動まで』新泉社.)
- , 2002b, 西原和久訳, 「ハビトゥス・行為・変動——ブルデューの批判的検討」『現代社会理論研究』12: 329-57.
- , 2003, “From Reproduction to Transformation: Social Movement Fields and the Radical Habitus”, *Theory, Culture & Society*, 20(6): 43-68.
- , 2005, *Key Concepts in Critical Social Theory*, Sage. (=2008, 西原和久監訳, 杉本学・郭基煥・阿部純一郎他訳『社会学キーコンセプト』新泉社.)
- Csikszentmihalyi, Mihaly, 1990, *Flow*, Harper and Row. (=1996, 今村浩明『フロー体験——喜びの現象学』世界思想社.)

## 【 D 】

- de Certeau, Michel, 1980, *L'Invention du quotidien 1: Arts de faire*, Union Générale d'Éditions. (=1987, 山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社.)
- Dubet, François, 1994, *Sociologie de l'expérience*, Éditions du Seuil. (=2011, 山下雅之監訳, 濱西栄司・森田次朗訳『経験の社会学』新泉社.)

## 【 E 】

- 江原由美子, 1985, 『生活世界の社会学』勁草書房.
- , 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- , 2005, 「行為・相互行為・社会的場面」宮島喬編『現代社会学 改訂版』有斐閣, 10-33.
- Elder-Vass, Dave, 2010, *The Causal Power of Social Structures: Emergence, Structure and Agency*, Cambridge University Press.
- Elias, Norbert, 1970, *Was ist Soziologie?*, Juventa Verlag. (=1994, 徳安彰訳『社会学とは何か——関係構造・ネットワーク形成・権力』法政大学出版局.)



## 【 F 】

- Farnell, Brenda, 2000, "Getting Out of the Habitus: An Alternative Model of Dynamically Embodied Social Action", *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 6: 397-418. (doi: 10.1111/1467-9655.00023)
- Farrugia, David, 2013, "The Reflexive Subject: Towards a Theory of Reflexivity as Practical Intelligibility", *Current Sociology*, 61(3): 283-300.
- 福島真人, 2001, 『暗黙知の解剖——認知と社会のインターフェイス』金子書房.
- , 2010, 『学習の生態学——リスク・実験・高信頼性』東京大学出版会.

## 【 G 】

- Giddens, Anthony, 1979, *Central Problems in Social Theory*, University of California Press. (=1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社.)
- , 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- , 1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*, Second Edition, Polity Press. (=2000, 松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準 [第二版]——理解社会学の共感的批判』而立書房.)

## 【 H 】

- Harker, Richard, Cheleen Mahar and Chris Wilkes eds., 1990, *An Introduction to the Works of Pierre Bourdieu: The Practice of Theory*, The Macmillan Press. (=1993, 滝本往人・柳和樹訳『ブルデュー入門——理論のプラチック』昭和堂.)
- 長谷川公一, 2005, 「社会の構造と構造化」宮島喬編『現代社会学 改訂版』有斐閣, 34-52.
- Hochschild, Arlie Russell, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press. (=2000, 石川准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社.)
- 堀田裕子, 2010, 「agency に関する一考察——N.クロスリーの P.ブルデュー論に基づいて」『愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要』13: 133-47.
- Husserl, Edmund, 1952, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und*

*phänomenologischen Philosophie, Zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, Martinus Nijhoff. (=2009, 立松弘孝・榊原哲也訳『イデーンⅡ－Ⅱ 構成についての現象学的諸研究』みすず書房.)

## 【 I 】

今村仁司, 1989, 『排除の構造——力の一般経済序説』青土社.

———, 2001, 「あとがき」 Pierre Bourdieu (今村仁司・港道隆訳) 『実践感覚 1 (新装版)』藤原書店, 279-81.

石井洋二郎, 1993, 『差異と欲望——ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』藤原書店.

磯直樹, 2008, 「ブルデューにおける界概念——理論と調査の媒介として」『ソシオロジ』53(1): 37-53.

## 【 J 】

Jenkins, Richard, 2002, *Pierre Bourdieu*, revised edition, Routledge.

## 【 K 】

糟谷啓介, 2003, 「言語と権力——言語的権威の承認の構造」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力——反射するブルデュー』藤原書店, 139-61.

片岡栄美, 2000, 「文化的寛容性と象徴的境界——現代の文化資本と階層再生産」今田高俊編『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東京大学出版会, 181-220.

———, 2003, 「『大衆文化社会』の文化的再生産——階層再生産、文化的再生産とジェンダー構造のリンケージ」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力——反射するブルデュー』藤原書店, 101-35.

加藤晴久編, 2002, 『ピエール・ブルデュー——1930—2002』藤原書店.

King, Anthony, 2000, “Thinking with Bourdieu Against Bourdieu: A ‘Practical’ Critique of the Habitus”, *Sociological Theory*, 18(3): 417-33. (doi: 10.1111/0735-2751.00109)

小松田儀貞, 1991, 「ブルデュー社会学における『戦略』論の原像——構造と行為をつなぐ契機」『社会学研究』57: 135-58.

近藤理恵, 1996, 「P・ブルデューにおける『実践理論』の生成——『野生の思考』から『身体知』へ」『立命館産業社会論集』32(2): 79-94.

———, 1997, 「危機的状況に対する実践 (pratique)の力——P・ブルデューにおける

- 時間」『立命館産業社会論集』32(4): 199-216.
- 倉島哲, 2000, 「ハビトゥス概念の批判的検討——『プラチック理論の概要』のテキストから」『ソシオロジ』45(2): 3-19.
- , 2007, 『身体技法と社会学的認識』世界思想社.

## 【 L 】

- Lahire, Bernard, [1998]2001, *L'homme pluriel: les ressorts de l'action*, Nathan. (=2013, 鈴木智之訳『複数的人間——行為のさまざまな原動力』法政大学出版局. )
- , 2003, “From the Habitus to an Individual Heritage of Dispositions. Towards a Sociology at the Level of the Individual”, *Poetics*, 31: 329-55.  
(<http://dx.doi.org/10.1016/j.poetic.2003.08.002>)
- Lamont, Michèle, 2012, “How Has Bourdieu Been Good to Think With? The Case of the United States”, *Sociological Forum*, 27(1): 228-37.  
(doi: 10.1111/j.1573-7861.2011.01309.x)
- Lash, Scott, 1990, *Sociology of Postmodernism*, Routledge. (=1997, 田中義久監訳, 清水瑞久・須藤廣・宮沢昭男・佐幸信介訳『ポスト・モダン性の社会学』法政大学出版局. )
- Lave, Jean and Etienne Wenger, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press. (=1993, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書. )
- Lizardo, Omar, 2012, “The Three Phases of Bourdieu’s U.S. Reception: Comment on Lamont”, *Sociological Forum*, 27(1): 238-44.(doi: 10.1111/j.1573-7861.2011.01310.x)

## 【 M 】

- 三浦直子, 1998, 「手法としての社会学理論——いかにしてプラチック理論は構築されたか」『年報社会学論集』11: 203-12.  
(<http://jlc.jst.go.jp/JST.Journalarchive/kantoh1988/1998.203>)
- , 1999, 「反省的 sociology の生成——ブルデュー社会学における認識論の位置づけをめぐって」P.ブルデュー社会学研究会『象徴的支配の社会学——ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣, 1-28.
- Mische, Ann, 2012, “Bourdieu in Contention and Deliberation: Response to Lamont and Lizardo”, *Sociological Forum*, 27(1): 245-50. (doi: 10.1111/j.1573-7861.2011.01311.x)
- 宮島喬, 1994, 『文化的再生産の社会学——ブルデュー理論からの展開』藤原書店.

- , 1995, 「文化と実践の社会学へ」 宮島喬編『文化の社会学——実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社, 3-13.
- , 2001, 「文化的再生産論の可能性」 情況出版編集部『ブルデューを読む』情況出版, 186-92.
- , 2003, 「エピローグ」 宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力——反射するブルデュー』藤原書店, 371-85.
- , 2005, 「文化と現代社会」 宮島喬編『現代社会学 改訂版』有斐閣, 53-70.
- , 2007, 「社会学のアイデンティティ——ブルデューとギデンズの理論的交錯点を通して」『応用社会学研究』49: 297-305.
- , 2011, 「客観主義・主観主義を超えて——P.ブルデュー『実践感覚』」 井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 別巻 社会学的思考』世界思想社, 207-16.
- 宮島喬編, 1995, 『文化の社会学——実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社.
- 宮島喬・石井洋二郎編, 2003, 『文化の権力——反射するブルデュー』藤原書店.
- 森山達矢, 2009, 「身体と反省・再帰性——N.クロスリーの身体論の検討」『現代社会学理論研究』3: 150-62.
- Mouzelis, Nicos P., 2008, *Modern and Postmodern Social Theorizing: Bridging the Divide*, Cambridge University Press.
- 村井重樹, 2005, 「目的—手段図式から習慣へ——パーソンズとブルデューの功利主義批判を通して」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』60: 43-54.
- , 2008, 「『ハビトゥス』概念の行為論的射程——ミード理論からの示唆による『実践』の再把握に向けて」『ソシオロジ』52(3): 35-51.
- , 2010, 「諸個人のハビトゥス——複数の諸性向と文化的実践の諸相」『年報社会学論集』23: 176-87.
- , 2011, 「習慣の社会理論——ハビトゥス概念の批判的継承」慶應義塾大学大学院社会学研究科 2011 年度博士学位論文.

## 【 O 】

- 荻野昌弘, 1995, 「構造主義とその後」 荻野昌弘・正村俊之・三上剛史・中島道男・小林久高『社会学の世界』八千代出版, 165-90.
- , 2005, 「ピエール・ブルデューの社会学——その成果と限界」 斉藤悦則・荻野昌弘編『日仏社会学叢書第三巻 ブルデュー社会学への挑戦』恒星社厚生閣, 137-56.
- 大前敦巳, 1993, 「P. ブルデューにおけるプラティックと時間——テンポラルな時間とクロノロジックな時間のアンチノミー」『ソシオロジ』38(1): 3-20.

## 【 P 】

Polanyi, Micheal, 1966, *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul. (=2003, 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房.)

## 【 S 】

Sayer, Andrew, 2005, *The Moral Significance of Class*, Cambridge University Press.

Schiltz, Marc, 1982, "Habitus and Peasantisation in Nigeria: a Yoruba Case Study", *Man*, 17(4): 728-46.

Sewell, William H., Jr., 1992, "A Theory of Structure: Duality, Agency, and Transformation", *American Journal of Sociology*, 98(1): 1-29.

曾我静男, 1994, 「P. ブルデューのプラティックをめぐって(2)——〈表象=再現的思考〉の限界画定」『大同工業大学紀要』30: 39-54.

鈴木智之, 1997, 「ブルデューあるいは二重の絶縁の戦略——二元論を越えて」那須壽編『クロニクル社会学——人と理論の魅力を語る』有斐閣, 257-70.

———, 2007, 「複数のハビトゥス——P・ブルデューから B・ライールへ」山岸健編『社会学の饗宴Ⅱ 逍遙する記憶——旅と里程標』, 三和書籍, 115-35.

Swartz, David, 1997, *Culture & Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*, The University of Chicago Press.

Sweetman, Paul, 2003, "Twenty-first Century Dis-ease? Habitual Reflexivity or the Reflexive Habitus", *The Sociological Review*, 51(4): 528-49.

(doi: 10.1111/j.1467-954X.2003.00434.x)

## 【 T 】

田原音和, 1993, 『科学的知の社会学——デュルケームからブルデューまで』藤原書店.

竹内洋, 2009, 「文化資本——P.ブルデュー『ディスタンクシオン』他」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス3 文化の社会学』世界思想社, 249-58.

田辺浩, 1995, 「行為理論の革新——構造化、行為、反省性」宮島喬編『文化の社会学——実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社, 14-39.

田辺繁治, 1989, 「民族誌記述におけるイデオロギーとプラクティス」田辺繁治編著『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』同文館出版, 95-119.

———, 2002, 「再帰的人類学における実践の概念——ブルデューのハビトゥスをめぐり、その彼方へ」『国立民族学博物館研究報告』26(4): 533-73.

———, 2003, 『生き方の人類学——実践とは何か』講談社.

———, 2010, 『「生」の人類学』岩波書店.

## 【 U 】

宇都宮京子, 1995, 「『行為と自省性』をめぐる理論の系譜」宮島喬編『文化の社会学——実践と再生産のメカニズム』有信堂高文社, 161-85.

———, 2004, 「社会的行為と予測可能性——知と無知の間」社会科学基礎論研究会『年報 社会科学基礎論研究 第3号 〈危機の時代〉の行為論』ハーベスト社, 63-77.

## 【 W 】

Wacquant, Loïc J. D., 1992, “Toward a Social Praxeology: The Structure and Logic of Bourdieu’s Sociology”, Pierre Bourdieu and Loïc J. D. Wacquant, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press: 1-59. (=2007, 「社会的プラクシオロジー実践の理論に向けて——ブルデュー社会学の構造と論理」Pierre Bourdieu and Loïc J. D. Wacquant, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店, 15-93. )

———, [2004]2006, *Body & Soul: Notebook of an Apprentice Boxer*, Oxford University Press. (=2013, 田中研之輔・倉島哲・石岡丈昇訳『ボディ&ソウル——ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』新曜社. )

Wacquant, Loïc J. D. ed., 2005, *Pierre Bourdieu and Democratic Politics: The Mystery of Ministry*, Polity Press. (=2009, 水島和則訳『国家の神秘——ブルデューと民主主義の政治』藤原書店. )

Weber, Max, 1922, *Soziologische Grundbegriffe, Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店. )

## 【 Y 】

山本哲士, 1992, 「プラチックとプラクシスの差異——客観化することの客観化：一つの構造主義批判」山本哲士・柳和樹・滝本往人『プラチック理論への招待——暗黙の思考領域をどうとらえるか』三交社, 8-88.

———, 2007, 『〔増補版〕ピエール・ブルデューの世界』三交社.

山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房.

矢田部圭介, 1999, 「理に適ったふるまいとしてのプラティック——シュツからブル

デューへ」 P.ブルデュー社会学研究会『象徴的支配の社会学——ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣，77-118.

安田尚，1998，『ブルデュー社会学を読む——社会的行為のリアリティーと主体性の復権』青木書店.





## 初出一覧

- 2008, 「le sens pratique とは何か——sens 概念から P.ブルデュー『実践感覚』を読む」『奈良女子大学社会学論集』15: 69-83.  
→ 1章・4章 (改変・加筆)
- 2011, 「ハビトゥス・規則性・変化——ブルデュー社会学理論の可能性」『奈良女子大学社会学論集』18: 151-64.  
→ 1章・2章 (改変・加筆)
- 2013, 「ハビトゥス批判を乗り越える——実践感覚概念に着目して」『ソシオロジ』58(1): 3-18.  
→ 1章・2章・3章・5章 (改変・加筆)

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。

まず、本研究に関して終始丁寧なご指導をいただきました主任指導教員の中島道男先生に心より厚く御礼申し上げます。また、折に触れたくさんのご助言をいただきました副指導教員の栗岡幹英先生、小川伸彦先生、吉田容子先生に深く感謝申し上げます。審査委員会に審査委員として加わっていただきました保田卓先生にも、本論文をご精読いただき的確なコメントをいただきましたことを深く御礼申し上げます。そして、私が博士後期課程に進学してから数年間副指導教員をしていただいた戸祭由美夫先生にも心より感謝申し上げます。先生方の鋭いご指摘やあたたかい励ましに導かれ、なんとか論文を書きあげることができました。本当にありがとうございました。

博士前期課程や学部時代においては、井上忠司先生、斎藤友里子先生にご指導をいただきました。また、『ディスタクシオン』の読書会などで大野道邦先生にもお世話になりました。先生方には社会学の奥深さや研究のおもしろさを教えていただきました。心から感謝申し上げます。

また、学会や研究会などさまざまな機会に、多くの方からたくさんのご助言やご教示をいただきました。ひとりひとりお名前を挙げることはできませんが、ここに深く御礼申し上げます。

奈良女子大学大学院の院生の皆様、先輩の皆様には、さまざまなかたちで励まし支えていただきました。特に、大淵裕美さん、座主果林さん、佐藤令奈さんには、小さな悩みから研究の方向性に至るまで相談にのっていただきました。本当にありがとうございました。

最後に、研究生生活をあたたかく見守り支えてくれた母に、心より感謝いたします。